Silver Ring

紫花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Silver Ring

【Nコード】

N0616F

【作者名】

紫花

【あらすじ】

朝、目覚めるとそこには銀色の鎌を持った女の子が！彼女はにっこり笑って言った。「世界の平和のために、一回死んでください」
異常な生命力を持ったごく普通の少年と、死神みたいな天使の少女が織り成す、輪廻転生ラブファンタジー。

2009.9.25 完結いたしました！

それぞれの章読了後、番外編集「Pink y Ring」を読む事をお薦めいたします。

序章・下界編・

どこか遠く、遙か遠く。

どこともしれない異なる空間にそれは確かにあった。

名は無い。

だがそれは彼等や彼女等にとってはどうでも良い事であった。

ただ広大で、真っ白な空間。

そこに響く一つの靴の音。

幾重にも響き、混じりあい、やがて虚空に溶けていく。

靴音の主は歩みを止め、口を開く。

二つに一房ずつ結ばれた真っ直ぐ伸ばされた髪、体の周囲に浮かぶ羽衣が少女の動きに合わせて止まる。

「呼びましたか？」

彼女は靴音の消えた空間に言葉をのせる。

だがそれに返る言葉はない。

いや、あった。

彼女の頭の中に返っていた。

よく来ました、紗良・セイクル。使命を渡します。

「使命ですか？」

はい。あなたには地上に降りてもらい、ある魂をここに連れてきて欲しいのです。

「…その魂は一体何を？」

罪を犯した訳ではないのです。私の不手際で少し生命力を与えすぎてしまい、他のバランスを崩すおそれがあるので…

「そうですか。」

紗良は自信に満ちた瞳で言った。

「わかりました、その使命、やり遂げてみせます。」

頼もしいですね。頑張ってください。

「はい！」

そして紗良は空間を指でなぞった。なぞる指は淡く光っており、光は消えずに空間に残っている。

たくさんの図形を描き、出来たそれは魔法陣。
紗良はそれに手を翳し、呪文を唱える。

その時だった。

紗良・セイクル、そういえばあなたは確か、この使命が終わったら大天使になれるのでは？

大天使は、神の補佐とも呼ばれる天使のエリートである。とてもそこまで辿り着く天使は少なく、現在いる大天使もたった五人しかない。

その素質があるのに大天使にならず、転生の道を歩む天使もいるので、大天使になりにくいという訳でもないが…。

「そうです。だから私は必ずこの使命をやり遂げて、大天使になります！見ていて下さい。」

分かりました。応援していますよ。

「ありがとうございます、神様！」

そして鋭く息を吸い、魔法陣を発動させる。

「トランスフェアレンス！！」

魔法陣が光を放ち、光は紗良を呑み込んだ。後には、真っ白な空間が残るだけだ。

魔法陣の光に包まれた紗良は、その光に乗りながら目的地を目指していた。

使命を渡された際に、どこの誰を連れて来るかも同時に知らされる。紗良はそれを思い出し、使命の確認をする。

「えと…、種族は人間、性別は男。『地球』に存在、か。簡単そう

」

魔法陣の桜色の光越しに、目当ての星を見つける。
蒼く、白く、漆黒より暗い闇の中に佇む惑星。
紗良の顔は笑みを作り、蒼を慈しむように見る。
光と同じ色の口唇を開き、呟く。

「待っててね、人間クン」

真っ直ぐに迷いなく、天使は翔ぶ。

運命はそして、回り出す。

序章・下界編・（後書き）

ここからが始まりです。

温かい目で見ていただくと幸いです。

閲覧ありがとうございました。

一章

雀の声で目が覚めた。

日の光は白く、割と昼に近い時刻である事を教えてくれる。
目を擦りながら身を起こし、

俺の体に乗っている女の子を見つけた。

…こんな時に言うのもなんだが、可愛い。

「おはよう!」

「…おはよう」

女の子は空間に手を伸ばした。

見えるはずのその手は、そこに俺の部屋の模様をしたカーテンがあるかのように、ある一点で見えなくなっていく。

しばらく何かを探すようにしていた手は、おもむろに再度俺の目に映る。

だが何かを手にしていった。

銀に光る、刃と棒。

刃は幅広で三日月形、刃が付いた棒は柄えと言うのが一番相應しい。
鎌だ。

死神が持ったりするあの鎌が女の子の手にあった。

「じゃ、死んでね。

おやすみ」

そう言っただけの子は鎌を振りかぶり、俺に向かって斬りつけてきた。

「うわあああ!!」

寝返りをうつように壁際に回避。

鎌が空を薙いだ。

鎌に付いていた鈴が音をたてた。

心臓が突然の事態に踊った。

バクバク言っている。

「あーあ、逃げられた」

少女は野良猫に逃げられたかのように言った。

なんてヤツだ…。

「な、なんなんだお前!!」

人の家に、勝手に入って来て!!」

「え？」

私人間じゃないよ？」

「…じゃあ、何だお前…？」

俺はそこで彼女の手の手の中にある鎌を見た。

俺が導き出した結論は、

「…悪魔か…」

「失礼な！」

私は天使だよ！」

「…て、天使い！？」

「そう。

神様から使命を渡され、下界に降りてきた天使、『墮天使』です！
…だから」

銀色の鎌を持った自称天使の少女は、にっこり笑って言った。

「世界の平和のために、一回死んで下さい」

* * *

「なんで俺が死ななきゃならないんだよ！？
意味分かんねーよ！！」

「えと、ちよつと神様が失敗して、君にありえないぐらいの生命力
を注いじやったの。」

例えば、車に轢かれて助かったみたいなさ、君にはない？」

確かにある。

五才の時、公園から道路に転がったボールを追いかけて、トラック
に轢かれて無傷で済んだ事がある。

さらに九才の時、友達の家のレストランから身を乗り出し過ぎて八
階から落ちたがやはり無傷だった。

等々、そんな「九死に一生」な出来事は、数え上げたらキリがない

程たくさんある。

「君のせいで助かるべき人間が助かっていないんだ。だから一度リセットして、普通の人間並の生命力に戻ってもらおう。人生もリセットされちゃうけど」

「嫌だからな、そんなの。」

俺は絶対そんな理由で死なないからな！」

「ダメだよ、わがまま言っちゃ。」

人間死ぬ時は死ぬんだから！」

「明るく言っな！」

ていうか、死んだらどうなるんだ？」

「大丈夫！その辺りの配慮はしてあるよ。」

天使は笑って言った。

「いなかった事になるだけだから。」

その目は笑っていなかった。

「……………」

俺は黙る事しか出来なかった。

「…という事だよ！
人間・堤^{つづみ}衛^{えいた}多^たくん」

「え！？

なんで俺の名前知ってた！？」

「神様は何でも知ってるんだよ」

鎌をどこかにしまい、天使は浮き上がる。

「それじゃ、死にたくなったらいつでも言ってね」

笑って、彼女は窓から外へ出た。

「え！？

すぐ殺すんじゃないのか？」

「死にたいの？」

「そんな訳ないだろ。

…その、どこ行くのかと、思って…」

言葉の最後は、言った自分でも聞き取れない程小さかった。

「神様に報告だよ。

それが済んだら死んでもらうからね」

にっこり笑って天使は姿を消した。

「…なんなんだ、マジで…」

* * *

衛多くんの家の屋根の上、私はいた。

神様に報告は本当だけど、すぐには連れていけない事にした。

何でなのかは分からないけど、その方が良い気がした。

「…という事です、神様。

目標は発見、直ちに神様の元へ彼を届けます。」

頑張ってください。

あなたの鎌『ヴァルキリー』の力は【強制送還】リベリエトリエーション。

今回の使命には最高の代物です。

「はい！頑張ります。」

一息置いて、私は神様との『交信』を切った。

『交信』は『地球』で言うテレパシーみたいなものだ。

街を見下ろした。

人間は皆地上を歩き、ある者は怒り、ある者は泣き、ある者は笑っている。

空を飛ぶものは鳥みたいな飛行機とか、本物の鳥とかで、人間だけで飛んでるものは一人もなかった。

羽衣を纏っている人もいなければ、鎌なんて誰も持っていない。

神様の声も聞こえず、信じられるのは自分だけ。

(あの頃は、不確かだったんだな…)

薄膜が一枚かかったような水色の空を見て、私は膝を抱えて俯いた。

(あの時は、)

「何が、確かなものだったっけ…?」

思いは吐息と混じって、消えた。

* * *

天使に気付かれないように家を出た。

今俺は出来るだけ遠くへ逃げる為に走っていた。

やるだけの事はやっておかないと後で絶対後悔するし、天使だから気付かれてるかもしれないが、家で殺されるのを待っているよりは良いと思っただからだ。

だが、彼女は速かった。

少し遠くで叫び声が聞こえた。

直後、俺の体に紐が巻き付いた。

「!?!」

桜の色に光るそれは俺の体を後方に引っ張っていく。

「えっ えっ ちょっ、うわあぁっ!!」

バランスを崩し、半ば振り回されるように俺は元来た道を引き返すハメになる。

「もう、なんで逃げるかな!？」

「逃げるに決まってるだろ!! 殺されるんだから!!」

「まだ殺さな

ドン!!

天使が何かを言い終える前に、俺達の前方で爆発が起きた。煙が晴天を煤の色に染めていく。煙の色の中に、橙色を見た。

「火事か!？」

立ち上がって、俺は走り出した。光る紐は既に消えていた。好奇心と、天使から逃げる為、俺は走った。

* * *

『まだ殺さないから安心して。』

私はそう言おうとしたのに、彼には届かなかった。
今彼は火事が起きた現場に向かっている。
私も彼の後について飛んでいる。

私は彼の背中を見ながら思い出す。
彼の所に向かう前、彼についての情報を神様から教えてもらっていた事だ。

流れ込むように頭の中に入っていた情報の一つ。
彼の癖。

災難に自ら飛び込む。

その生命力に助けられてはいるが、彼は気付かず、そう、
『墓穴を掘っている』のだ。

(私は、逃げてた…)。

彼は、『向かう』ために墓穴を掘っている。
私は、『逃げる』ために墓穴を掘っていた。

あの日、小さな私はボールを拾ってもらいに行こうとして自転車に
当たってしまった。

あの日、生きていた私は逃げて逃げて、落ちて死んだ。

向かって、死に行き、神様の力で死なない人間。

恐れて、目を背け、世界に見限られた元人間。

（私は…見たいんだ。）

向かった先の、不幸と幸福を知ってる人間を。
逃げた先で零れ落ちて、束の間の幸せを得た天使は。

* * *

炎は建物を完全に包んでいた。

火が建物を炙り、嘗め、覆っては押し潰していく。

野次馬の壁に阻まれても、熱気は伝わってきた。

「すごいな…」

「見に来て何もならないでしょ？」

話を聞い「誰か!!」

叫んだのは結構若く見えるおばさんだった。

涙で化粧がかなり落ちている。

「助けて下さい!!うちの子が、うちの子があ!!」

咽びながら叫ぶ女の方は自分の部屋らしい建物の一角を指差す。

まだ火の手はそこまで来ていないようだが、燃えてしまうのはやは

り時間の問題だ。
俺は考えるより先に走り出していた。
燃え盛る住居に。

「あ！…もっつ！」

どうやら天使もついてきたようだ。

燃える建物は喉に痛い煙と、何もかもを灰に帰す炎に満ちていた。
ただ燃烧の音が耳を打つ。

「あの部屋は…三階だったな…」

咳き込みながら俺は階段を駆け上る。

「まず火を消した方が良くない!?」

天使の少女が問う。

「出来るのか!?!」

「出来るよ!少し時間はかかるけど…」

「出来るならやれ!!」

「命令しないでよ!」

そう言いながら彼女は宙に浮き、空に指を這わせた。
光が指先に宿り、模様を作っていく。
俺は天使を置いて、子供がいる部屋へ向かった。

だが、火が行く手を阻む。

「くそっ！」

怯んだが退かなかった。

走るまま炎の壁を越える。

火が服に付くが、焦げる程度で消えた。

金属のドアは熱を持っていたが、手を服で包んでなんとか開けた。中は未だ燃えていなかったが、暑かった。

部屋を見ていく。

寝室、台所、居間、全て見ていったが、どこにもいない。

ベランダの外も見したが、やはりいない。

「どついう事だ…？」

カチャ。

物音がした。

「…！」

俺は振り向いた。

それは、いた。

五才ぐらいの女の子だ。長い髪を三つ編みにしている。不安げに俺を見る目には恐怖が宿っていた。

先程見た寝室のドアから、左半身だけを出している。

「あ…」

女の子は小さく声を漏らした。
恐怖が表情にも浮かぶ。
顔が歪み、目が潤み、

「待った！！泣かないで！
俺はドロボウとかじゃなくて、君を助けに来たの！」

「…ほんと？」

女の子は高い声で喋った。
涙声だがはつきりと聞き取れた。

「本当。君のお母さんに頼まれたんだ。
早く逃げよう」

「うん…」

俺は女の子の手を取った。
その時、炎が部屋の中に入ってきた。

「きゃっ…」

女の子が声をあげた。
残る退路はベランダ…
そう思い、振り返ったが遅かった。
窓の向こうで火が手を振っていた。
もう逃げ道はない。

「いやああ…お母さあん…」

女の子が泣きじゃくる。

俺は女の子の手を取り、言った。

「大丈夫。

俺達は死なない。」

「…なんで？」

「天使さまが、助けてくれるから。」

(早くしろ、天使なんだろ！)

その思いが通じたかのように、それは来た。

窓の向こうの光が翳った。

見ると、そこには大量の水が流れ落ちていた。

玄関を見ると、火がなくなっていた。

熱気も急速に落ちている。

「おにいちゃん、みーちゃんたちたすかったね！」

「そうだな。お母さんの所、行こうか。」

「うん！」

…あ、おにいちゃん？」

「何？」

自分の事を『みーちゃん』と呼ぶ少女は、泣いた後とは思えない程綺麗に笑って言った。

「てんしさま、ほんとにたすけてくれたね！」

「ああ。」

(本当に、やってくれたな…)

冷えたドアノブを掴み、俺達は歩き出した。

* * *

「全く、今日は散々だったよ…」

自室のベッドに倒れ、俺は呟く。

あの後、俺は無事『みーちゃん』を母親の所に連れていく事が出来た。

母親は嬉し泣きでまた頬を濡らしていたが、みーちゃんはそんな母親を慰めていた。

随分としつかりした子だと感心してしまった。

そしてみーちゃんは天使によくついて、なかなか帰ろうとしなかった。

彼女も自分になつくみーちゃんが可愛かったのだろつ。

長くみーちゃんと一緒にいた。

結局、家に着いたのは、日も暮れて星も出てきた頃だった。

「けどみーちゃん可愛かった
なんだかお姉さんになったみたいで楽しかったなあ」

「そうか。…あ。」

「どうしたの？」

「いや…別に…」

だが天使は勘が良かった。

「あ、そっか。君を死なせなきゃ、だっけ」

そういつて彼女は、

鎌を取り出さなかった。

代わりに彼女は俺を指差す。

「な、何を」

(まさか…さっきの水とか、魔法で俺を?)

動けなかった。

疲労と恐怖で。

やはり天使は魔法陣を描き、呪文を囁く。

「コントラクト」

そして光は、指に来た。

幾重にも光は左の中指に巻き付き、やがて一つの形を成した。
銀色の、指輪だ。すごくシンプルだ。

…これでどうやって俺を殺すのだろうか。

「殺さないよ。」

小さく、天使はそう言った。

「なんだか、まだ君は殺しちゃいけない気がするんだ。

…全部、個人的な事情だけど…、もうちょっと、君を生かしておこうかなって。」

「それと、この指輪はどんな関係が？」

「手錠代わり。」

君がどこに逃げても、私には分かる仕組みになってるから。」

「じゃあ、しばらく殺さず、監視って事が」

「そうだね。」

天使は俺に向かって手を差し出す。

「これからよろしくね、衛多くん」

「ああ。」

…えっと…?」

「あ、ごめん。名前言ってなかったね。

紗良・セイクル。よろしく!」

「ああ。よろしくな、紗良!」

俺は天使 紗良の手を取った。

堅くその手を握る。

気が付けば、俺達は笑い合っていた。

一章（後書き）

これからどんどん魔法や人物、武器などが出てきます。

頭の中がごちゃごちゃになるかもしれませんが、ついてきていただけたら嬉しいです。

閲覧ありがとうございます。

一章・e n d・(前書き)

桜花の笑み

一章・e n d・

一週間後。

短かった春休みが終わり、俺はまた学生としての日々を送る。
灰色のブレザーはようやく体に馴染み、だが窮屈なものを感じる。
スニーカーを履き、俺は家を

「おはよう衛多くん」

「紗良!?!」

目の前には黒いブレザーを着た少女。一房ずつ二つに結んだ長い髪が揺れる。

「学校行こっ」

「はっ!?!何で!?!」

「お前天使だろ!?!」

天使の筈の少女は何て事のないように言う。

「だって、高校生活楽しみたいし」

「意味分かんねーよ!?!」

「あははっ。

「さ、行こっよ」

そう言つて左手を差し出す。
その中指には、銀色のリング。

俺の、『手錠』の片割れ。

「分かつたよ」

手を取らず、俺は通学路を歩き出す。
少しむくれた紗良も後についてきた。

五分ぐらい無言で歩き、ようやく俺は喋り始めた。

「そついえばお前、どこの学校行くんだ？」

「ん？」

衛多くんと同じ学校だよ？」

「…お前何歳？」

「永遠の十七歳」

「あつそつ…」

そこで、強く風が吹いた。

ゴオツと音をたてて、それは樹々を揺らす。

生えていた樹は桜。

花弁が風に舞った。

「綺麗だね！」

そう言っつて紗良は桜吹雪の中を歩いていく。
だが彼女は唐突に歩みを止め、振り返り、

笑った。

花が咲くように。

光が強さを増したように。

桜が踊る。

舞い、跳ね、廻る。

そう、俺の中で、外で、彼女の笑顔を引き金に。

運命は、廻り始めたんだ。

一章・end・(後書き)

これで一章は終わりです。

- end - はその章の後日談みたいな役割をしています。

比較的重要な章なので、見逃すと話についていけなくなります、注意。

閲覧ありがとうございました。

二章

真っ白い空間、話し声がこだまする。

不思議な声は、今日も頭に響く。

必ず自らの声を、目の前の配下に聞かせるように。

無邪気な声は、今は待つ。

主の声を、一言一句聞き逃さぬように。

『彼』は、今まで幾度も私が与え過ぎた生命力を使い、死なずにいます。

それでも生命力はいずれ尽きてしまいます。

人間の「死」は生命力が尽きてしまう事であるのです。ですが…

「『彼』は尽きない、ですか？」

はい。調べてみると、殆ど減っていないのです。

響く声は僅かに疲弊を含む。

相手の心をこちらに向かせたいかのように。

高い声は小鳥のさえずりのように問いを投げる。

その前方には、誰もいないというのに。

「では、ボクを呼んだのは、それを調べる為、ですか？」

そうです、蒼良・サンデル。

あなたに『彼』の生命力を測ってもらいたいのです。

「分かりました、神様。早速行ってきます!」

彼か、彼女か分からないその者は、小さく笑う。
その顔を、見せぬまま。
少年か、少女か分からないその者は、大きく笑う。
たとえその顔を、見られていなかったとしても。

* * *

七月。

蒸し暑い梅雨を越え、風が熱を運ぶ月。
もうすぐ学生達誰もが待ち望む夏季長期休暇 平たく言えば夏休み
が始まる。

「もうすぐだね!」

喜ぶのは人間だけではない。天使もだ。

人間名「^{ひつち}聖 紗良」。

本名「^{ひつち}紗良・セイクル」。

栗色の髪と碧い瞳あおを持つ、俺を殺しに来た天使。

いきなり俺の所に来て、「君は生命力があり過ぎる」と言って鎌を
振るってきた。

けれど、いきなり「殺しちゃいけない気がする」と真逆の事を言っ
てきて、銀色の「手錠」をつけてきた。

今それは俺と彼女の左手の中指に、「指輪」として嵌まっている。

閑話休題。

今俺達は木漏れ日を浴びながら、学校へと向かっていた。

「そうだな、夏休み…楽しみだな」

「秋には君は神様の元だけだね」

彼女の相変わらずの仕事の熱心さに、多少の感心は抱くが、

「俺は死なねえ!!」

俺はやはり、それを拒否した。

「あははっ、あ、八時二十五分だよ？」

楽しみに笑う彼女は、少し遠めの時計を見て言う。

場所にして50メートル。天使の目は良いらしい。
俺は慌てて携帯の時刻表示を見た。

「えっ、嘘!？」

…嘘じゃねえ!!」

その情報は確かだった。

「頑張れ衛多くん

私は飛んでも行けるから」

気楽に彼女はそう言った。

「天使めえ…っ!!」

俺は悪態をつき、自分の足を速めた。

* * *

ギリギリで教室に到着、鞆を置く。
直後、友達が俺の元に寄って来た。

「なあなあ衛多！知ってるか！？」

ヒツシーが怪我でしばらく学校休むってさ！！」

「ヒツシーが！？」

挨拶もそこそこに友人が伝える情報は、このクラスの中ではかなり重要なものだった。

ヒツシーとは、俺達のクラスの担任の、菱垣先生の事だ。

体育担当、浅黒い肌がよく似合う三十五歳独身男性。

体力には絶対の自信があるらしいが…

「なんでも重いものをメチャクチャに乗せられた感じなんだったよ。けど、かなり小さいものらしい。」

「…なんだろうな…」

俺は少し眉をしかめた。

仮にもヒツシーは男だ。それをつけ狙い、襲い、何の意味があるのだ。

友達が言うには金品は取られていないらしい。

疑問はそれのお陰でさらに膨れ上がってしまった。

「まあ、ヒツシーはどうでもいいや。
それで、ヒツシーの代わりの先生が女なんだってよ！」

「へえー。けどおばさんじゃないのか？」

「いや、すごい若くてキレイらしいぜ」

と、そこでチャイムが鳴った。友人は自分の席へ戻っていった。
それにしても、ヒツシー、哀れ。

チャイムが鳴り終わり、しばらくして先生が入って来た。教頭先生だ。

「皆さん、おはようございます。

えー、皆さんはもう知っていると思いますが、担任の菱垣先生はしばらく学校に来れません。

なので、代わりの先生をご紹介します」

そして、その先生が入って来た。

先生の姿を見た瞬間、俺の中の疑問はどこかへ行ってしまった。
それほど、彼女は美人だったのだ。

* * *

「三出 みついで 蒼良 そうらです。

分からない事ばかりで皆さんにご迷惑をおかけすると思いますが、
よろしく願います」

焦げ茶で、下方で一つに結び横に流した髪。
優しげに生徒を見つめる茶色の目には眼鏡がかかっている。
両耳に光るピアスには金のリングが付いている。
私は教室の後ろ側から蒼良『先生』を見ていた。
睨むように。念を送るように。

彼女は、何をしに来たんだろう。

(聞かなきゃ…)

思っていたらチャイムが鳴った。
私は席を立ち、『先生』に言う。

「三出先生。少し話があるんですけど、良いですか？」

「…はい、良いですよ。聖さん。」

* * *

場所を人気のない廊下に移し、開口一番私は問うた。

「蒼良。何しに来たの？」

「…私は、ただ教師がしたくて…」

私はその弁解にため息をついた。
眉間に皺を寄せ、私は言う。

「嘘。理由になつてない。前から嘘が下手なんだから。人もいないからその姿も解いたら？」

そう言うと、三出 蒼良、いや、蒼良・サンデルはピアスを外し、頭上に放り投げた。

ピアスは重なり、大きくなり、頭に浮かんだ。

そう、天使の輪だ。

指を私に向けて差し、丸を描き、線を描き、図形を、文字を描く。浅緑の魔法陣が出来上がり、それを発動する為の呪文を唱える。

「リリース」

淡い光が蒼良を包み、それが消えた頃には、蒼良の姿は変わっていた。

髪は金に、高く一つに結わかれている。

瞳は深い緑で眼鏡をしておらず、羽衣は腰にリボンとして結ばれていた。

そして、その背は縮まっていた。

その姿こそが蒼良・サンデル。

私の義妹^{いもじょう}。

「うん、やっぱりボクはこの姿が良いや」

「それで蒼良、何しに来たの？」

私は先程と変わらない態度で問う。

「神様に頼まれたの。『彼』の生命力を測つて来いって。

なんでも、『彼』の生命力は殆ど減ってないんだって。だからその原因を調べろって。」

確かに、蒼良の武器『ゾディアック』には【計測^{ライブラ}】という能力がある。
他にも【変装^{ヴァーユ}】という能力でさっきのように変化^{へんげ}をしていた。
なかなか多種類の能力を持つ武器を扱う者はいないから、神様は蒼良に依頼をしたんだろう。

「けど連れて来いとは言われてないよ。それはお義姉^{ねえ}ちゃんに任せ
るねー!」

そこまで言った時点で、一時間目の予鈴のチャイムが鳴る。

「ボクの担当の教科は体育だから…、二時間目からだね。」

そう言ってまた蒼良は魔法陣を描いた。

「チェンジ!」

元というのはおかしいが、大人の姿に変わって、蒼良は歩き始める。

「早く教室に戻らないと、遅刻しますよ。聖さん。」

三出先生はそう言って階段を上っていった。

* * *

昼休み。

俺は弁当を食べている最中、紗良に呼び出された。

自分の席から数歩、廊下に出される。

「三出先生には気を付けて!!」

単刀直入にそう言われた。

「…は？」

「は？」

じゃない!

三出先生…、三出蒼良は天使なの!!」

「は!？」

いきなりそう言われても、理解が追い付かない。

「ちょっと待て。その根拠は何だ」

「私達天使は皆、天使の輪をどこかに付けてるの。

私だったら髪飾りなんだけど、蒼良はピアスになってる。

後は同族のにおいというか…そんな感じなんだけど。」

そう言っつて紗良は髪飾りを触る。

楕円形の針金を二つに折ったような、金色に輝くそれを、彼女は髪から外す。

結んだ髪が一房ほどけた。

「あの子は私の義妹なの。

あなたの生命力を測りに来たんだって。

それだけらしいけど、あの子は何するかちょっと分からないから…」

その時だった。

「堤くん、ちょうど良かった。ちょっと手伝ってくれる？」

ある意味ではタイミング良く、三出先生がやって来た。
紗良が柳眉を逆立てる。

「先生、私が行きます。」

「いえ、聖さん、あなたより堤くんの方が適任なの、力があるからだから……」

俺はそれを、

「…分かりました、行きます」

快諾した。

「衛多くん！」

俺は紗良に小声で言う。

「大丈夫。それに、どこにいても分かるんだろ？」

そう言って左手の指輪を見せた。

そして俺は三出先生の後に……
いや、蒼良という天使についていった。

* * *

普段立ち入ってはいけない屋上に、俺と蒼良は向かった。

「先生、何でこんな所に…」

「リリース」

蒼良は俺の問いに答えず、呪文を唱えた。
淡い光が彼女の本来の姿へと戻す。
十二歳ぐらいの幼い少女がそこにはいた。

「…この姿では初めてだね。」

ボクは蒼良・サンデル。…ちょっと手伝ってくれるかな？」

「なんだよ。死ねって事なら断るぞ」

「違うよ。」

蒼良はそう言っつて空間に手を伸ばす。
別の空間へと繋がっているそこから、宝石を連ねたような数珠が出て来た。

「ちょっとキミの生命力を測りたいんだ。
痛くも何ともないから…」

そう言っつと、数珠の一つ、黄色が光り、紐から離れる。
そして…。

* * *

衛多くんは屋上に行った。

(やっぱり何かするんだ、蒼良…！)

私は長い階段を全速力で駆け登る。

扉を…

開けようとして、開かない。

(やっぱり閉めてる！)

人の目なんか気にしていられなかった。

髪飾りを外し、二つとも上に放り投げる。

瞬時に髪飾りは天使の輪へと戻る。

同時に制服から普段の服装へと戻る。

一部を除いた全ての魔法は、人間になつていいる時は使えない。

不便な世界だと思いつながら、素早く魔法陣を描く。

「リリース」

扉の鍵を開け、中に飛び込むとそこに、

蒼良と、黄色い球体に取り込まれた衛多くんがいた。

「衛多くん！

…蒼良、あなた私の使命を奪うつもり？」

《紗良、それは違う!》

「衛多くん!大丈夫なの?」

その質問には蒼良が答えた。

「これが【計測】の力だよ。

標的を取り込んで測りたいものを測るの。

人体には無害だよ。」

「そう…」

その時だった。蒼良の目の色が変わった。

驚愕の色に。

「…神様、どうすれば良いですか…?」

蒼良が神様と話し始めた。

内容は神様と、神様と話している天使しか聞こえないので、人間である衛多くんはもちろん、天使である私にも聞こえない。

天使の輪は金に淡く光って、神様の言葉を蒼良に伝えている。

それを聞く彼女の顔は、不安げで、青ざめて、やがて覚悟を決めた顔になった。

(まずい…)

私は異空間に手を伸ばした。

取り出したのは私の武器『ヴァルキリー』。

能力は【強制送還】リベリエトリエンション。

あらゆるものを在るべき場所へ戻す能力ちから。
私は球体に包まれた衛多くんに近寄り、

斬った。

球体を。

それは衛多くんを吐き出し、小さくなって、蒼良の持つカラフルな数珠へ帰っていく。

「もう使命は済んだのでしょう？帰りなさい、蒼良。」

鎌を元に戻しながら告げる。

だが蒼良は首を横に振る。

「ダメ…。」

『彼』は、生命力があり過ぎる。今すぐ神様の元へ連れて行かないと…。」

「それは私の使命よ！

他人の使命を奪うなんて、天使の風上にも置けない！」

私の中で情けは既に消えていた。

だがそれは蒼良も同じだったようだ。

「さつさと神様の所にこの人を連れて行けば済む事じゃない！！」

激昂した蒼良は、『ゾディアック』のオレンジの球体を掴んだ。

＊ ＊ ＊

義姉妹きょうたいゲンカが始まった。

元々の狙いは俺なのに、その扱いの事で意見が食い違ったらしい。そして今、二人はかなりの高速で戦いを繰り広げていた。

蒼良はオレンジの球体の力で、どうやら体を強化したようだった。すさまじい速度で紗良を追い詰めていく。

だが紗良も負けてはいない。

鎌で蒼良を斬らないようにしながら攻撃を受け流している。

蒼良は距離を取り、茶色い数珠玉を握り締める。

茶色い光の矢が飛んだ。

だが紗良はそれを鎌で斬る。

光は散り、数珠に戻る。

蒼良は次に赤い数珠玉を握りながら紗良に向かって走った。

蒼良の手に赤く光る短刀が二振り握られる。

鎌と短刀が当たる。

高い音が響く。

二人は退き、蒼良は赤い短刀を捨て、白い数珠玉を握った。数珠を持った右手が白い光に包まれる。

光が収まった時、蒼良の右手には眸ほし子があつた。

黄色く、黒く、楕円形のそれは、山羊の目に似ていた。

「！

…蒼良、あなた『墮落』するつもり!？」

「分からず屋のお義姉ちゃんを黙らせる為だよ。」

そう言つて蒼良は眸子を紗良に向ける。
山羊の眸子は妖しく、蒼く光った。
そして、眸子は炎を噴き出した。

真っ青な。

それは高熱を撒き散らしながら一直線に紗良に向かった。
一度紗良は横に回避したが、炎は追いかけてきた。

「ボクの『ゾディアック』最大の能力、【業火】カブリコーン。
火より熱い炎が標的を燃やすまでずっと追いかけてくるよ。」

「蒼良！！そんなに『墮落』したいの！？
今すぐこれを止めなさい！！」

紗良は必死に避けながら蒼良に叫ぶ。
だが蒼良はそれを無視した。

「煩いな！！もう燃えちやえー！！」

炎は蛇のように鎌首をもたげ、
浴びせるように降りかかった。

数秒、蒼い炎は紗良を焼いていた。
しばらくしてから蒼良は手を下げる。
炎はやがて消え、そこにあつたのは、

紗良だった。
無傷の。

「…!!」

「絶対の熱気には絶対の冷気。

私なら【分身】^{ジエミ}で惑わせてやったな」

そういう彼女の髪には霜が付いていた。

「まさか…あの魔法を…」

「ええ。」

『アブソリュート・ゼロ』。それを自分にかけての。」

「死ぬ気だったの!？」

「あなただって殺す気だったじゃない。」

…さて」

そう言って、紗良はゆっくり、且つ確実に蒼良に近付いた。

鎌を振り上げた。

鈴が鳴った。

「一回…頭冷やしてきなさい!!」

俺は…

* * *

斬ってしまったえば良かったのに、私は手を止めてしまった。
目の前には怯える蒼良と、鎌の柄を握む衛多くん。

「落ち着けよ、二人共。」

何で始まったか分からないケンカで何ムキになって蒼良を殺そうとしてるんだよ？」

「殺さないもん。」

神様の所に返すだけで「一緒だよ、そんなの。」

衛多くんはため息を吐いて、言った。

「俺にとつては、天使も人間も、悪魔だって同じだ。
変わらないよ。」

「衛「きゃー!!」」

蒼良が、突然衛多くんを抱きついた。

「すごいすごい！」

あんな恐いお義姉ちゃんを止められるなんて！かあっこいい〜！」

「…はあ、そうなのか？」

「そつだよ！」

ねえねえ、これからキミの事、衛兄ちゃんって言っても良い？」

目を輝かせ、小さな天使は俺に問う。

「…別に良いけど…」

「やった！」

よろしくね衛兄ちゃん」

「あ、ああ。」

それより……」

俺は見た。

蒼良の炎で焼け焦げ、紗良の鎌で原料と化した屋上を。

「これをどうにかしてくれ……」

二章（後書き）

蒼良の武器は今作中最も能力の数が多いです。
これからもどんどん出していきます。

閲覧ありがとうございました。

一章・e n d・(前書き)

蒼穹の朗笑

一章・e n d・

終業式。

長い校長の話やまともにしていけばまず必要のない生徒指導の先生の話^{ロング・ホームルーム}を聞き流し、L H Rを終え、俺と紗良は下駄箱に向かっていた。

「やっつと休みだあー！」

「そうだね

けど最後の日が夏休みの終わりだって事をお忘れなく」

俺はそれに、いつか思った事を口に出す。

「お前は本当に任務一筋だな…」

「『任務』じゃなくて、『使命』だよ！」

間違えたので一瞬危機を思ったが、何事もなく済む。少しの脱力と、どうでも良いという思いが混じり、俺は適当に返した。

「はいはい…」

「もう！」

だが紗良はそちらの方に怒った。

まばらだがまだ学校内に人はいる。

殺されないが殴られる、

その時

「えーいにーいちゃん!!」

蒼良が飛びついてきた。

俺はその不意打ちに対応しきれずうつ伏せに倒れる。

「いきなりなんだよ蒼良!」

「ダメ?」

だって衛兄ちゃん見かけたからつい嬉しくて…」

とりあえず紗良の鉄拳からは助かったので、許す。
しかし許せない事はあった。

「別に良いけど…、重い。」

「あ、ごめんなさい」

蒼良はすぐに俺の上から退いた。

子供の姿でも人に乗られると重い。

そう思いながら俺は立ち上がる。

「これから二人共帰るの?」

「そうよ。」

蒼良はまだ仕事?」

無邪気に尋ねる蒼良に、紗良は優しく答える。

「そうなの。」

…あ、いけない、忘れてた。
見回りの途中だったんだ…」

残念そうに蒼良は言う。

俺は彼女の頭に手を乗せた。

「頑張れ。」

仕事が終わる頃、紗良と迎えに行ってやるから。」

「衛兄ちゃん…ありがとう！」

そして蒼良は大人の姿になり、持ち場に戻る。

「ではまた後で…、」

頑張ります！」

そう言って、蒼良は笑う。

彼女の歩き去る方向、窓からは空が見えた。

真っ青に、晴れた空が。

二章・e n d・（後書き）

これで二章は終わりです。

閲覧ありがとうございました。

間章

夏休み終盤。

いつまでも終わって欲しくないと思うのは俺だけだろうか。

少なくとも、俺は永遠を望む。

宿題は残り一つ。

なので少し余裕がある俺は、

「衛兄ちゃん！」

と、俺を呼ぶ天使と外を歩いていた。

金の髪、翠の目を持つ、十二才程の小さな天使、蒼良・サンデル。

多くの能力を持つ十二個の宝石が付いた数珠『ゾディアック』を使う、紗良の義妹^{いもづと}。

初め、彼女は俺の並外れた生命力を測りにやってきた。

だがそれはあまりに予想を超えていたらしく、幼い天使は俺を殺そうとしたのだが、その事でなぜか義姉^{あね}と対立してしまった。

「ケンカ」の末二人は和解、どういう訳か俺は蒼良に好かれ、今のところ死なずにいる。

「殺せ」という命令は「逃亡された」という事で失敗に終わっているらしい。

とにかく、今生きている俺は、黄緑のワンピースを着た少女と夕方の散歩をしていた。

「なんだ？」

「今日はね、ボクの特別な日なんだ！
知ってた？」

「いや、知らなかった。
誕生日は五月だろ？」

問いかけに、蒼良はうん　と頷く。

「そつだよ。けど今日も特別な日なんだよ。
だから…ちょっとボクについて来てくれる？」

「？」

…ああ。」

明るく振舞う蒼良の表情は、なぜか曇っていた。

* * *

向かった先は玩具屋^{おもちゃ}だった。

けどそれが『特別な日』と何の関係があるのだろう。
中に入り、彼女はまっすぐに、ある売り場に行った。

ぬいぐるみ、だった。

熊や兎、犬などの可愛らしい人形がズラリと並んでいる。
だが、蒼良はぬいぐるみ達の中に入ろうとしなかった。

「…中、入らないのか？」

「ここまでが限界。」

実はいつもは玩具屋にも入れないんだよ。
ここまで来れたのは衛兄ちゃんのお陰。」

「…『特別な日』って、ぬいぐるみと関係してるのか？」

「そうだよ。」

…衛兄ちゃんだけだよ。この話するの。」

遠くを見て、天使の少女は話し始めた。

「ボクは、世間知らずのお嬢様だったんだ…。」

* * *

少女は、ある裕福な家に生まれた。

何不自由なく、いつも周囲には家族、友達がいた。

学校という社会の波には入らず、隔離されるように日々を過ごした。
世界の闇を知らずに…。

ある年、ある日、少女とその家族はある国へ旅行に行った。

平和な国で、争いを知らないような場所だった。

肥沃な土地で、過ごしやすく、少女達はすぐにこの国を気に入った。
どうせならこの国に住もうか、そんな事も考えていた程だ。

滞在から数日、少女は退屈し、その国の小さな玩具屋へ行った。

そこで、ぬいぐるみを買おう、そう考えたのだ。

なかなか気に入るものが見つからず、諦めかけた時、少女は隠しているように置かれたテディ・ベアを見つけた。
それは大人の目線では見えないように配置してあった。
少女はテディ・ベアを手に取り、ある事に気付いた。
テディ・ベアが、震えているのに。
不思議に思った少女はテディ・ベアを調べた。
すると、背中にフアスナーがある事に気が付いた。
少女はそれを開けた。
中には、

金属の光沢とビニール製の紐とデジタル表示の「00:01」と

「ピピピ」が連続して、
連続し過ぎて、

「ピー」に変わってしまった音。

そして彼女の世界は終わった。

後日、天使になった彼女は知った。

平和な国は、実はその土地が素晴らしすぎる故にたくさんの国から狙われていた事。

あの日が争いの始まりになった事。

あの人形の一番近くにいた自分は、焼け焦げ原形すら分からなかった事。

家族はそんな自分を「自分」と認めず、逃げるように帰って行った事。

家族は自分の事を疎ましく思っていた事。

友達は自分の事を嫌っていた事。

自分には、力が無かった事を。

* * *

「そして、『ボクの望む力』と、『あつた筈の可能性』を材料として、ボクの『ゾディアック』は生まれたんだよ。

変身してる時のあの大人の姿は、今生きていたらの自分。もう世間知らずのお姫様にはなりたくなかったから…」

「蒼良…」

俺は何も言う事が出来なかった。
同情、憐み、そんなものは言える訳がなかった。
彼女にもそんなのは必要ないだろう。
行動を起こしても、逆効果の気がした。
だから俺は、黙って目の前のぬいぐるみを見ているしかなかった。

「…さ、帰ろっか。」

蒼良はしばらくしてから、明るく俺にそう言った。

「分かった。」

…そうだ、アイスでも食べるか？」

「うん！ボクグレープフルーツ」

「………売ってるかな……？」

当然のように言う彼女の言動に苦笑しながら、相槌を打つ。

「ん〜…、じゃあ何でも良いや。」

その代わり肩車してくれる？」

「良いぞ。」

そして肩車をしながら俺と蒼良はコンビニへ向かった。
案の定グレープフルーツ味のアイスはなく、仕方なく蒼良はオレンジ味のアイスクャンディを買った。
夕闇迫る中、家へ帰っている最中、少女は聞いた。

「ねえ、衛兄ちゃん？」

「ん？」

「ボクは弱虫かな？」

「なんでだ？」

「今だってこっつやって甘えてるよ…？」

小さく、か細く、彼女らしくない声で。

蒼良は心情を吐露する。

「弱虫と甘えは違うと思う。」

それにお前は弱虫じゃない」

「なんで？」

「さっきお前は何をした？」

「え？」

…玩具屋に行った、だけだよ？」

「過去に立ち向かっていただろう？」

だから蒼良、お前は強い奴だよ。」

「衛兄ちゃん…」

蒼良はそれから黙りこくってしまった。

家に帰るまでずっと。

だが一言だけ、聞き取れない程小さな声で言った。

「……………」

「ん？」

「なんか言ったか？」

「え？」

「何も言っていないよ。」

「本当は聞こえていた。
彼女が言った言葉は、」

「ありがとう。」

間章（後書き）

本編でありながらも、途中休憩のような章、それが間章です。けれど内容的には重かったりします（汗）

閲覧ありがとうございました。

間章・e n d・(前書き)

待望の微笑

間章 - e n d -

夕暮れ、朱い夕日あかが街を照らす中、彼女はそこを歩いていた。彼女の隣を、少年と幼い少女が肩車をして通り過ぎていった。すれ違った直後、彼女は歩みを止めた。

黒に白い線とスカーフのセーラー服、膝下まで届かない白いソックス。

ローファーは革の光沢を持った黒色。

熱された金属の色に輝く髪は茶色い。

良く言えばシック、悪く言えば地味な色に包まれた彼女は、夕日の中に消えていく二人を見送りながら呟く。

「…あれね」

幼い少女は金の髪を銅の色に染め、無邪気に笑う。

茶髪の少女はそれを見、言い放つ。静かに。

「…使命の遂行なんかしていないじゃない。

孤児みなしこ一族は大法螺吹きなのね」

さらに、少女は黒目がちの視線を少年に向けた。

その瞳には怒りが音もせず宿っていた。

「…いつまでも生きていられると思ったら大間違いよ。

さっさと死になさいよ。あなたのをいで、大勢の人が死んだのよ…」

セーラー服の少女は、左腕の袖を捲り上げた。

手首には、金色の輪が二つ。

外してすぐに、それは頭の上に浮かんだ。

同時、彼女の姿は変わる。

まるで、その金に光る日に染められたかのように、意識を頭上の輪に集中する。

蛍のように、淡く輪は金の光を放つ。

そして、少女は報せしづを告げる。

最も尊敬する、彼女の主へと。

「見つけたわ、カミサマ。」

黄の色に包まれた彼女はそう言って、

薄く、微笑んだのだった。

間章・e n d・(後書き)

これで間章は終わりです。

閲覧ありがとうございました。

三章

時は少し遡り、地球の北半球で言えば、八月中旬。虚しく広がる空間に、声が響く。

「神様？何の用？」

足早に歩いてきたのは、両脇の髪を団子にした、チャイナドレスのような服を着た天使。

普段は周囲に浮かぶ箒の羽衣が、腕に巻きついている。つり目気味の目をさらにつらせ、彼女はイライラと語る。

「こつちはいさつき使命を終えたばかりで、疲れてるの！早くしなさいよー!!」

まあ、そう怒らないで下さい。萌・ネメシス。

「怒ってないわよ！早く休みたいだけよ！」

少女の剣幕に気圧された神は、珍しく謝罪をする。

すみません。では言いますか。

「下らない内容だったら引き受けないわよ。」

それでも尚きつい物言いをする少女は、腕組みをして話を聞いた。

『彼の、連行です。』

少女は軽く目を見開いた。

「…ああ、生命力を持ち過ぎたヤツ？
けどそれは他の天使がやってるんじゃないの？」

それが、未だに出来ておらず…、こうなったらと思い、あなたを
喚よんだのです。

どこか一点を見ながら、少女は呟くように言う。

「…必死ね。」

もちろんです。

あなたが行ってきた使命、それと少し関係がありますし…。

「…アレが、どうかしたの？」

少女はまたも目を開く。

先程よりは、大きめに。

…ほんの少しの生命力があれば、生き残れる人がいたのです。
最低でも、三百人は…。

「…三百人、確かに、それは…」

…分かりました。必ず『彼』を、神様の元に連行します。」

頼みましたよ。『ネメシス』の姓を持つ天使よ…。

当然。

そう言いたげに萌と呼ばれた少女は笑った。

* * *

俺の朝は、

「起きて起きて起きてー！
衛兄ちゃん！！」

と叫ぶ蒼良の声が始まる。
もし、それで起きないと、

「蒼良、退がって…。
やっと行ってくれる気になったみたいだから」

と、チャキツと音をさせて紗良が鎌を構えて始まる。

「起きます起きてます！
まだ死にたくありません！！」

「分かれば良しっ
学校行こっか」

笑って言う少女に、もう怒る気力もない。

ベッドから起き上がり、天使達を外に出し、俺は目を擦りながら着替えを始める。

もう空気は冷たく、窓の外を見れば裸の木がそこかしこに見える。
そう、季節はもう秋を過ぎようとしている。

夏休み最終日は結局、俺は殺されず、生涯二回目の文化祭も終わり、衣替えも終わって、修学旅行も一緒に行き、そして気が付けば十一月。

半年も、二人の天使と俺達は一緒にいた。

(…あいつら、何で俺を殺さないんだ?)

とりあえず、紗良達が来てから遅刻はなくなったが。

* * *

一応教師の蒼良は先に学校に向かった。

なので俺は今、紗良と二人で通学路を歩いている。

「もうすっかり冬だねえ」

白く色付いた息を時折発しながら、紗良は呟く。

「ね、衛多くんは冬、好き？」

「…、どうだろ。」

どっちかと言えば嫌いかな？」

「本当!？」

実は私も嫌いなんだ」

紗良は飛び上がりそんな勢いで言った。

「寒いしなあ…、
けどお前は冬生まれだろ？」

「そうだけど、水は冷たいし、床は冷えるし…、あまり良い事ない
じゃない？」

「まあな。

その分、人が温かいな。」

それを聞き、固く、彼女は同意する。

「そう、だね…」

彼女の態度に疑問を持ったが、俺達は他愛もない事を話しながら歩いてきた時だった。
俺は人にぶつかった。

「…っ」

「あ、ごめんなさい」

ぶつかったのは、俺と同じ年ぐらいの少女だった。
黒いセーラー服に、白いマフラーを巻いている。

「…気をつけなさい」

だが雰囲気は俺よりずっと大人びたものだった。
彼女は歩き去った。

「もう、よそ見してるから…」

「…彼女、私立の制服だった…」

「…衛多くん、私立の制服フェチ？」

紗良は白い目で俺を睨む。

「どこからそんな言葉覚えたんだお前は。

…この近くにあの制服の学校はないんだ。」

「やっぱり私立の制服フェチだから違う。中学の友達がそこに行っ
たんだよ。」

ここから三駅ぐらいの所だな。だがあつちは…」

あつちは、街の郊外の方だ。

「…駅の方じゃないね。」

「そうだ。」

なんだか探偵みたいな事を言っているが事実なのだ。

「おかしいぞ、彼女…」

疑惑の少女は悠然と街を歩いていった。

だが、彼女は、すぐに俺の前に現れる事になる。

* * *

夜。

俺は布団の中に入っていた。
だが目を開けていた。
眠れないのだ。

(あれは、何だったんだ…?)

頭から、あの少女の姿が消えない。
だが思考は途切れた。

首に巻かれた、薄い布に。

「!？」

そのまま引つ張られた。窓側へ。
ガラスが割れる。

「…っ」

背中に鋭い痛み。
ガラスだ。

粗い軌道で、自室から家の屋根の上に振り回される。
着地も優しくなかった。

「いてて…」

顔を上げるとそこに、
あのセーラー服の少女がいた。

「…！」

「…」

静寂が空間を満たす。
破ったのは、俺だ。

「君は、…何者だ？」

「…あたしは萌・ネメシス。
神様の命により、あなたを連行しに来た。」

淡々とそう告げる三人目の天使は、冷やかな目をしていた。

* * *

「連行…？」

「…そう、連行。」

もうあなたはこの世界にはならない。」

「は？何だよそれ？」

確かに俺はそういう立場だけど…けど、俺を殺すのは紗良の役目だ
ろ！？

その言い草に腹を立てた俺は、声を荒らげて言った。

「…そうだったけれど、あまりに遅いから、神様は痺れを切らした。」

だからあたしがその役目を任された。」

話すのがとても億劫そうに、萌という少女は喋る。

「けど、いきなり…」

「…いきなりなんかじゃない。

七ヶ月前からあなたはその事を知っていた。

けれど運ぶ側が職務を放棄している。だからあなたは助かっている。」

一息置いて、彼女はまた喋る。

「…連行の命が下された理由は、ある国で起きた紛争。

あたしは使命でそこにいた。

あの時助かるべき人は、生命力が足りず、死んでしまった。

神様は、最低でも三百人は、あなたがいなければ、あなたが早く神

様の元へ向かっていれば助かったと言っている。」

「…」

俺も、その紛争はテレビで見て知っている。

死者五百人を超えたという大規模なそのなか、俺のせいで半数以上が死んでしまっている。

罪悪感が、重くのしかかる。

「…だから、あなたは神様の元へ行かなければいけない。

もうこれ以上、誰も苦しめないように…」

首に巻かれた布が俺を締める。

その時、

「衛多くん!？」

天使がやって来た。

* * *

私達は異空間と繋がった、自室で眠っていた。
俗に言う、『天界』にある。

だが、ふと起きた時、深夜という時間帯としてはありえない場所
屋根の上 に彼を感じ、下界に向かった。

今日の前にいるのは、首を絞められている衛多くと、今朝見たセ
ーラー服の少女。

そして衛多くんを絞める布は…羽衣。

「あなた、天使なの？私達と、同じ…」

「…あなたと一緒にされたくないけどね、紗良・セイクル。
みなしこ孤児を抱えた世話焼き一族…」

「誰が孤児だつて？『ネメシス』の天使め。」

そう言ったのは、私と一緒に来た蒼良だ。

「見た目は、立場は確かにそうかもしれない。

けど何もしなかった『ネメシス』の一族よりはずっとお義姉ちゃん
達の方が素敵だよ。」

「…言つてなさい。人間に慣れきつて、変装した同族を全く見抜けられない者が。」

『墮天使』なんて、所詮悪魔なのよ」

馬鹿と話すのは疲れる。

彼女の態度は正にそのようなものだった。

「それは昔の定義よ！

それに何？私達は今朝が初対面でしょ！？」

「…馬鹿ね。一度すれ違つてる。少しは考えなさいな。

こんな所で油を売つてる暇はないの。私は神様の元へこの男を「待ちなさい！それは私の使命よ！」

それに、僅かな反応を、少女は示す。

「…あなた、神様から何も聞いていないの？」

「え…？」

…何の事？」

本当に馬鹿。

彼女は目でそう言い、口で言った。

「…あなたが使命を全うしないから、神様は呆れてあたしを遣わしたの。」

何も出来ないあなたなんかより、あたしをね。」

「……………」

私は、何も言えなかった。

「…邪魔しないで。」

少女は、手を広げるように軽く、衛多くんの首を絞め始めようとして、

「邪魔、するよ。」

それを言葉で、蒼良は止めた。

* * *

「…人の使命の邪魔なんて、あなたは本当に最低ね、蒼良・サンデル。」

良いわ。先に神様の元へ送って、もう一度初めからやり直してもらうから。」

俺の首を絞める天使 萌は、羽衣を自分の手元に戻し、左腕を捲る。手首には、金の輪が交差したブレスレットを付けていた。

取り外し、上に放り投げる。ブレスレットは天使の輪になり、萌の服装は、セーラー服からチャイナドレスのようなもの変わった。

俺の事は既に眼中にないらしく、萌は目の前の獲物を仕留めようと、黄色い瞳を輝かせる。

変わるが速いか、萌は羽衣を蒼良に向かって絡ませた。

避けきれないと判断したらしく、『ゾディアック』の透明な珠を握る。

空間にボコボコと透明な泡が発生、羽衣の行く手を阻む。だが右手側から何かが飛んで来た。咄嗟に蒼良は左手で水色の珠を握った。

流水のような壁が何かを受け止め、弾き、何かは萌の方に飛んでいった。

萌は羽衣をその何かに絡ませた。薄布に巻きつけられたそれは、淡い黄緑の円月輪だった。

「鋭いわね。あたしの武器『グレイス』の一つ、『タレイア』を防ぐなんて。

『タレイア』の能力は【必中】シュアライ・ヒット。防ぎようがないと思ったんだけど。

」

「ボクの『ゾディアック』の一つ、『アクエリアス反射】だよ。

飛んで来たものは弾く。本当に天使の武器には色々なものがあるからね」

蒼良は不敵に笑った。だが、萌はその上を行く不敵さで笑う。

「考えが浅いわね。『ネメシス』を舐めてるの？」

ドカッ

鈍い音がした。

何かが、蒼良の背中を打った。
衝撃に、蒼良は倒れる。

打ったのは、漆黒の槌だった。
空間から姿を見せたそれは、砂状に崩れ、萌の元へ帰る。

「『グレイス』の一つ、『エウプロシユネ』。能力は【スパイ隠密】。
油断したわね蒼良・サンデル。」

打たれた蒼良は返事をしなかった。

紗良は、ようやくそこで動き、攻撃を受けないように隅の方にいた俺の元へ、ふらつきながら蒼良を抱いて来た。
萌はつまらなそうな表情で俺達を見ている。

「衛多くん、その青い珠を、蒼良の事を思いながら握って」

蒼良が持っていた『ゾディアック』を俺に渡し、震える声で小さく紗良は言う。

人間に天使のものは使えるのか、疑問に思うが言われた通りにした。
すると、青い光が珠から流れ出し、蒼良を包んだ。

「これは…」

「『ゾディアック』、【バイシズ回復】。
蒼良をお願い。」

そう言い、彼女は萌の元へ歩き始めた。
ふらつく足は一步ごとにしっかりとっていった。
そして、俯いていた顔を勢いよく上げ、告げる。

「萌…、私はあなたを許さない。」

その声はやはり小さく、震えていた。
怒りで。

萌はそれを聞き、鼻で笑う。

「なんとも言いなさい、紗良・セイクル。

今あなたのせいでこの世界がどうなっているのか、教えてあげる。」

二人は同時に、武器を構えた。

* * *

初夏の姉妹ゲンカより高速に、容赦なく、二人の少女は戦っていた。
あまりに、計算されたように緻密に、大胆で、どこか優雅ささえも
が漂うその争いは、舞にも思えた。

紗良が魔法を唱えると、萌の『タレイア』がそれを防ぐ。
そのまま『タレイア』は紗良に突っ込んでいく。

だが紗良はそれを『ヴァルキリー』で受け止め、弾く。

逆に紗良が萌に向かって突進、斬りつけるが『エウプロシユネ』の
盾で防御される。

一進一退の攻防が続く。

「……………」

部外者の俺が今出来る事は、俺の腕の中の蒼良の回復と、この戦いの傍観だけだ。

とても、加われる力はない。
罅迫り合いが行われるなか、俺は齒痒さを感じていた。

(生命力があるだけで…紗良達の役にも立てない…)

「ん…」

蒼良が瞼を震わせた。
翡翠色の瞳が俺を映す。

「…衛兄ちゃん？」

…、大丈夫なの!？」

「ああ。今お前の代わりに紗良が戦っている。」

「…、ボクに、力が無いから…」

蒼良は俺の言葉を聞き、俯く。

「…俺に力が無いからだ。」

蒼良の方が「そんな訳ないよ!」

蒼良は俺の話をかき消し、泣きそうな表情で言った。

「ボク達は、衛兄ちゃんのお陰で助かったこと、いっぱいあるんだよ!」

衛兄ちゃんがいないと、全部助からなかったことなんだよ!

お義姉ちゃんだってそう思ってる。だから、ボク達は衛兄ちゃんを
殺せないんだ!

衛兄ちゃんをいない事になんてしたくないんだ!」

君は殺しちゃいけない気がする。

何で俺を殺さない？

曖昧な答えの真実が、今朝の自問の行きつく先が、ようやく分かった。

そして、俺は今更分かった。

彼女達だって、好きでこんな事をしている訳じゃない事。

誰かが死ぬのを、冷たい目で見ていた訳じゃなかった事。

死んだ方が世の中の為になるこんな俺を、彼女達は生かしてくれていた事を。

俺は聞いた。俯きながら。

「…今、俺に出来る事あるか？」

「んー、無い、かな。」

「やっぱりか…」

「けどね、ボク達の事、見ててほしいんだ。

なんだかボク達衛兄ちゃんに見られてると、頑張れる気がするんだよね！」

もうすっかり元気になった蒼良は、俺の手を解いて【回復】を回収した。

俺はそれを見ながら頷く。

「分かった。じゃあ見てるよ。」

「うんっ」

そして、蒼良は俺の腕から抜け出し、肩幅程度に足を広げて立った。そして、今から空でも飛ぶかのように、両腕を軽く広げた。

応じるように、『ゾディアック』の数珠達が紐から離れ、蒼良の周りを漂う。

その様は、雷を喚ぶ太鼓を持つ雷神のようだった。

「ボクの事怒らせて…ただじゃおかないよ。」

ボクの姓は、ボクの敵を倒し罰する、雷を意味するんだよ。

『サンデル』を…舐めるなよ！」

蒼良は叫んだ。その声は天を震わせた。

まさに彼女の姓のように。

「スターサイン!!!」

ゾディアック
星座達が、冥い空を翔けた。

* * *

蒼良が目を覚ましたのが気配で分かった。

「よそ見なんて、随分余裕があるじゃない！」

萌は飛ばしていた『タレイア』を一度取り、また飛ばし、私と距離

をとった。

私は『タレイア』を弾き、また萌に突っ込む。

「何度やっても同じよー!」

『エウプロシユネ』をこちらに飛ばし、萌は意地悪く笑って後退する。

私は宙を指差し、魔法陣を描く。

それに気づいた萌は『エウプロシユネ』をドーム状に変形させる。

私を取り囲む漆黒のドームは、萌を衛るように、私を見せないようにしているようだった。

好都合だ。

この空間は狭い。身動きを出来なくする為だろう。

この隙にきつと彼女は『タレイア』で私を裂いてくるだろう。

(大丈夫。この魔法なら『エウプロシユネ』も、萌だって黙らせられる…)

それに私は、こんな真っ暗闇などには慣れている。

冷たい水も。ねちっこい言葉も。

構わず、指を走らせた。

そして、私は呟いた。

発動の言葉を。

「パニツシユ・オブ・ソア」

標的は、『エウプロシユネ』ごと、自分。

いや、正確には私の鎌だろうか。

空から落ちるは、白過ぎる雷。
まるで神様が落としたかのように輝く。
私は『ヴァルキリー』を掲げた。
目の前でドームが焼け落ちていった。
そして私に雷が落ちた。衝撃で私はバランスを崩し、倒れた。
雷の痛みなど、感じなかった。
なぜなら…

「バカじゃないのアンタ？自滅？
まあ今のアンタには相応しいけど！」

萌は近寄り、持っていた『タレイア』を私の首に当てる。

「あたしはこのやり方しか知らないの。ゴメンナサイね。
さあ、神様に叱られに行きな

「スターサインー！！」

そこに、蒼良の『ゾディアック』が飛来した。
『エウプロシユネ』は焼けて今は使い物にならない。
萌は舌打ちをして、指を空間に走らせた。浅黄色の光が指から発せ
られている。

「プリザーブ」

魔法の光より濃い黄色の目を歪ませ、彼女は吐き捨てるように呪文

を唱える。

飛んで来た宝石を残らず光のドームで防いだ後、萌は『タレイア』を蒼良に飛ばした。

魔法の数は意思の数程あり、魔法の強さは意志で決まる。彼女の意志はとても堅いようだ。

「せいぜい遊んでなさい。

…さて」

萌は腕に巻き付けていた羽衣を手に持った。

「『グレイス』の一つ、『アグライア』。私の羽衣は特別なよ。能力は【束縛】^{リストレイント}。魔に縛られたアンタに、よく似合うわ」

そして、『アグライア』は私の首にかかった。

「帰る前に教えてあげる。彼はね、罪人よ。

あなたが早く彼を連れていかなかったから、最低でも三百人は救われる筈の命が消えた。

人を殺したら、直接であれ間接であれいけないわよね。さあ、消え「遅い。」

蒼良の技で助かった。

萌の足首に、鎌の柄がくつついている。

「話が長いわ。さっさとすれば良かったのに。

…それと、消えるのはあなたよ」

発動の言葉は簡単な命令。

「痺れなさい」

柄を伝い、先程の真っ白い雷が萌の体を這い上がっていく。
神の鉄鎚が、天使を罰する。

三章（後書き）

一度も描写されていない人間時の萌の髪は、下に二つに結わいています。

優等生みたいな感じですよ。

そんな彼女は、いずれ書く番外編にてほんの少しだけ登場します。番外編も、いつか投稿したら閲覧お願いしますm（）（）m

閲覧ありがとうございます。

三章・e n d・(前書き)

行く秋の冷笑

三章・e n d・

気が付けば、冥い空はそこには無かった。欠伸が出た。そういえば殆ど寝ていない。今日の授業は居眠りばかりになりそうだ。屋根の上には寝不足の俺と、今にも寝そうな蒼良と、ゆっくりと起き上がる紗良と雷に打たれた萌。鳥の声が小さく響く。

「……アンタの『ヴァルキリー』は、【強制送還^{リベイエトリエーション}】じゃ、なかったの……?」

ぎこちなく、萌は起きながら、紗良に問う。

「それは鎌の方。今のはこの鈴の能力、【神託^{オラクル}】。」

「【神託】…、まさか」

「そう。幻の『天賜器^{てんしき}』、『ジャンヌ』。

見つからなかったのはずっと『ヴァルキリー』に付いていたから。私も知ったのは最近だけだね」

いつもの可愛らしい笑みを浮かべ、紗良はこちらに歩いて来た。

「お義姉ちゃん、やっぱりすごいね
格好良かったよ」

「蒼良が頑張ったからよ。」

あれがなかったらきつと使えなかった。負けてたかもしれない。」

そして、紗良は俺を視界に入れた。

どちらからともなく笑う。

駆け寄り、天使は俺に軽く抱きついた。

「衛多くん…」

さよなら
「

何かが、通り抜けたような気がした。
突き飛ばされるように体が離れた。

バランスを取ろうとして、取れない。

屋根にぶつかり、ずり落ちて死ぬ前に、

俺は消えた。

最後に聞こえたのは、

「馬鹿じゃないアンタ!？」

天使が人間なんか抱きつく事なんて、連れていく時ぐらいのものよ!!!」

と言っ、

萌の、冷たい笑い声だった。

三章・e n d・(後書き)

これで三章は終わりです。

次の終章で、この『下界編』が終了となります。

閲覧、ありがとうございました。

終章 - 下界編 - (前書き)

はなむけ
餞の自嘲

終章 - 下界編 -

『地球』の暦で、神の子と呼ばれる者が生まれて二千余年。
小さな島国の暦で、平成十余年。

もうすぐ霜が降りる月、ある日の夜明け頃、紗良の鎌『ヴァルキリ
ー』によって、

堤 衛多という名の少年は、神の元へと向かった。

理由は、神様から与えられた生命力の持ち過ぎによる、人々の生命
力の枯渇に関わるもの。

その事により、最低三百人も命が消えた。

天使として、それは許す事が出来ないものだ。だから紗良は使命を
遂行した。

天使としての、彼女は…。

「お義姉ちゃん、いた…」

蒼良が紗良を探して、ある場所にやって来た。

「なんで、ここにいるの？」

衛兄ちゃんはもう神様の元だよ？」

そう、衛多の部屋、

いや、正確には衛多の部屋だった部屋に。

今、ここには何も無い。

シンプルな勉強机も。

小さめの洋服箆笥も。

彼等の出会いの場所でもある、ベッドも。

よく開け放たれていた窓にかかるカーテンさえも。

彼に関する何もかもが、無かった。

「萌は…？」

「萌は休みたからってさっさと帰ったよ。」

「そう…」

「…お義姉ちゃんは、報告行かないの？」

紗良はゆっくり息を吸う。

鼻腔で感じるものは、少し埃っぽい空気だけだった。

人の部屋独特のにおいさえも消えるのかと、紗良は小さく静かに驚く。

吸いこんだ空気を吐き出し、彼女は絞り出すように声を発する。

「…行かなきゃね。」

「…紗良」

「…！」

初めて、蒼良が義姉あねの事を呼び捨てにした。

今まで、紗良の一族が彼女を迎えた時も、紗良の事は「お義姉ちゃん」だったのだ。

義妹いもは、凜とした口調で言う。

「ボク達は天使。誰かを救う種族だよ。」

今回はそれが量の問題だったんだよ」

「分かってる…分かってるよ」

魔法の光を指先に灯し、紗良はゆっくりと帰る為に魔法陣を描いていく。

「行こう、蒼良。」

考えてみれば、向こうでも会えるだろうし…ね。」

「……。」

(私、今どんな顔してるんだろう…)

彼女に知る術はなく、また、知りたいとも思わなかった。紗良は、呟いた。

「トランス…フェアレンス」

紗良は消しゴムで消されるように、『地球』を後にする。完全に紗良が移動する前、蒼良はポツリと言った。

「…お義姉ちゃん…
無理しなくていいのに…」

彼女が立っていた場所、床には、水滴が一つ落ちていた。

* * *

まずは、自室に移動した。
神様に会うのだから、ある程度の身支度はする。

とりあえず、人間に軽くではあるが抱きついたのでから、みそぎ 襦ぐらい
はしないといけない。

「ピュアファイ」

脱衣し、魔法を発動する。

優しい滝に、身を打たれるような感覚。とても心地よかった。

ふと、目を開けた。

目の前には一糸纏わぬ姿の私と、魔法の滝が映った鏡。

私は笑っていた。

嘲るように。もちろん自分を。

だから、私は自分に言った。

「…それで良いの、紗良。

笑いなさい、自分を…」

そして私はまた笑う。

自分を痛めつけるように。

終章・下界編・（後書き）

これで『下界編』は終了です。

次回からは『天界編』となります。

乞うご期待、です（＾・＾）

閲覧、ありがとうございます。

序章 - 天界編 -

暗闇を彷徨う感覚。

上下左右がどこかなんて分からない。

あるのは途方もなく広がる暗黒だけ。

俺が誰かとか、何があったとか、いつどこでこうなってしまったのかなんて、もう知る術がない。

ただ、なぜか頭に閃くのは、

鮮やかな色の衣に、身を包んだ人。

仄かに明るい場所で、俺を見ていた。

青い目、茶色い髪、輝く鎌。

それと、あの衣の色は、何色だったか。

ああ、そうだ。

俺は、その『誰か』に、何かをされて。

今きつと、この場所にいるんだ。

なら、その人の事を考えよう。

きつと、何か分かる筈だ。

俺は、誰だ？

何があった？

いつどこで、こうなった？

『誰か』は、誰だ？

何をされた？

今、この場所にいるのは何故だ？

よく考え、考え、思い出す、その色。

あの色は。

「桜の色…」

瞬間、俺の視界は、不意に光に包まれた。

そこで俺は全てを思い出す。

ど忘れをしていたように、光に包まれた途端、全てを思い出した。

俺は、堤 衛多という、人間で。

神の元に連れて行かれ。

東雲しのぶが流れる中、俺はある人に斬られ、自分の家の屋根から落ちて
いくなかでここに来た。

『誰か』は、天使。

あの輝く鎌で、俺の腹辺りを斬った。

今、この場所にいるのは、その天使のせい。

決して、それを思い出して、怒ってはいない。

だって、それは仕方のない事だったから。

いつかはされる事だったから。

だが。

今。

この場所に彼女はいない。

探さなきゃ。

もしかしたら、違う所にいるのかもしれない。

探さなきゃ。

今。

自分がどんな気持ちなのかは全く分からないが。

俺は、声に出してその名前を呼ぶ。

「紗良…」

会いに行こう。

きっと、今彼女は、自責の念に駆られているに違いないから。

序章・天界編・（後書き）

天界編スタートです。

これは衛多が『天界』に着く前のほんの数秒の出来事です。
なので、彼が自分を殺した紗良の事をどう思ってるかが分かる、少し大事な話です。

閲覧、ありがとうございます。

四章

目覚めると、さっきの場所にいるような錯覚がした。
真っ白な場所。色が有るのなんて自分だけで、後は全て白色が占める。

けれど、その白に温かみはない。
ただ冷え切った感じだ。

「ここは…」

やっと来ましたね。

「!?!」

頭に直接声が響く。

荘厳な空気が場を重くする。

「…誰だ…?」

人間や天使が敬い、悪魔達が軽んじる存在です。

「…神…様?」

そうです、人間・堤 衛多。

…私の言い方では衛多・バンクス、ですかね。

どうやら俺の名前は今から「堤 衛多」ではなく「衛多・バンクス」らしい。

話を進めましょう、衛多・バンクス。

今からあなたにはある所に行ってもらいます。

そこでする事が済めば、あなたはすぐ元の世界へ帰る事が出来ます。

「そう、ですか」

俺は神様に言われた通り、その場所に向かった。

> 帰る…転生になりますけどね、フッフ…<

去り際に聞こえた声は小さ過ぎて、考えるまで至らなかった。

* * *

向かっている途中、こちらに向かって歩く者がいた。

金髪、翠の目、跳ねるように歩く少女を俺は知っている。

「蒼良…?」

「…えい、兄ちゃん?」

俺に気付くとその天使は走り寄り俺に抱きついた。

「衛兄ちゃん!!良かった、まだいたあ!!」

「…良かった?」

蒼良…どういう事だ?」

その言葉に、俺の腹に顔を押しつけていた少女は俺の目をのぞきこむ。

「え？知らないの？」

「ああ」

言っっちゃまずかったかな、と言いながら蒼良は言った。

「えっと…そつか、衛兄ちゃんは知らないんだよね。」

…あのね、今から衛兄ちゃんは生命力を吸い取られるの。人並みぐらいになったら終わるんだけど。

けど、そうなると転生出来て帰れるけど…衛兄ちゃんじゃなくなるんだよ」

「どついう事だ？」

俺は蒼良を問い詰める。

「生まれ変わるから、戻る時に衛兄ちゃんは別人として過ごす事になるんだよ。」

記憶は全部消されて、容姿も少し変っっちゃうの」

と、蒼良に転生の話を聞いた時、頭に声が響く。

- 衛多・バンクス、遅いですよ。早く向かいなさい。 -

「あ、はい…」

ごめん、蒼良、俺もう行くから」

「あ、う、うん。

… バイバイ、衛兄ちゃん…」

今にも泣きそうな顔をしながら、笑顔で蒼良は手を振った。

* * *

神様に言われた場所に着き、そこで、

「あら、久しぶりね。ここはどう?」

「萌!」

濃い黄色のつり気味の目を持った天使がそこにいた。

「どつって言われても、来たばかりでなんとも…」

「なんだ、そうなの。

ここは素晴らしいわ。みんな主張がはっきりしてて、ケンカはあるけど争いはない。

主張を伝えられず、行動、それも暴力で意見を通そうとする下界のヤツラよりずっとステキな世界なの。」

萌が「下界のヤツラ」と言った時、すごい憎しみを感じた気がしたが、俺は話を続けた。

首を突っ込んだら萌に殺されそうだ。

「なるほどな。で、お前はなんでここにいるんだよ」

「退屈なのよ。」

「だから使命を頂けないかと思って神様の所に行くつもり。」

「退屈だからといって、仕事は出来ないと思う。」

「言おうと思ったがやはりやめ、話を切る。」

「そっか、邪魔したな」

そして自分の内に入ろうとした時、声がかかった。

「…アンタ、憎んだりしてないの？」

「…？」

「誰をだよ？」

「萌が、いつもと違った調子で話す。」

「あの夜の事を、気にしているんだろうか。」

「あたしよ、」

「死ぬハメになって、未練とかあるんじゃないの？」

「俺はその質問に、正直に話す。」

「もし、彼女が気にしていたなら、それを晴らさないといけないから。」

「…覚悟はしてたからな。」

「自分が死ななきゃいけない理由を知って、自分がいる事で生きななきゃいけないはずの人が死んでた。」

「その報いがいつか来るのは分かってたよ。」

「そう…」

ただ。

「…あいつの顔がずっと、頭から離れないだけだ…」

その表情は、

今にも泣きそうだったから。

風が吹いたら散りそうだったから。

暖かい光が当たっても、しおれそうだったから。

神様の優しい言葉でも、枯れてしまいそうだったから…

「俺は「はいはい、あんたも用事あるんでしょ？」

そろそろ…来たわ。ほら」

彼女の指を追って、後ろを見たそこには、

絶世の美女が立っていた。

「…っ！」

思わず、息を飲んだ。

銀色の緩いウェーブの髪、真紅の目、真っ白でタイトなロングスカ
ートにケープを羽織っている。

首にかけてロザリオが印象的だった。

聖母さま、と言っても過言ではなかった。

いや、彼女こそが聖母だと思った。

「…あなたが、衛多さんですね？」

声も、鈴を転がしたかのように澄み切った、慈愛が形になったかのような声だった。

「は、はいっ」

「ふふっ、そう固くならないで下さいな。

わたくし しずか
私は静歌・キャロル。よろしくお願いしますね。」

「はい、よろしく申し上げます…」

俺は何故かメチャクチャに緊張していた。

顔は熱いし、心臓はさっきからバクバクと鳴っているし、泣き出しそうな気持ちで、逃げ出したいくて仕方がなかった。

けれど、この人をずっと見ていたいような、そんな気持ちもあった。静歌さんはまたふふっと笑い、魔法陣を描いた。

「横になって下さい。楽にして下さいね？」

言われた通りに、真っ白な床に寝転ぶ。

「今からあなたの生命力を吸い取ります。

…アブゾーブ」

青白い光が俺に当たった。

それは俺の体に浸透して、冷水のように俺から熱を奪う。体の奥底から、何かが消えていくような感覚。

やがて青白い光は蛍のように俺の体から離れ、頭上に浮かんだ。次から次へと、蛍の光のようなものは、頭上に集まり大きくなっていく。

それは終わりが見えなかった。

まだか、そう言おうとして、ふと見た静歌さんの顔は、魔法の光より、青白かった。

俺はなんとなく恐ろしくなって声をかけた。

「静歌さん…？」

「…っ、ありがとございました…もう、良いですよ…」

カンヴァージ、と魔法を唱え、俺から吸い上げた生命力を加工し球体の中の液体に変え、静歌さんは去ろうとする。

「本当に、ありがとございました、衛多さん。

萌さん、あとはお願いしますね」

なぜかずっと側にいた萌が返事をするより早く、静歌さんは歩き去っていった。

「どうしたんだろ、静歌さん」

「さあ。それと静歌さまの事は敬意を払って呼びなさい。アンタの部屋はこっちよ、堤 衛多。」

「お前…」

俺は彼女の違和に気付いた。
今、俺の事名前と呼んだか？
しかも、生前の、人間の名前で。

「何？アンタはまたすぐ帰るんだから、その呼び方で良いじゃない」

「けど、今の俺は……」

「ウルサイわね！あたしにとってアンタは一生『堤 衛多』なのよ！
天使名はアンタに似合わないし、あたしの認識はそれ以上でもそれ
以下でもないのよ！」

真っ赤になって、萌は早歩きで俺から遠ざかる。
これじゃあ俺の部屋の案内にならない。

「おい、待てよ、早いって！」

俺は素直じゃない天使を追いかけたのだった。

四章（後書き）

全話、章の数は通しています。

混乱するかもしれませんが、なにとぞご了承ください。

閲覧、ありがとうございました。

四章・e n d a（前書き）

聖母の嘲り

四章 - e n d -

遠く、近く、靴音が響く。

それはかつて聞いた優しい音には遠く。

冷たい氷がぶつかり合う音に近かった。

長いスカートに、中には薄く線が引かれたワイシャツ。

提灯袖が、彼女を少し、高貴なものへと見せている。

普段、重力に引かれたままにしている髪は、きつく詰められていた。

髪に引かれて釣り上った目元が、彼女のいつもの雰囲気をも、全く違

うものにしていた。

さながら、優しい天使から冷徹な鬼になったかのような。

そのくらい、彼女の印象は変わっていた。

「驚くべき事が、起きてしまいました…」

どうしました？

頭に直接響く声の持ち主、神に語りかける女は、血のように紅い眼を光らせ、淡々と事実を述べる。

「衛多・バンクスから生命力を取りましたところ…、神様、あなた様が与えた分より多くの生命力が取れてしまったのです。」

彼は、大丈夫なのですか？

あまり、感情を読み取れない声。

両者の声はそれほどに冷たいものがどこかにあった。

「大丈夫どころか…、連れて来る前と何ら変わりがないのです」

数秒の間の後、嘆息が響く。

…それは、大変な事になりましたね。
もう少し、詳しく調べなくては…。

その言葉に、女は素早く対応する。

「分かりました。では、蒼良の力を使いますか？」

女の応対に満足した調子を、少し声に乗せながら、神は快く了承する。

…そうした方が良いでしょう。あれは役立ちますから。

神の了承に、下げていた視線を上げ、女は真っ直ぐ目の前の空間を見つめる。

「分かりました…フフ…。」

不敵に笑う女、静歌・キャロルは首の口ザリオに触れた。

「あなたの仰せのままに…神様…」

四章・e n d・(後書き)

更新遅れてしまい申し訳ありません。

なんだか前書きと内容がかみあってませんが、ご容赦ください。

閲覧ありがとうございました。

五章

あてがわれた部屋で、俺はベッドの上に寝転んでいた。

(…なんだか真っ白すぎて気持ち悪いな…)

目を閉じても視界を占めるのは、薄い灰色であまり変わりがない。

(色が見たいな…)

頭に閃く色は、静歌さんの紅い目、蒼良の金髪、萌の『グレイス』の色彩に、

紗良の桜色。

(そういえば、会ってないな…)

彼女にこの場所へ移されたあの日以来、俺は彼女に会っていない。

(どこに、いるんだ…?)

ベッドから起き上がろうとした時だった。

「衛兄ちゃん、おはよー」

蒼良が扉を開けて部屋に入って来た。

「ああ、おはよう。」

…どうしたんだ？」

「んー、ちょっと気になる事があったね。」

えへへー、と笑いながら彼女は俺に尋ねた。

「衛兄ちゃん、今、天使だよねえ？」

「…そう、なのかな？」

「そうだよ」

だから…魔法、使えるよね？」

「あ…」

そう、天使は指に魔法の光を宿し、魔法陣を描く事で魔法が使える。今の今まですっかり忘れていた。

「使ってみてよ！」

光、気になるんだあ。」

そして、魔法の光は一人一人色が違う。

「…けど、魔法陣なんて描けないぞ？」

「あれはみんな適当なんだよ。」

陣の大きさとか、線の細かさなんか、強さとかを示すだけ。

呪文は、こうしたいって思った事が呪文になって口から出るだけなんだよ。」

随分とアバウトな魔法だ。

だがこれで俺なんかに魔法が使える事がよく分かった。

「へえ…、じゃあ」

空間に指を差した。

すると仄かに温かい紺青色の光が灯った。

蒼良のわあ、という声があがる。

慎重に円を描いていく。続いて三角、どこかで見た難しそうな記号を配置。

形になった所で、俺は願う。

(色が見たい…)

出てきた言葉は、

「ミスト」

…だが、

何も起きない。

「…衛兄ちゃん、『どこに』って、考えた？」

「…全然」

「さっきの魔法陣だと…、お義姉ちゃんの部屋だよ！

多分お義姉ちゃんならすぐに解除してくれると思うけど、行かないや！」

「あ、ああ！」

蒼良はすぐ扉を開け、白い世界を駆ける。

俺は紗良の部屋を知らない。

だから急いで蒼良の背中を追った。

なぜ紗良の部屋に魔法が行ってしまったのかは考えない事にした。

(『会いたいつて考えてた』からなんて、理由にならないしな…)

* * *

「お義姉ちゃん！大丈夫！？」

蒼良は急いで紗良の部屋の扉を開けた。

そこには、

虹があった。

鮮やかな色彩をそれは持っていた。

「？」

大丈夫よ、蒼良？

これあなたがやったの？綺麗ね」

紗良は扉に近い部屋の隅に立って、虹を眺めていた。

部屋は魔法によって作られた湿気のせいで、ジメジメした空気を含んでいた。

「違うよ。けど、綺麗だねえ」

蒼良は虹を見て、当初の目的を忘れたようだ。

「けど本当に、誰がこの虹を作ったのかしら。」

魔法の腕は私以上かも。誰か知ってるのよね？」

「うん 衛兄ちゃんが「そう。」

俺の名前が出た途端、紗良は蒼良の話を途中で止め、魔法を発動させた。

「カンフオート」

言っですぐ、湿った空間は快適な場所になる。

「紗「蒼良、そういうばさっき静歌さまが呼んでたわ」

紗良は俺の話を遮り、さらに無視して、どこかに去っていった。

「…ごめん、衛兄ちゃん。静歌さまの所に行かなきゃ…」

申し訳なさそうな顔をして、蒼良は深々と頭を下げる。

「大丈夫だよ。ほら、静歌さんに遅いって怒られるぞ」

だが、なぜか蒼良は動かなかった。

「ねえ、衛兄ちゃん。」

何か言いたそうな顔してるよ、お義姉ちゃんに」

「そうか？」

自分の顔は、鏡がなければ見れない。
今俺の表情は、俺には分からない。

「うん。追いかけた方が良いと思う。
衛兄ちゃんの為にね」

よく分からない言葉だった。
だが、俺の顔を見れる彼女なのだ。その言葉に従った方が良い気がした。

「…ああ。分かった。」

「衛兄ちゃん、早くしないとお義姉ちゃんどこかに行っちゃうよ」

分かってる、そう告げて俺は紗良を追いかけた。

「…あはは、衛兄ちゃん、気づいてないんだ」

後ろで、蒼良の声が小さく響いた。
上手く聞き取れなかったが。

* * *

俺が追いかけると、紗良は俺に気付いて走って逃げ始めた。

「おい！！待てよ！！！」

返事はない。

俺は何故か腹が立って、速度を上げた。

距離は徐々に縮まって、やがて俺は彼女の腕を捕らえた。

「逃げるな！人の話を……」

だが、その手は払われた。

パシッという快音が辺りに響く。

「あ……」

「……」

払われた俺の声と、払った紗良の無音。

呆然と、払われた腕を俺は見た。

「なんで……避けるんだ？」

蚊の鳴くような声で、俺は言った。

「なあ、答えるよ紗良。

なんで俺を避ける？」

「……」

「答えるよ！！！」

思わず怒声を発してしまった。
響く俺の声が白の彼方に消えた時、紗良の口が動いた。

「…、恨んで、ないの？」

俺と同じくらいに小さな声。
ようやく、話をしてくれた。
俺は答えをすぐに返した。

「…誰が恨むんだ。」

「…衛多くんが、私をだよ。
もつと、色んな人と、色んな所で、楽しい時を過ごしたかったんじやないの？」

前に、萌にもされたような質問。
黄色い少女と同じように、俺は答える。

「…、お前が来たあの春から、ずっと死ぬ事は覚悟してたよ」

「死にたくないって、たくさん言ってたのに？」

「誰だって死にたくはないだろう。お前だってそうだっただろう？」

若干、紗良の表情が変わった。
気付かないぐらい小さく、侮蔑のような表情に。
だがすぐにそれは消え、紗良は迷う声を出す。

「けど…」

もう一押し。
言葉を紡ぐ。

「お前いちいち根に持つよな…。
良いんだよ。そうしないと他のたぐさんの人が死んでた。
俺はお前に殺されたんじゃない。俺には天罰が下ったんだよ。」

「……」

「気にするなつて。
知らない人ばかりより、命を奪った奴でも知ってる人がいる。
それだけでも結構違うし、それに…」

「…?」

本当は、違う言葉だったかもしれない。
だけど、紗良の顔を見た途端、言葉は変わった。
いや、最初から、この言葉だったのかもしれない。

「…なんて言うのかな、
…お前に、会いたかった、し…」

顔が熱い。

それを悟られないように俯けた。
だがこれは、紛れもない本心だ。
真っ白い自室でも、初めて、魔法を使った時も。
会いたいって、俺はずっと思っていたのだから。

顔を上げたら、紗良が泣きながら飛びついて来た。

「は！？なんで泣いてんだよ！？」

「…、だってっ、だってえ…っ！」

嗚咽と混じって、声を届けようとする紗良。

俺は彼女の背中に手を回し、子供をあやすように優しくさする。

「…、無理に言わなくて良いよ。」

紗良はそれを聞いた直後、大声をあげて泣いた。

あの話…が来るまですっと、彼女は俺に縋って泣いていた。

そう、あの天使が来るまで。

「はいはいお二人さん、何こんな所でイチャついてるの？」

萌だった。

「い、イチャついてなんかないよ！どうしたの！？」

紗良はパツと俺から離れ、萌に近づく。

「用があるのは堤 衛多、アンタよ。」

また静歌さまがアンタを呼んでるわ」

「静歌さんが…？」

「ちょっと、衛多くん？」

いきなり紗良が俺に詰め寄った。
目元は泣いたから、やはり赤い。

「な、なんだよ」

「静歌さまの事を『さん』だなんて、そんなに軽く呼ばないでよね！
静歌さまは、一番最初に大天使になった天使なんだよ！」

大天使、『大』と付くのだから、やはり偉いのだろう。
それに一番最初になったのだ。

「…すげ」

それしか言葉が出なかった。

「だから『さん』なんてダメ！

『さま』って言うこと！分かった？」

「…あ、ああ」

思わず頷いてしまった。

それ程今の紗良は怖かった。

「それから…」

紗良は俺の耳に口を寄せ、告げた。

「ありがとう」

そして彼女は言い終わるとすぐに俺の背中を押した。

「ほら！早く行きなさい！」

静歌さまを待たせるのは絶対にダメだよ！」

「あ、ああ」

今日はなんだか急かされる日だ。

いってらっしゃい、と萌と紗良は俺を見送った。

涙で赤くなっていた紗良の目は、笑みの形になっていた。

(少しは、役に立てたのかな…)

* * *

衛多が静歌に会う、少し前。

静歌に呼ばれた蒼良は、静歌に指定された場所に向かった。

「なんででしょうか、静歌さま？」

「ふふ、よく来ましたね、蒼良さん。

蒼良さんの『ゾディアック』の力を借りたいのですが…」

それを聞くと蒼良は表情を明るくして問う。

静歌の力になれるのが嬉しいようだ。

「あ、良いですよ。【変装^{ヴァーゴ}】ですか？それとも【分身^{ジェミニ}】？」

「いえ、【計測^{ライブラ}】です。

少し貸して下さい」

そう言つて静歌はロザリオを外す。

よく見るとロザリオの交差する部分には、小さな石が嵌まりそうな窪みがあった。

静歌は自分のロザリオと蒼良に手渡してもらつた『ゾディアック』の黄色い珠をくつつけた。

共鳴するかのように、黄色い珠とロザリオは光を発する。

やがて光は収まった。

ロザリオの交差した部分には黄色い宝石がいつの間にか嵌まっていた。

「ありがとうございます。用はそれだけです。もう帰つてもよろしいですよ」

にこつと笑つて静歌は蒼良に『ゾディアック』を返し、ロザリオをまた首にかけた。

「静歌さま、一つ質問なんですけど…、【計測】を何に使つんですか？」

「…秘密、ですよ。」

ふふふ、と静歌はまた笑い、どこかに行った。

* * *

俺が向かった場所は、初めて静歌さんに会った場所だった。

「ふふ、この前みたいに横になってください。

今日は少し調べるだけです…」

「調べるのは前に、蒼良がやりましたが…」

「あの時は、紗良さんが『ヴァルキリー』で中断してしまったですよ？」

だからしっかり調べたいと思ひまして。」

確かに、あの時紗良は蒼良の『ゾディアック』を斬ってしまったていた。

その事が今に響いているのだろう。

俺はなるほど、と納得してまた白い床に横になった。

静歌さんは胸元の小さな十字架を握った。

すると、十字架の中央に埋め込まれた黄色い宝石が光った。

途端、初夏のあの日と同じように、俺は黄色い球体に包まれた。

(!?)

俺の驚きに気付いてか、静歌さんは微笑み、教えてくれた。

「私の『天賜器』、『ユダ』の力です。

能力は【イミテーション仮性】。一回だけ、『天賜器』の能力や魔法を吸収して使えるのですよ」

なんだか便利なようで不便そうな能力だ。

だがその言葉は胸にしまつて、俺は黙つて黄色く輝く天井を見た。

静歌さんは、球体の表面に浮かぶ「情報」を見ていた。

やがて、俺は睡魔に襲われ、眠ってしまった。

最後に覚えているのはなぜか、静歌さんの魔法の、青白い光だった。

* * *

しばらくして、俺は目を覚ました。

自室にいた。欠伸を一つして、俺はあの後何があったか推測した。

「…運んでくれたのかな」

静歌さんに悪い事をしたと後悔して、部屋を出る為にドアノブを掴もうとし、

「いつっ」

突然の痛みに声をあげてしまった。

（静電気？）

そう思い、見た掌の中央に、小さな傷があった。
全く身に覚えのない傷だ。

（…？）

不思議に思いながら、戸を開け外に出た。

静歌さんに、謝る為に…。

五章（後書き）

更新遅れて申し訳ありません。

今回衛ちゃんの手のひらに付いた傷ですが、覚えておいてください。
割と重要な役ですから（笑）

閲覧、ありがとうございます。

五章 - e n d - (前書き)

胎動の微笑み

五章 - e n d -

艶やかな銀髪を後ろに引つ詰め、キビキビと歩く者がいた。前を見据える真紅の目は、強い意志を瞳に宿している。堅く引き結んでいた唇は、足音が静まると同時、言葉を発す。

「衛多・バンクスの生命力の正体が分かりました。」

どのようなものだったのですか？

それに返る言葉は、どこか遠い。

だが彼女の胸には何よりも強く響く声だった。

「…それが、彼は自ら生命力を作り出していたのです。

…そこまでしか分かりませんでしたか…」

静歌・キャロルは申し訳なさそうに言った。

だが、返事はとても優しくかった。

そうですか、ご苦労様です。それだけでも分かれば十分ですよ。

…では、そろそろ動きましょうか…。

「…あの、神様…」

なんででしょう？

神は、言葉を待った。

生真面目な彼女なら、それに対する異論などと言ってくるのではないかと。

しかし、静歌は周りを見渡し、か細い声で言った。
顔を俯け、その表情を読めないようにして。

「今ぐらいは、…姿をお見せしても良いのでは…」

ほんの少し見えた静歌の顔は、羞恥か何かで赤く染まっていた。
神は、小さく笑い、

そうですね…。

答えた。

眩い光が白い空間に発生する。

その色は黄金。

光が消えた頃、そこには一人の天使がいた。

緩く下方で一つに結んだ長い金髪。

空より青い碧眼。

雪より遥かに白い長衣を纏った彼は、優しく銀髪の天使を見つめる。

「…神様…」

「今の私は神様ではありません。唯の天使です。」

金の天使はそう言うが、銀の天使は首を振った。

「いえ、原初の天使、そして真の最初の大天使です。

シン・クリスト…」

頬を桜の色に染め、はっきりと静歌は言う。

「忘れていました。ありがとうございます。」

笑う彼は音をたてずに動き、静歌の赤い頬に手を伸ばす。

「…なんでしょうか、シン？」

「あなたは髪を下ろしていた方が似合いますよ、マリア。」

「静歌」ではない名を聞き、彼女は否定の言葉を紡ぐ。

「その名は捨てています…」

それを聞くとシンは、引つ詰めていた静歌の銀髪をほどいた。

「あなたが捨てたその名はずっと、私が預かっていました。

今この時だけは、あなたは静歌・キャロルではなく、マリア・ブレ
スです…。」

金糸が銀糸に絡んだ。

数秒も経たずに二人は離れる。

シンはマリアを抱き締め、囁く。

「動きましよう、マリア。世界の為に。

全てを護る神として、私はあなたに命じます。」

「仰せのままに、神様。

私は永遠とわにあなたと共に…。」

二人は顔を見合わせ、微笑んだ。

五章 - e n d - (後書き)

神様の正体、ついに登場です。

五章はこれにておしまいです。

次は間章です。

今の季節にピッタリ(笑)のクリスマスです。

なんだか衛ちゃん和紗良が急接近の予感、です(笑)

閲覧、ありがとうございます。

間章

夢を見た。

桜の下に立っている夢だ。

思い出せないものが一つあって、それはとても大切なものだった気がする。

「なんだったかな…」

天使になって幾日経って、俺はよくこの夢を見る。

だが毎回その「とても大切なもの」が何か分からない。

いつも考えて、思い出して、分からなくなった頃、誰かが俺の部屋を訪ねて来る。

大半は、

「衛兄ちゃん！」

蒼良だったりする。

「ああ、おはよう蒼良。…どうした？」

今日の蒼良はいつもと服装が違っていた。

普段は蛍の光のような色のワンピースに、長く薄手の白いカーディガン。

装飾も何もない白いブーツを履いている。

だが今日の前にいる蒼良の格好は完全に白かった。

肩紐、胸元、裾、それらにファーが付いた短いワンピース。

提灯袖の、脇辺りまでの長さのアームウォーマー。だが袖と言った方が通じそうだ。それらも末端にはファーがある。

白いタイツに包まれた足の先には、長さは普段と同じだが、ほんの少しのヒールと、靴紐が付いていた。色は、今回は巻かれた髪と、肌と、目、そして天使の輪等の装飾品だけだ。

「ん？ああ、この格好？

衛兄ちゃん、今日は何の日か知ってる？」

頭の中でカレンダーをめくる。

行き着いた日付は、

「十二月、二十四日？」

「そう！クリスマスだよ

ボク達天使のお祭りだよ」

いつもより上機嫌の蒼良は、俺に浄化の魔法をかけ、外に連れ出した。

そして、ある扉の前へ引つ張っていく。

扉の中には、仕事をするたくさんの天使達がいた。

皆忙しく走り回っている。

『師走』の二文字が頭に浮かんだ。

「礼服の調達しなきゃね

すいませーん！」

一番近くにいた天使が反応、俺達の方に走り寄って来た。

「何でしょう？」

…あら、蒼良さん。私の作った礼服、わたし着てくれてるんですね」

「もちろんだよ玻璃さん

今日はね、衛兄ちゃんの礼服を作ってもらいに来たの！」

言って、蒼良は俺の方に目を向けた。

「衛にい…、あ、あなたですね。

こんにちは、私は玻璃はり・ニーダです。

天使の職業の一つ、『ヴィーガ』のリーダーを務めております」

「…こんにちは…、衛多・バンクスです…」

透き通るような銀というより白い髪は、絹のような艶を持っていた。黒い瞳は名前の通り玻璃ガラスのような輝きがあった。

「えっと、玻璃さん。なんか全然分からないんですけど、まずクリスマスが何なんですか？」

「バンクスさん、新米の天使ですか？」

「まあ…」

キラキラと艶めく髪を払って、玻璃さんは教えてくれた。

クリスマスは、天使が年に二回、月を気にせず出歩ける日の一つだという事。もう一つはバレンタインデーなのだそうだ。

下界と同じように、パーティーをするらしい。

そして、クリスマスは礼服を着ることが決められている。

普段の格好ではやはりつまらないから、という噂らしい。

そして、玻璃さんがリーダーの『ヴィーガ』は、衣服を作る天使の集まりらしい。

その道に長けている人が多いそうだと。他にも、下界等の監視をする『アルタイア』というグループがあるそうだと。

そう言った者は、この仕事に魅力を感じる人や使命をこなすのが苦手な者が、神様の配慮により使命以外で活動し、大天使を目指せるようにと考え出したらしい。

実際、その昔使命ではなくこうした活動で大天使になった者がいたとの事だった。

「…こんなものですかね。それでは、礼服を作りましょうか」

「よろしくねガラスさん！とびっきりのお願いね！」

そう言って蒼良は俺の背中を押す。

時間がかかるんじゃないだろうか、そう考えていた俺の耳に、その言葉は届いた。

「慌てなくても大丈夫ですよ。

…もう採寸は出来ましたから」

「え？」

「礼服だから色は白。蝶タイというよりはネクタイですね。いや、あえてなしかな…この人はピシッと決めるより少しだらしなさがあつた方が良いでしょうね。だったら上着は羽織る程度のもので、ズボンはあるうまでもなく白で、足はこの人に白い革靴は合わなさそうだな。若干グレーが混ざつたものなら良いかな、どうだろう…」

ガラスさんが壊れた。俺はそう思った。

平然とする蒼良に俺は聞いた。

「…蒼良、玻璃さん大丈夫か？」

「うん いつもこうだよ。玻璃さんは衣服の事になるとちよつと暴走しちゃうの。」

その代わり、最高のものを作れるのは、今のところリーダーの玻璃さんしかいないの」

そんな玻璃さんはいつの間にか屋内に通る虹色の川に手を入れて、水面をかき混ぜていた。

時折様子を見ては、またかき混ぜる。

しばらくして、川から何かを掴んで一気に引き上げた。

純白の礼服が、そこにあつた。

「出来ましたよ、どうぞ」

丁寧に折り畳まれて渡されたそれは、濡れているどころか日に干されたように温かさがあつた。

川から取り出された時にざっと見た礼服のデザインは、先程玻璃さんがぶつぶつ言っていたものと同じもので、俺好みに仕上がっていた。

「ありがとうございます。…素晴らしいですね」

「いいえ、こちらこそ。」

じゃあ、私はまだ仕事がありますのでこれで…」

そう言って、笑顔の玻璃さんは溢れかえる人の中へ入っていった。

「大変だな…」

「そつだね。けどボク達も玻璃さん達も自分の仕事に誇りを持って
る。」

だから頑張れるんだよ」

玻璃さんの去っていった方向に強い眼差しを向けながら、蒼良はそ
う言った。

だがすぐにいつもの表情に彼女は戻る。

「さ、衛兄ちゃん、早く着替えて！

ボク衛兄ちゃんが礼服装たの早く見たい！」

俺は蒼良に背中をグイグイと押され、自室に戻る事になった。

* * *

真っ白い礼服に袖を通す。

サイズはぴつたりで、着心地は申し分がなかった。

部屋に備え付けられた姿見でざっと確認しようとして、

「着替えたー？」

と、蒼良が入って来た。

「…、衛兄ちゃん、だよね？」

「は？何言ってるんだ蒼良？」

「あ、うんそうだね！ボク何言ってるだろうね！？」

真っ赤になつて蒼良は部屋から出ようとする。
だが蒼良は扉の前に立った人物にぶつかった。

「ひゃっっ」

「あら、ごめんなさい。…なんだ、蒼良・サンデルか」

「なんだって何だ！」

萌だった。

いつものように蒼良とケンカだ。

「おいおい、何しに来たんだ…」

「あら、堤 衛多。あんたもいた……の……」

彼女もおかしかった。

言葉と、格好が。

真っ白いイブニングドレスに、ショール代わりの羽衣 彼女の場合、
武器の『アグライア』だ を纏っている。

折れそうな程細いヒールの靴がよく似合っていた。
だが、俺を見て変な喋り方をしている。

「どうしたんだよ。さっきから二人共おかしいぞ？」

「あ、あはははは。だって、衛兄ちゃん…」

蒼良は頭から湯気が出そうな程、赤く乾いた笑いを漏らしている。

「そ、そんな訳ないじゃない…、馬子にも衣装って…」

萌はぶつぶつ言って、俺から顔を背けている。

埒が明かないので話を進める事にした。

「あのさ、それでお前達は何しに来たんだよ？」

「あ、そうだ、そうだった。

あはは、ごめんね衛兄ちゃん…」

「そろそろ時間だって言いに来たのよ。

全く、余計な時間を食ったじゃない。行くわよ」

萌はツカツカとヒールを鳴らして部屋から出た。

追いかけるように蒼良も部屋から出る。

(…、格好おかしいのかな?)

不安に思いながらも、俺も上着を持って部屋を出た。

* * *

集まった場所は、この白い世界のどこにでもあるような真っ白い空間だった。

多くの天使がその場所にいた。

「これからどうするんだ？」

「今から下界に降りるんだよ
気に入った場所でクリスマスを過ごすの！」

「まあ、みんな大抵古い洋館なんかに行くんだけどね」

『先輩』である二人から話を聞いた後、その一人に飛びつかれる。

「衛兄ちゃん、一緒に行こー」

「あ、ああ」

「全く…、これだからお子様は。
お守りが必要ね」

萌の言葉に、蒼良が腹を立てる。

「お守りってなんだ！そんな子供じゃないもん！」

「あら、どこからどう見てもお子様じゃない」

「変化へんげしたらボクの方が大人だもん！」

二人の口ゲンカは止まらない。

「精神年齢はお子様のままだけどね」

「むづう…っ！」

「あの…、行こうぜ二人共…」

俺はこの後後悔した。

女のケンカに口を挟むものではない、と。

「「堤 衛多ノ衛兄ちゃん は黙ってて…！」」

「…はい」

それからしばらくしてやっと、俺達三人は下界に降りる事になった。萌は蒼良にどこの場所に行くかを聞き、さっさと魔法陣を描いて移動してしまった。

俺は蒼良の描く魔法陣に入った。

大きく描かれたそれは、子供の落書きのように思えた。

「気分次第」で描かれるものだから、仕方がないが。

蒼良は満足気な顔で、高らかに

「トランスフェアレンス！」

と言う。

頭が巨大な掃除機に吸われるように、空間に呑み込まれる。

意識が急激に、白い空間から真っ黒い宇宙へ抜け出す。

長い間白ばかり見ていたから、何故だか新鮮に感じた。

「…なんでだろうね」

「ん？」

斜め前を飛ぶ蒼良が呟いた。

「どうして、ボク達のいるあの世界は、あんなにも真っ白なんだろうね…。」

ボク、あの場所、実は眩しすぎて嫌なんだ。

…『地球』みたいに、色がいっぱいある方がボクは好きだな」

俺は何も言えず、広大な宇宙の闇を見た。

ただ星が光るだけの暗黒なのに、なぜか俺はそれを綺麗だと思ってしまった。

* * *

俺と蒼良、それから先に来ていた萌は、古びた洋館に着いた。なぜか、幽霊とかそういった類のものが出そうな感じはせず、今人が居なくなっただかのような雰囲気があった。

「久しぶりに来たなあ さてと…」

蒼良は言うが早いか、洋館の扉を開け放ち、魔法を描いた。

「クールゲイル！」

突風が館に来た。積もっていた埃が舞う。

かかっていたクモの巣もちぎれ飛び、全てを宙に浮かせた。だが風が逃げる場所がない。埃などが室内を舞うだけになっていた。

「あれ？」

「はしゃぎ過ぎ。少しは頭を使いなさい。」

「カーム」

浅黄色の魔法陣が風を止めた。

萌は小瓶を取り出し、中身を出す。中は真つ黒い砂粒…

いや、彼女の武器の一つ、『エウロプシユネ』だった。

『エウプロシユネ』は何個かに分かれて飛び散り、洋館の扉や窓全てを開けた。

そして萌はまた魔法を発動させた。

「レイジブラスト」

先程より強い風が洋館の中を駆けた。

開いた扉から窓から、時間の蓄積の跡を消していく。

「お掃除完了」

そう言っ萌は中に入っていく。

「むーっ、ボクが衛兄ちゃんに良い所見せたかったのにい！」

「発想は良かったよ。萌も似たようなの使ってたしな」

「本当？」

「えへへ、じゃあボクの方が頭良いんだね」

「二人共、中入らないの？」

館の中から萌の声が響いた。

「ここ、広いわね。あたし達だけじゃつまらないわ。

…みんなを呼びましょう」

萌は艶っぽく笑って言った。

* * *

魔法を使ってたくさんの天使を呼んだ。皆この洋館が気に入ったらしく、どこからか小さなテーブル等を持ち込んで、立食パーティーにしてしまった。

天使だって、必要はないが食事ができるのだ。

俺はそれを多少楽しんだが、段々人の多さに息が詰まり、俺は洋館の一番端のバルコニーに来た。だが先客がいた。

「ああ、えーちゃんじゃない。どうしたのぉ、こんなところにきてえ」

彼女の手には、ワイン。

「…萌、お前、未成年じゃないのか？」

「なにおおー、あたしはね、えーちゃんなんかよりずーっとずーっとでんしているんだからねえ？」

えーちゃんなんかより、せんぱいで、おねーちゃん、おとななんだからあ！」

萌の目は据わっていて、顔は真っ赤だった。

手すりに勢いよくワイングラスを置き、彼女は千鳥足で俺に歩み寄る。

そして俺の手をとった。

「ちよーっと、おはなししましょー。なんのはなしがいいかしら。あたしのしいんでいーい？」

「死因…？」

「…良いけど」

「んふふ、ながくなるけどいーかしら。ねないでよねえ？」

そして萌は、天使になった理由を話した。明るく語っていたが、悲しいものだった。

* * *

三年前、ある事件があった。

被疑者は男。無職で住所不定、金に困ったから罪を犯した。

被害者は女。まだ若く、通勤途中に通り魔である男に鞆をひつたくらわれ、おまけに腕を切りつけられた。

だが、被害者はもう一人いた。

彼女は、被疑者と、「正義の味方」に殺された。

それはどこにでもある日常に起こった。

その日は、通り魔が出た日の翌日だった。

住民は皆通り魔を警戒していた。

だが学校はいつも通りにあった。

少女 石路つわぶき 萌花もえかも学校に行く一人だった。

その日はいつもより余裕があり、いつもよりゆっくり学校に向かっていた。

いつも通りの通学路には、小さな人だかりが出来ていた。

気になり、近づいた彼女のすぐ脇を、誰かが通り抜けていった。

瞬間、熱が右の脇腹に宿った。

手を当てると、真つ赤な液体。

彼女はその場でへたり込んだ。

傷は深く、血はどんどん自分から逃げた。

ショックが強く、どうすれば良いか分からず、混乱したまま彼女は

自分の血を見ていた。

そこで、追い打ちがかかった。

誰かが言った。「犯人が逃げた」と。

人々が少女を蹴り、踏みつけ、あらぬ方向へ走って行く。

後に残されたのは血溜まりに伏す傷ついた少女だけだった。

少女はぼんやりとした視界の中、濁った赤とくすんだ灰色を見ながら思う。

人間は、愚かだと。

何も学ばず、ただ時の流れに流され、決まった時間を繰り返し続ける愚者だと。

そう思いながら死んだ少女は、絶望をその目に映して天使になった。

与えられた姓は「ネメシス」。
報復を誓った女神の一族…。

* * *

「あはは、あたしよわいわよねえー！
きられて、ふまれただけでしんじやうなんてえ〜」

「……………」

「あたし、せーしゅんまつさかりのじゅーはちだったのよお？いや
になるわよお〜」

「……………」

蒼良の時のように、俺は何も言う事が出来なくなった。
どうしてこんなに、自分の死んだ訳を明るく言う事が出来るのだろ
う。

「あのねえーちゃん、あんたがそんなかおしてもこまるだけなん
だから！」

「けど、理不尽だとか思わないのか？
したい事とか、あったんじゃないのか？」

萌はそれを聞くと、遠い目をして、笑う。

「あつたかもねえー。けどそんなのいまでもできるでしょ」

「そっか…」

「それに…てんしになって、いろんなとこまわって…、そこで、だ
いじなひとをみつけることもあるからねえ」

言つて、萌は俺の方を見る。

ほんのりと赤い頬が、さらに赤くなつた気がした。

「たとえば、あのことがそうよねえー？えーちゃん？」

「え？あの子？…誰だよ？」

「うわ、ドンカン。じぶんでかんがえなさいよねー」

羽衣を靡かせて、萌はふらふら歩き出した。

「あ、そういえば」

だが、突然彼女は立ち止まる。

「なんだ？」

「きょう、あのこさそわなかつたわね。あいにいきなさいよ」

あの子。

この場にはいない俺の知り合いといえ、あいつしかいない。

「…紗良か？」

「そうよ。なかまはずれはいけないわよう？」

* * *

一人きり、私は高い塔のてっぺんにいた。

ホワイトクリスマスにはならなかったのが少し悔しい。私の唯一、楽しみだったこの日。

毎年願って、また今年も叶わなかった。

「雪、降ってほしいなあ…」

その時だった。

「サクセス」

声が響く。

白雪と一緒に降ってきたのは、白衣に身を包む彼だった。

「見つけた…」

若干、彼は息を切らしていた。

「蒼良や萌と、一緒にいたんじゃないの？」

「いたけど、言われたんだよ。会いに行けって」

彼が眩しくて、私は俯く。

「…一人にしてよ」

「すぐに帰ったら、酔った萌に絡まれる」

「…話しかけないで」

「意思の疎通の仕方、元人間はそれしか知らないから」

衛多くんは私の隣に座った。

ほんの少し、距離を置いて。

「…何よ」

「いや、一つ聞きたい事があつてな。

…これ、どうすれば良い？」

俯けていた顔を上げる。

目に入るその色は、銀。

忘れていた。

彼が生きていた頃、『手錠』として魔法で作った銀の指輪。

それが今も、彼の左手で光っていた。

意識していなかったが、私の左手にも指輪がある。

もう、役に立たない『手錠』が。

「…『手錠』の意味はもうないから、好きにすれば？捨てちゃいな

「よ」

「…じゃあ、加工しても良いか？」

「良いけど…、別にそれじゃなくても良いんじゃない？」

どうしてあえて、それなのか。

私には分からない。

「いや…。」

なんか、これじゃないと駄目な気がして、な」

小さく、衛多くんは笑った。

その時だった。

何故だろう。苦しくなった。

「…ごめん」

私は立ち上がり、彼から離れる為に、足を空に投げだした。望んでいたのに。

この日を。

ホワイトクリスマスを。

笑顔を。

なのに今、どうしようもなくそれから逃れたかった。

飛んで、走って、消したかった。

どうして、そう思うんだろう。

私の頭上だけ、雪が降っている。

紗良が、足を空に投げだした。

人間だった頃の危機感が、俺は彼女の腕を取った。

「…っ、離して！…！」

「どこ行くんだよ！？」

「どこだって良いじゃない！！衛多くんには関係ないでしょ…！」

そうだ。関係ない。

だが俺は、問いかけていた。

「逃げるのか！？」

紗良は抵抗を止めた。

へたり込み、その手を顔に持っていった。

「…、嫌だよ…！」

浅く積もった雪を、融かすそれは、涙。

紗良は、泣いた。

「もうやだよ、もう、いやぁ…！」

困惑したが、俺は言う。

「どうしたんだよ。聞くよ、愚痴」

大きく二、三度頷き、紗良はしゃくりあげながら話す。

「え、衛、多くん、…殺してから…っ、私、変なお…っ」

「…うん」

俺は彼女の背中に手を回す。
小さな背中が震えている。

「もえが…、萌が、来たとき…っ、たたかつ、た、とき…衛多くんは、罪人だって言われたの…」

「…うん」

心臓が、締めつけられるような、そんな感覚。

彼女が語った「罪人」という言葉、それが理由ではない気がした。

「だから、わたし、天使だから…、ぜったい、ぜったいに、つれて、いかなきゃって…」

「…うん」

心底から湧き上がるそれは、俺を動かそうとする。
俺は耐えた。

「…それで、わた、わたし、衛多くん、えいたくんを、きつ…斬つて…いやあああああつ…!!」

「泣くな、お願いだから…」

手持ちぶさただった左手を、彼女の右手に重ねる。
俺はどうすれば良い？

「もういやあつころしたくない…殺したくない!…!…!」

「紗良…」

俺が死んだあの時を思い出しているのだろうか。

紗良は、もう壊れそうだった。

「こわい、こわい…、たすけてえ…」

もう、無理だった。

激情に身を委ねた。

彼女の世界を衛る為に。

背中に当てていた右手を、

右手に当てていた左手を、

右腕の向こう側に動かした。

そのまま、引き寄せる。

泣きじゃくる紗良を、抱き締めた。

そのまま、紗良はずっと泣いて、俺はずっと抱き締めていた。

涙が雪の上に落ちた。

融けた雪は塔を伝って、落ちていった。

腕の力を強めて、俺は目を閉じた。

彼女の望みが降る中、俺達はずっとそうしていた。

間章（後書き）

この間章から二人の関係が動き出します。
次はこの話の少し後の事です。

閲覧、ありがとうございました。

間章・e n d・(前書き)

断定の談笑

間章 - e n d -

十二月二十五日、午前八時。

昨日の礼服のまま、俺はベッドに倒れていた。

何時間か前の事なのに、昨日の事が頭から離れなかった。

小さな背中が、

真っ白い姿が、

涙に濡れた顔が、ずっと脳内を巡っている。

あの時、言いたい事がたくさんあった。

「なんで一人でいるんだ」とか。

「礼服似合ってる」とか。

けれど、彼女はあの時泣いてしまったから。

俺が、泣かせてしまったから。

だからただ、抱き締める事しか出来なくなっていたんだ。

(…それに)

あの後、紗良は先に帰ってしまった。

(…会いに行こう)

そう思った時だった。

ノックの音がした。

「…どーぞ」

小さな音で扉が開いた。

羽衣。脇辺りまである白い手袋、同色の太腿まである白い長靴、桜色の薄いミニのワンピース。

紗良だ。

昨日の礼服は、手袋と長靴にファーが付き、首と裾にファーが付いたノースリーブの白い腿までの上着に、中には銀のタイトスカートを履いていた。

白いファーの髪飾りも付いていて、まるで雪に包まれたような格好だった。

春になって桜が咲いたような格好の彼女は、

「…おはよ、衛多くん」

俯きがちに挨拶の言葉を投げた。

「…おはよう。どうした？」

足を床に投げ、俺は彼女に近付いた。

「うん。…昨日、言いたい事あったけど、言えなかったから今言いに来た」

「なんだ？」

少しの間を置き、彼女は言う。

「…、」

メリークリスマス、衛多くん」

笑って上げた紗良の顔には、涙で赤くなった目元があった。

その時、俺は決めた。

罪を背負った俺でも、彼女だけは衛っていいこう、と。

そして、俺は気付いた。

「大切なもの」が、何なのかを…。

間章・e n d・(後書き)

次の章で天界編は終了です。

閲覧、ありがとうございました。

六章 前編

紗良は静歌に呼ばれ、神の元に来た。

「何でしょう、神様？」

少し忘れていましたが…、あなたの処罰を決めます。

「…!!」

紗良は、その事について全く考えを巡らせていなかった。

私の予想からかなり遅れてではありますが、貴女は使命をやり遂げました。それに関しては評価しましょう。

ですが、二度も同志と戦い、しかも人前で天使の力を見せてしまいました。

…総合的に見て、あなたの処罰は…。

「……………」

重苦しい沈黙。

その先の言葉は、

『墮落』、です。

あまりにも、暗かった。

「そんな!!」『墮落』は天使を殺し、悪魔に力を貸す程、大罪を犯した者の罰のはずです!!」

「…それ程、あなたの罪は重いの」

紗良の反論に、静歌は辛い言葉を吐く。

紗良は何も言えず、ただ俯く。

…ですが、それを回避する方法が、一つだけあります。

「なんですか!？」

その時、静歌はそつと、神は確かに微笑んだ。

それは…。

聞いた紗良は、まとも反論しようとするが、口を閉じた。

分かりましたとただ一言、ゆっくりと踵を返す。

歩き去り、彼女が点程にしか見えなくなった時、静歌が言葉を紡ぐ。

「神様も、悪い人。ただ衛多・バンクスを早く転生したいだけでし
よう?。」

当然です。彼のせいで世界はバランスを崩したのですから。

未だ、そのバランスは崩れたまま。待っていたら、世界は滅びます。

クスクスと小さく笑う静歌は、何かを思いついたのか、表情を真顔
に戻す。

「そうでした、神様。この前の生命力の吸引の際、印を付けておき
ました」

印…何でしょう？

静歌はまたもそこで笑う。

笑いで潤んだ赤い目を空間に確かに向け、伝えた。

「どこにいても、何をしていても、彼の居場所が分かる印、です。たとえ下界へ、異世界へ逃げて…、私達には分かっちゃいませう、そんな印ですわ」

* * *

手に付いた傷が癒えない。

自然に治るかと思ったが、一月程経っても消えず、蒼良の『ゾディアック』を使っても傷は殆ど治らなかつた。

初めに気付いた時、静歌さんに聞いてみようと思ったが、どこを探しても彼女は見つからなかつた。

だから今度こそ、俺は聞こうと思っていた。

「…さて、行く「衛兄ちゃん！」」

気合いを入れてベッドから起き上がるうとした瞬間、蒼良が『ゾディアック』で扉を壊して入って来た。

勢いを殺せなかつた珠が俺のすぐ横を通過した。

…数秒前の体勢だったら危なかつた。

「…何だよ、危ねーな「お義姉ちゃん」が！『墮落』しちゃう！」

「…は？」

いきなり過ぎて意味が分からなかった。

「…何だ？『墮落』って？」

そう、まず『墮落』の意味だ。

今まで何かと聞いてきた言葉だが、意味は全く知らなかった。

「『墮落』って言うのはね、文字通り、悪魔に墮ちる事なんだよ。天使の最大の罰なの。」

…お義姉ちゃんはその最大の罰を受けちゃったんだよ！」

「なんでだ？」

理由も気になる。

蒼良は言い辛そうな顔しながら、教えてくれた。

「…多分、衛兄ちゃんの事だよ。連れてくるのが遅かったから…」

俺の、せい。

「…納得いかないな。紗良に話を聞きに行くぞ」

本来しようとした事と関係がない事だったが、罰などの事なら、神様や静歌さんも出てくるはずだ。

「うん！」

と頷く蒼良。

だがその前に、壊れた扉を直してもらった。

* * *

蒼良と二人で、手分けして紗良を探す。

萌にも協力を仰いだが、彼女は使命の遂行に向かっていた。指輪の力も使ったが、なぜか反応がなかった。外しているのだろうか。

俺の靴音だけが今、だだっ広い空間に広がる。

「紗良！どこだよ！」

だが、広すぎるその前に、音は無力だった。発しては響き、やがて消えていく。

幾度それを確かめただろうか。

広がる白の先に、点を見つけた。

近付くと、それは色を付けた。

茶と、桃と。

「紗良……」

俺は足を動かした。さっきより速く。

彼女まで、あと三十メートル、二十、十、九、八……

紗良はそこで、

鎌を取り出した。

「…え？」

あと五メートルの地点。

一歩で二メートルを詰め、彼女は鎌を俺に振った。
空を薙ぐ銀。

冷たい音を鈴は鳴らす。

ギリギリ、鎌は俺を斬らなかつた。

「おい！どうしたんだよいきなり！」

「…みんなと一緒にいる為だよ！」

苦しそうな、そんな表情を浮かべながら紗良は答える。

「それでなんで鎌を振る！？」

「私の力ではこれが唯一の手段だからだよ！」

尚も紗良は鎌を振るう。

ただもう、がむしゃらに。

(どうすれば、どうすれば良い！？)

必死で考えを巡らす、まるで思いつかない。

ただ、鎌を避けるしかなかった。

逃げ惑う俺の進路を断つように、鎌は容赦なく銀の弧を描く。

(描く…？)

！
「そうだ、魔法…」

何も出来ないかと勘違いしていた。
不思議な力に対抗する術を、今の俺は持っている。
紗良のように素早くは描けないが、出来るだけ早く描いた。
彼女の鎌を止める力を、言葉に込めた。

「ストレイン！」

いつか、逃げる俺を捕まえた光の縄。
俺が初めて目の当たりにした、天使の力。
青い光が鎌に走る。

紗良はもちろんそれを斬りに出た。
俺は逃げながら、縄に力を込めた。
縄が刃を避け、柄の上を走る。
やがて、光は刃の色を変えた。

銀から、青に。

「…よしっ、これで話を聞いてくれるな…」

「…ごめん、衛多くん…」

「え？」

俺が疑問を口に出すのとはほぼ同じ。

「吸いなさい」

それは、もう一つの力。
聖女の名を冠する、鎌と同色の鈴。
その能力は、まさに神ちからからの託宣。
縄を掴む手は、開く事を拒まれた。
体の奥から、力が消えていく。

「カンヴァージ」

吸われた力は、魔法で出現したガラスのような球の中に、液体として満ちていた。

体が寒過ぎて、動かない。

膝から、崩れ落ちた。

ただ手だけが離れない。

段々意識がぼやけてきた。

それでも力の吸引は止まらない。

紗良がもう一度呪文を唱えた。

だがその声はなぜか震えていた。

球がまた一つ増え、眩きが聞こえた。

「…どうして…どうして止まらないの？」

「…？」

「どうして力の吸引が終わらないの!？」

その時。

「衛兄ちゃん!!…お義姉ちゃん？」

一緒に紗良を探していた蒼良が来た。

俺に駆け寄った蒼良を見た瞬間、紗良は義妹に叫ぶ。

「蒼良、お願い！」

今すぐ【計測】^{ライブ}を使って！！」

「なんで？そもそもお義姉ちゃんは「良いから！早く！！」

紗良の剣幕に圧された蒼良は、渋々【計測】を使った。

瞬間、天使達は息を飲んだ。

* * *

【計測】が示した情報に、ただ驚くしかなかった。

私の予想では、生命力は今人並みぐらいに近付いていると思われた。全く、減っていない。

吸引しても、すぐ元の数値に戻っているのだ。

「なん…で…」

訳が分からなかった。

「自分で生命力を、製造しているのでしょうか」

「「静歌さま！」」

音が響きやすいこの空間を、全く気配を分からせず、大天使がや

って来た。

そしてこの空間全てに響き渡るかのような、爽やかな声を発する。

「彼の生命力が底無しなのは、そういう訳でしたか。」

「ありがとうございます、紗良さん」

「…お義姉ちゃん、なんで衛兄ちゃんの生命力を吸い取ってるの？」

…静歌さまもありがとうって、どういう事ですか？」

「……………」

私は口を噤む。

「お義姉ちゃん!!」

だがそれに、静歌さまが答えた。

「私がわたくし話します。」

知つての通り、紗良さんは『墮落』の道を歩む事になってしまいました。

けれど、神様はそれを逃れる条件を出したのです。

…衛多さんの生命力を、人並みになるまで奪えと…」

「何ですかそれ！」

こんな目に合わせる必要はどこにもないはずです!」

やはり蒼良は反発した。

だがそれに制止をかける声が響く。

「蒼良…、良い。」

「衛兄ちゃん！」

衛多くんは、生命力の吸引が行われている中、フラフラと立ち上がった。

「紗良…大丈夫だから。

そんな事で、お前が墮ちないなら…、続けてくれ。」

たったそれだけを言う為に、彼は無理をして、倒れた。

蒼良が駆け寄り、『ゾディアック』を使って衛多くんを持ち上げた。

「蒼良さん、彼を降ろして下さい。」

だがそれを許さない静歌さまが命令する。

しかし、今日の蒼良はそれに従わなかった。

「…すみません。今回だけは、その命令は聞けません…」

蒼良は、オレンジの珠を握り締めた。

あれは、【強化】。

「逃がしません」

静歌さまはそう言ったが、動かなかった。

いや、見えなかった。

気が付くと、静歌さまの前には魔法陣があり、そこから無数の縄が伸びていた。

青白い光が、蒼良をがんじがらめにしていた。

私は慄然とした。

いつ呪文を言ったのかも分からない。
いや、いつ手を動かしたのかも知らない。
早過ぎて、理解の域を超えていた。

「…蒼良さん、衛多さんを降ろして下さい。
…早くしないと貴女を、この光で引き千切ってしまうかもしれません」

蒼良は何も言わず、『ゾディアック』を動かして、衛多くんを床に降ろした。
蒼良を縛っていた縄は、今度は衛多くんに巻き付いて、彼をこちらに運んで来た。

「お帰りなさい、蒼良さん。今日は萌さんを見張りに付けておきます。
貴女がいつ衛多さんを奪うか分かりませんので」

静歌さまはそう言い残して歩き始めた。縄を絡ませた衛多くんを引き連れて。

蒼良は、緊張が解けた場に一人、泣きたいのを必死で堪えて、じっとそこに立ちすくんでいた。
気が付くと生命力が入った球は、四つに増えていた。

* * *

たくさん時間が経って、ようやく私は自室に帰った。

眠くて仕方がない。

だが我慢をしなければならぬ。なぜなら、魔法で衛多くんを捕えているからだ。

彼は今眠っているが、いつ暴れるか分からないとの事で、私が監視する事になったのだ。

無垢な顔で眠る彼が恨めしい。

そう思いながら、眠気と必死に戦っている時だった。

小さく、扉を叩く音。

「……どうぞ」

控え目に顔を覗かせて、蒼良が部屋に入ってきた。

「……お義姉ちゃん、……ごめん」

「……いいよ。訳を説明しなかった私が悪い……」

蒼良は私の背後に目を向けた。

「……衛兄ちゃん、寝てるね……」

「監視してろって言われた。寝れないや」

あはは、と笑った時、蒼良とは対照的なノック音が響き、了承も得ずに彼女は入ってきた。

「……まったく、やっぱりいた。いきなり人を拘束して、あたしが静歌さま達に言ったらアンタしばらくここに帰って来れないわよ？」

「萌…、あ、そっか。蒼良の見張りだっけ」

はあ、と大きなため息を付いて、萌は愚痴をこぼす。

「そうよ。全く、アンタ達何かやらかした訳？」

あたしは使命が終わったばかりなのにこんな事しなきゃいけないなんて。

…そこで寝てる堤 衛多も関係あるの？」

「…うん」

私は萌に、事の次第を説明した。

「…何やってんだか、アンタ達。自分の身が可愛くない訳？」

「けど、お義姉ちゃんを見つけて話を聞こうと思ったんだもん！」

「話がしたければすぐに言うわよ。そうでしょう紗良？」

萌は私に話を振る。

「…そうだね。…話すつもりはなかったよ…」

「ほらね。」

けど、静歌さまがそこまですごいだなんて…」

私に關しての話は終わり、今度は静歌さまの話に切り替わる。

蒼良が相槌を打った。

「けど今までの行動でも分かるよ。」

いつも足音はしないし、隙なんてどこにもないし」

「アンタが言うとすぐくないわよ蒼良。

…発動の言葉も聞こえないなんて、ありえないわよ。そう思わない？紗…」

「…寝てる…」

そう、私は萌に初めに問いかけられた後から、眠りに落ちていた。浅い眠りなので聞こえていたが、全く頭に入っていなかった。

天使は意識を失くすと、魔法を維持できなくなる。

当然、衛多くんを留めていた縄達も、消える。

このまま放っておけば、衛多くんに逃げられるだろう。だが、それはなかった。

「…、しょうがないわね。

…ストレイン」

萌が代わりに引き継いでくれた。

浅黄の紐が衛多くんにとわりついた。

それを知るのは、数時間後だった。

* * *

私が眠ってしまい、数時間。

いつもと同じ、新雪の色で目が覚めた。

しばらく呆けていたが、衛多くんを見た。

(…良かった、逃げてない…)

浅黄色の光はその途端、霧散した。

萌も眠りに落ちたのだろう。

気を引き締めて、魔法陣を描いた。

「ストレイン」

桜色の縄が、衛多くんを縛る。

だがもう、する事がない。

私は寝こけている衛多くんを見た。

本当に、安らかな顔で寝ているのが腹立たしい。

(…悪夢でも見せてやろうか)

彼の鼻をつまんだ。

数秒経ち、顔が歪んだ。

(…面白い)

あまりやると起きてしまうので、鼻から手を離し、次はどうしようか考えて、やめた。

なぜか、彼の手を取った。

温かく、広くて大きい手だった。

反射で、彼の手は私の手を軽く握り返した。

胸が騒いだ。

考えてみれば、彼に会ってからいつもこんな事になっている。
火事の現場に出くわしたり。
学校に行ったり。

蒼良は教師に変装したり。
結局冬まで下界にいた。

それに彼には、たくさん弱みを見せている。
生命を奪う事、それで生じる恨みに対する恐怖。

(…けど)

それを思うようになったのは、彼をここに連れて来てからだ。
今まで、そんな事は思う事さえなかったのに。
ずっと、使命だからと割り切っていたから。

ただ思い出すのは、斬った後の彼の表情と、私があの日泣いた時の
腕の力。

それから、小さな笑顔と温かさ。

(…これから、分かるよね)

この気持ちの、正体は。

背中に壁を預け、天井を見た。

白い光を睨に感じながら、目を閉じる。

握った手は、そのままに。

それが、私の得た最後の安息。

六章 前編（後書き）

今回は長かったので、前編、後編に分けました。

一気に掲載も良かったんですけど、飽きられるのは困るので、このよつな形になりました。

閲覧、ありがとうございました。

第六章 後編

深い海の底から、浮上する感覚。
ようやく慣れた白い光が目を刺す。

自室、ではなかった。

床に寝ている誰かの部屋だろう。

そこで、手の中にあるものに気がついた。

小さな、手袋に包まれた手。

紗良の手。

軽く、手の平に触れている程度だった。

その手をほんの少し握って、紗良、蒼良、萌を起こさないように部屋を出る。

外に出て、そこが紗良の部屋だと知る。しっかり扉を見て閉め、後ろを振り返ると、

静歌さんがいた。

「……………!!!」

「どこに行かれるのですか衛多さん？」

なぜだ。

さっきまで、いなかったはずだ。

「…、えと、自分の部屋に、戻ろうかと」

「すみませんが、私と神様は貴方に用があります。一緒に来てくれませんか？」

断る理由が、見つからない。

なんだか、静歌さんについていってはいけない気がした。

「どんな、用ですか？」

「少し、お話をするだけです。衛多さんとは一度ゆっくり喋りたかったので」

「俺の…生命力について、ですか？」

静歌さんは、深く頷く。

「そうですね。あなたは特殊ですから。

もっとよく、知りたいですね…」

俺は、手を気付かれないように後ろに持っていき、魔法陣を描いた。細心の注意を払いながら、小さいが、思いを込めて。

「俺も静歌さまや神様とは一度しっかり話をしたいと思っていたんですよ。

どうしてこんなに俺に付きまとうのか、ってね」

「あら、それは衛多さんが特異な存在だからですよ。

…ところで」

「はい？」

俺の魔法陣はもう完全に出来上がっていた。後は合図の言葉を言うだけだ。

求める力は状況の打開。

息を吸い、

「何をしても、無駄ですよ？」

パリン、とガラスが割れたような音。

嫌な予感が背を走る。

恐る恐る、後ろを見た。

無い。

あるはずの魔法陣が、無い。

それは、碎かれていた。

「な……」

前を見ると、いつの間にか彼女の手には一振りの剣。

青白く光る、両刃の、魔法で出来た剣。

「私は、神様から特別な力を授けられています。魔法陣の作成、呪文の詠唱なしでの魔法の発動です」

「…静歌さま、だけなのか？特別な力って…」

「いえ、大天使なら必ず与えられる力です。私達はその力の事を『福音』と呼んでいます」

魔法ではない、大天使だけの力。

敵わない、俺はそう思い始めた。

「…」

「尤も、その力は一人に一つだけです。私はこの力…【金糸雀】カナリアだけですよ」

つまり彼女は、魔法のエキスパート。

「魔法は意味がない、か。」

…だったらなんで、静歌さまは以前、魔法陣を描いていたんですか？」

「当然、自分の手の内を分かせない為です。」

貴方は危険な存在。多大な生命力を維持するだけでなく、それを生み出せるなど…神様を悩ませる貴方は、危険なのです」

「静歌さま…」

静歌さんは、とても美しい笑顔を俺に向け、話す。

「そろそろお喋りは終わりにしましょう。」

…来て下さい」

途端、彼女の背後から無数の光輝が姿を現した。

後光のようなそれは、俺を包み、囲み、縛り付けた。

フフフと笑う彼女を俺は、恐ろしく思った。

* * *

青白い光から解放された俺は、睨みつけるように前方を見た。
重い空気が、そこにある。

「神様、彼をいかが致しましょう?」

…そうですね…。

何も見えない、ただ空間が横たわるだけの、この場所。
静歌さんは確かな眼差しで、ある一点を見ていた。

「…何がしたいんだ。俺は、普通に生まれて、普通に生きて、危ない目には何度もあつたけど…
こんなに責められるような事は一度もしていない」

…危ない、目?

「昔から、色々と死にそうな目にあつてきて、その度に何とか助かつて来たんだ。」

…神様、あなたは神様なのに知らないのか…?」

その時、厳しい声がかかる。

「衛多・バンクス。先程からのその無礼な態度は何ですか」
いきなり、静歌さんの持つ空気が重くなった。

「静歌さま?」

俺は思わず聞いてしまった。

まるで人が違かった。

普段の彼女の、あの柔らかな雰囲気を感じられなかったからだ。俺の疑問を知ったかのように、神様が答えた。

それが彼女、静歌・キャロル、

いや、『神の恋人』マリア・ブレスです。

「『神の恋人』？…マリア・ブレス…？」

その語が出た途端、あの怖い気を持った静歌さんはなぜかなりを潜めてしまった。

長い銀髪が、顔を隠している。

永遠に神に愛される存在、それが『神の恋人』です、衛多・バンクス。

下界にいる時は神の加護を受け、この場所にいる時は神様の寵愛を受ける者の事です。

…前世でも来世でも、どんなに悪魔として『墮落』しても、ずっと…。

「そんな事、大嘘ですけどね…」

「…？」

小さく、静歌さんは呟いた。

それに構わず神様は続ける。

マリアはそれの、ある禁を犯しています。

…神以外の者を、愛してしまったのです。

「え？それがどうして…」

…神、以外？」

クスクスと、笑い声がした。

『神の恋人』は、神以外を愛する事が出来ません。

…そして、私は神ではありません。

言った直後、眩い光が辺りを包んだ。

黄金色のそれはあまりに眩しく、俺は目を閉じた。

光が弱まった頃、俺は固く閉じた瞼を開いた。

そこには、美青年がいた。

中性的な顔立ち、輝く金の髪、深い青の目、絹のような光沢を持つ長い衣。

「神と」思ってしまう程、神様でなかった神様は、美しかった。

「今日は、衛多・バンクス。私は原初の天使、シン・クリストです。」

「…こんにちは…」

俺の言葉を聞いたシンさんはにこりと笑い、言葉を紡いだ。とても綺麗な笑みだった。

「先程の話ですが…、貴方の力である生命力は、その多くの死と向かい合ってきた為に、貴方自身を守る故に創造、増加したのでしよう。」

全ての原因は貴方のその、運命にあるのでしよう。」

運命。

そう言ってしまうえば全てに合点がいく。
だが俺はそんな言葉で終わらせてほしくなかった。

「…俺の生命力は、人並みになりますか？」

諦めが悪い、そう思えた。

けれど、希望がわずかでもあるならそれにかけてかった。

「ええ。」

意外にも、答えはあっさりとしていた。
続きは当然ながらあったが。

「ですが、難しい問題です。

生命力はあなたのその肉体が変わるまでそのままでしょう。
なので…。」

「…なので？」

「生まれ変わるしか道はありません。
そうなるかと全てを失いますが…」

それはつまり、記憶も何もかも全部失うということ。

俺の答えは決まっていた。

「それは、嫌です。

だったらまだ、天使として働いて、人の命を奪った方がいい」

失うのは、もう嫌だった。

「とても大切なもの」がやっと分かったから、失わずに衛まもりたいか

ら。

彼女の笑顔を、衛りたいから。

「今の貴方は下界から忘れられたようなものです。戻ろつと思えば……」

「それは転生なんでしょう？
……だったら忘れられたままでいい。」

「……そうですか。」

神様の、いや、シンさんの言葉は酷くあっさりしていて、

「……ならば、排除します。」

簡潔だった。

「……え？」

「貴方は本来ここにはいられない。生命力を人並みに戻して、有無を言わず転生して帰ってもらおう筈が、特異な体質で更に転生をしたくないと言っ。かといって『墮落』はさせられない、する術がない、出来ない。なら私達の手で貴方を消す外ありません。」

シンさんは早口でまくしたてた。理解が追いつかない。

「は？意味分かんないですよ。」

どうして消されなくちゃいけないんですか？」

「今言ったでしょう。」

それに、私達とこの世界の決まりだからなのですよ。」

静歌さんは、シンさんがそう言うと音もなく動いた。

俺はそれに気付き、身構える。

彼女は俺の額に指を一本当てた。

「…なん、だ」

虚勢を張る俺に、静歌さんは笑いかけ、情けのつもりか、呟いた。

「ヒプノタイズ」

俺の意識は瞬間、闇に墮ちた。

* * *

意識の急激な上昇。

(いけない、寝ちゃってた)

慌てて横の衛多くんを見た。
いない。

(逃げられた！)

私は飛び起き、蒼良と萌を起こした。

「ふぁ…、なに？おねえちゃん…」

「人が寝てるのにつてのに…一体何よ？」

「衛多くんが、逃げたの！！」

その時、ノックの音がした。

酷くはつきりと聞こえた。

「…どうぞ」

扉を開けて入って来たのは、静歌さまだった。

「静歌さま！

…すみません、衛多・バンクスを逃がしてしまいました」

「大丈夫です。私が紗良さんの部屋から出て来た彼を捕まえましたから」

良かった。彼は逃げていない。

「ありがとうございます」

湧き上がった感謝の思いをそのまま口にする。

「ただ彼は、神様に反抗する素振りを見せました。」

一度は神様も彼を許そうとしましたが、反省の色がないので、今は眠らせて夢の中で反省をさせています」

夢の中での、反省。

どういったものかは分からなかったが、神様のした事だ、正しい事なのだろう。

「そうですか。」

彼に会う事はできますか？」

「出来ません。目覚めた後、また彼は暴走するかもしれません。危険なのであまり外を歩き回らないようにして下さい。」

危険なら、静歌さまの意見に従った方がいいだろう。

大天使の言う事はいつだって正しいのだから。神様と同じぐらいに。

「はい、分かりました」

静歌さまは頷き、殆ど音を立てずに扉を閉めた。

「…お義姉ちゃん」

蒼良が話しかけてきた。強い口調で。

さすが私の義妹。

分かっている。

「ええ。もちろん衛多くんを探す。

萌は？」

蒼良は聞かなくても分かっている。私に声をかけたのがその証拠だ。

萌は一度大きく嘆息をした。

「退屈だから、付き合っただけあげるわよ」

「ありがとう」

「お礼なんて良いから、早く探しに行きましょう。」

衛多が起きたら、神様達、何をするか分からないし」

そつだ。もしかしたら暴れたらしい衛多くんを無理やり転生してしまつたかもしれない。

それは嫌だ。何故だかわからないけれど。

「うん。」

「…行こう」

私達は扉を開け、彼を探しに自室を飛び出した。

いくら神様や大天使達が正しい事を言っても、正しい事なんて本当はどこにもないのだから。

私は、私が正しいと信じた事をする。

結局、最後に決めるのは他ならぬ自分なのだから。

だがその行動が、後悔を生み出すなど、誰が予想出来ただろうか…？

* * *

夢だ。

フワフワとした、明らかに確かではない感覚。
水の中にいるような、宙に浮いているような心地の中で、俺は物語を見せられていた。

壁画みたいだな、たくさんの絵が目の前を通り過ぎていく。

それは、この場所の歴史。

神が治める、人の安息の地。

争いを知らない、魂の居場所。

何不自由ない、使者の街。

穢れを見ることのない、天使の家。

きつと、これを見せられた者は、神様は、神に護られたこの場所は、とても素晴らしいと思うかもしれない。

下界には色々なものが満ち、魅力溢れる所だと思いかもしれない。だが、俺はそれを見、知り、何故か嫌悪の念を抱いた。

何故かとても不愉快に感じた。

早くここから抜け出したかった。

足掻いても夢からは逃れられず、気持ちの悪い話は続く。

やがて、話が終焉を迎えた時、ようやく俺は目を覚ますことが出来た。

全身に脂汗をかいていた。

疲れた時のように息が荒い。

数分かけて落ち着きを取り戻し、周りを見渡した。

「ここは…」

倉庫のようだった。

一面の白の中に、たくさんの色を持った物達がある。
剣もあれば、小さなフラフープのようなものもある。

「武器庫、になるのか？」

俺は立ち上がって、探索を始めた。

一つの武器を手に取り、見回してみる。

小瓶の中に虹色の砂が入ったものだった。

瓶には紙の札がかかっていた。

「えと…、『エンチャントレス』…能力…イリュージョン【幻覚】…、色々あるんだな」

「幻覚」という単語で、俺は悪夢を思い出した。

洗脳されたような気がして、俺は気分が悪くなった。

倒れこむように床に座る。

ふと目を開けた時、一本の短剣を見つけた。

錆びついた、汚らしい、刃渡り十五センチ程のそれは、俺を誘うよ

うに、なぜか汚れ一つ付いていない柄を光らせていた。

まるで、誰かが、俺が手に取るのを待っているかのように。

俺はそれを手に取り、剣を抜いた。

刀身は傷一つなく、ただ青ざめた俺の顔を映していた。

小瓶に付いていたものと同じ紙の札が、能力を伝える。

「…『エトワール』…フルファイル【成就】…」

能力の名前からして、願いを叶えてくれるらしい。

札の裏を見ると、扱い方が書いてあった。

「…なんだ、短剣を握って願うだけで良いのか」

随分と簡単な使用法に、俺は少し拍子抜けした。

気を取り直し、紙の札を取り外して俺は『エトワール』を握って考えた。

(このままここにいても、きっと静歌さんやシンさんに利用される。こんな場所にいたら、俺が俺じゃなくなる…)

剣を握る手に力がこもる。

「…ここから、抜け出そう」

その途端、柄頭に嵌められていた宝石が光った。

夜の星空を宿したその宝石の光は、俺を魅了する。

気がつけば、切っ先は俺の胸の前にあつた。

慌てて腕を動かそうとしたが、どうにもならなかったので、冷静になる。

ジワジワと、剣は俺に近付く。

そこで、俺はある事に気が付いた。

(もしかして…これが今俺の望んでる事?)

このまま剣が俺の体に刺されば、俺は間違いなく死ぬ。

しぬという事はつまり、ここではないどこかへ行くという事。

つまり、願いが叶うのだ。

『エトワール』は確かに、俺の願いを叶えようとしているのだ。それなら。

(ここから抜け出せるなら…死んでやるうじゃねえか)

転生ではなく、只の死。

神様達の思う通りになんか、なるものか。

一瞬、泣きじゃくる天使の姿が頭に浮かぶが、俺は迷わなかった。

(大丈夫、失ったりしない。

ここから、抜け出すだけだから…)

目を瞑り、覚悟を決め、手を自分の体へと引き寄せた。

遠ざける事は出来なかったのに、それはとても簡単に出来た。

ドスツ、と鈍い音がした。

痛みが胸に走る。俺は仰向けに倒れた。

天井は、やはり白い。床は、俺から出た血で赤かった。

(血なんて、あつたんだ…)

熱がゆっくり消える体を感じながら、見えなくなる世界をぼんやり見つめた。

(…それにしても、行かないな。

…死ねば、帰れるのかな…)

まともに考えられなくなってきた頭で、この先を考えた。

(…早く、帰り、たい、な。…おれの、へや、に…)

それが白い世界で、最後に思った事だった。

六章 後編（後書き）

長かった六章、いかがでしたか？
次は e n d です。

閲覧、ありがとうございました。

六章 - e n d - (前書き)

充足の死に顔

六章 - e n d -

衛多くんを探すのに、一番簡単な方法があったのに、私は今の今まで忘れていた。

私が魔法で作った銀の指輪。

指輪に意識を集中して、彼の居場所を知る。

走って向かう途中、蒼良と萌の二人と合流して、向かう先 『天賜てん器庫しきこ』へ行つた。

扉を開けて私は、

信じる事を一瞬やめた。

血の中に沈む、天使の姿。

私より少し背の高い萌はそれを見て、惨状を見ていない蒼良の腕を掴んでどこかへ駆けて行つた。

おぼつかない足取りで、目の前の衛多くんに近寄る。

「えいた、くん？」

返事はない。

「えいたくん、…返事してよ！」

虚しく私の声が、天使の武器庫に響く。

彼の隣に膝をつく。

血なんか気にしていられなかった。

彼の頭を腿に乗せる。

触れた肌は冷たかった。

「…なんで？なにがあつたの…？
教えてよ衛多くん！」

「…その『天賜器』は、『エトワール』ですね」

「…静歌さま？」

静歌さまは私と衛多くんの元に歩み寄り、彼の胸に刺さる短剣を見た。

「願いを叶える『天賜器』、『エトワール』。

…今の彼の姿は、何かを願った結果です」

「何か…？」

「例えば、この世界にいたくないから、自分をなかつたことにしたい、とか」

「そんな…！」

その時、衛多くんの体を真っ黒い霧が包み始めた。

どこからか発生したか分からないそれは、彼を覆い飲み込み、やがて消えた。

「静歌さま…今は…」

「紗良さん、冷静になりなさい。今の霧を貴女は知っています」

知っている。だがそれは、

「……『遣い』…、けど、なんで…」

「『天賜器』であれ、彼が自らを殺めた事は確かです。
…衛多・バンクスは、だから『遣い』に体を持っていかれ、地獄へ
行ったのですよ」

「……………」

『遣い』は、人を殺めた者の亡骸を、地獄へ攫う。

漆黒のその蠅の集まりは、たとえ自殺をした者でも例外なく、自分
達の居場所へ連れて行く。

「私は神様に報告をしてきます」

小さくそう言い残し、固い靴音を鳴らして、静歌さまは立ち去った。

「…、なんでなの」

あの時、衛多くんは、これで良いと言っているようだった。
安らかな顔をしていた。

充ち足りた、表情だった。

「なんで！？なんでなの！？どうしてあなたが墮ちなきゃいけない
の！？」

…答えてよ、衛多くん！！！！！！」

私の叫びは虚しく白に、溶けていった。

六章・e n d・(後書き)

次回で天界編は終了になります。

閲覧、ありがとうございました。

終章 - 天界編 - (前書き)

昇格の面持ち

終章 - 天界編 -

私はまた、神様に呼ばれた。

(処罰かな…)

今度こそ『墮落』だろう、けれどそれも良いかもしれない、そう考えながら話を聞いた。

よくやりました、紗良・セイクル。

「え？」

思ってもない、言葉。

私を驚かせるには、それだけで十分だったのに。

使命を遂行しましたので、約束通り、貴女を大天使に昇格しましょう。

昇格、だなんて。

衝撃の大きさに、私は声を上げた。

「そんな…っ」

嫌なのですか？

「そういう訳ではありません。

…こんな事で、大天使になるのは、少し。

それに私の使命は…」

『衛多・バンクスを無力にする』、でしたね。
果たしたじゃないですか。彼の『墮落』という結果によって、ね。
それに迷う事はありません。誇る事ですよ。

流されるように、私はそれからすぐに大天使になる儀式を受けた。
儀式といっても仰々しさはなく、穢れを払い、祝詞を読むくらいだ。
それはすぐに終わり、私は自室で新たな服を待つことになった。
大天使としての新しい衣装を着て、それから外出が可能になるらしい。

確かに私の服装は、お世辞にも大天使らしいとは言えなかった。
その間誰とも、私は話をする事が出来ない。

(聞きたい事、あるのに…)

私はひたすら待った。

数時間して、玻璃さんがやってきた。

「紗良・セイクル様、お召し物が出来上がりました」

「様」だなんて、彼女には言われなくなかった。

「あ、ありがとうございます…、あの」

「申し訳ありません、会話は禁止されておりますので…」

「あ…」

玻璃さんは一礼して、部屋を出て行った。
窮屈に、私は感じた。

小さくため息をついて、新しい服に着替える。

大半は昔とまるで変わらない。

だが、足首程の長さの上着を羽織り、ただ結っていた髪に、羽衣と同じ素材の布を結ぶ事になった。

姿見で自分を確認する、前よりは大天使らしくはなった、気がする。その時、私は初めて表情を知った。

泣いていた。

目が赤く充血してしまっている。

それはどうしようもなかったので、涙を拭って、私は外に出た。神様の元へ向かうのだ。

「…紗良・セイクル、参りました」

立派な姿ですね、紗良・セイクル。…その目は？

「何でもございませぬ、神様。大天使にあんったのが嬉しくて…」

嘘だ。これは自分でもよく分からない。

神様は特に追及せず、話を進める。

そうですね。では、大天使が出来るおもな事を伝えます。

「はい」

禁呪を含めたあらゆる魔法の行使、天使の統率、地獄や下界の行き来が自由になります。

「…自由、なんですか？」

はい。天使の場合と比べれば、ですが。

天使の場合、そこに本当に用があつた場合、大天使と神様両者の許可が降りなければ行く事が出来ない。さらにその他たくさんの方の許可申請がある。

（行けるんだ、天使の時より自由に。

もしかしたら、『墮落』しちゃつた衛多くんに会えるかもしれない……）

今の私に最も必要な特権。

それを思うとこの昇格は良かったのかもしれない、そう思った。

ああ、そうでした。貴女の『福音』はどうでしょうか？

最も大きな大天使の特権、『福音』。

私は知っていた。それが自分の望む力になる事を。

「…衛りたいです。全ての世界の人々を。

衛る為の、翼が欲しいです」

分かりました。授けましょう、その力を。

「ありがとうございます」

そう言つて、話が終わった私は神様の元を去つた。

足元の白い床を見た。

この遥か下に、衛多くんがいる。

私が望んだ力は、地に堕ちた君も衛るから。

左手を胸元に置き、祈る。

（待ってて、衛多くん。すぐに会いに行くから…）

彼に届くように、私は祈る。

銀の指輪を通して、地の底へと。

終章 - 天界編 - (後書き)

天界編終了です、お疲れ様でした。
次回からは地獄編です。

閲覧、ありがとうございました。

序章・地獄編・

また、あの感覚が襲ってきた。

自分が宇宙飛行士にでもなつて暗闇を漂つ、そんな感覚だ。

暗闇を漂うのは、まるっきり同じ。

知覚できない自分の頬を歪ませ笑つ。

より暗い場所に、気が付いたら俺は座り込んでいた。

目覚めても、目覚めていないような錯覚が襲った。

手を顔の前まで近付けて、ようやく目覚めていると理解した。

自分の足さえ見えない闇に手をつき、立ち上がる。

果てしなく広がる暗闇は、距離感を殺す。

けれど、なぜか落ち着く闇だった。

左手に握り締めていた、胸にあつたはずの短剣に、俺は願う。

(光を生め)

生じた星のような光達が、俺を包む。

光の一つが、指に当たった。

天使との、繋がりの証を。

俺は闇の先へ歩き出した。

どことも知れない、この場所を。

『天界』から、地獄へ。

まるで幸せの絶頂から転落したような言い方だが、それは違う。

あの場所こそが、地獄だった。

だから俺は、逆だと考える。

この場所こそが、天国だと。

陽の当たらない楽園だと、俺は考えた。

残して来た者達の事を思う。

まず、両親。

今更だけど、まず今まで俺を育ててくれた二人を思った。

急に俺が消えた事を、どう感じただろうか。

悲しいだろうか。それとも何も分からないのだろうか。

今となつては知る術はないだろう。

次に、友達。

両親より近しく遠い、そんな関係だった。

悩みを言ったり、馬鹿をしたり、俺の毎日が楽しかったのは彼等の
お陰。

文化祭、楽しかったな。

またやろうなんて言えなかった、俺が情けなかった。

そして、天使達。

個性的で、おかしな奴等。どこにもいない、存在の消えた者達。

自らの死という重い過去を背負いながらも、明るく笑っていた。

今何をしているのだろうか。こんな所にいる俺を心配とか、している
のだろうか。

もし彼女達に会ったらすぐ、謝りたかった。

(…紗良)

特にお前は、どう思っているだろう。

彼女が一番その気持ちを多く抱き、誰より上手くそれを隠すから。

間違っているであろうこの選択を、彼女はどう受け止めただろうか。

(今、何してるかな)

俺は、どこよりも広がる夜空を仰ぎ見る。

(…すぐ、戻るよ)

前を見据え、俺は力強く踏み出した。

そう、すぐに戻るから。

「とても大切」な、君の元へ…。

序章・地獄編・（後書き）

地獄編開始です。

下界編、天界編、二つを足しても地獄編は長いです。

色々な謎が明らかになる所なのでぜひともご覧になって下さい。
閲覧、ありがとうございます。

七章 前編

地獄の最奥、最も暗い場所に、同じ色を持った霧がどこかから飛んで来た。

霧はその中にいる、一人の人物の元へ辿り着くと、一斉にその者の耳へと飛ぶ。

「…待って下さい…、皆で一斉に喋らないで下さい」

流れるような黒髪が動く。それを、刺青の入った手が止める。

「その貴方…、え？自分の名前はスヌル？分かりました、スヌルが代表して喋りなさい」

霧を形作る蠅、それを見る目は紫色だ。

「…ええ…、そうですね、ありがとうございます。分かりました、では私から会いに行きます」

黒衣を靡かせ、動き出す。

だがそれを止めようとする蠅達。

「大丈夫です…、スヌルの報告通りなら」

数百、数億はいる蠅の群れを愛おしく見ながら、彼女は口を動かす。

「なんだかその少年…、あの人に似てるようですから」

* * *

長い時間歩き続け、俺は一つの黒いドアの群れを見つけた。

(あの場所と構造が似てるんだな)

そう思いながら歩いていたら、そのドアから青年が出てきた。

「今日こそはあいつに…、お前、天使か！？何しに来た!？」

彼が俺を見つけそう言った瞬間、一帯にあったドアから人が一斉に出て来た。

「天使ですって!？」

「俺達を殺しに来たのか!？」

「どうして!？私達が何をしたってどういうの!？」

突然の事態に、理解が追い付いていなかった。

「え、えっと、あの…」

悪魔と呼ばれる、黒衣に身を包む者達は、俺を憎しみの目で見る。俺はろくに人か否かを判別できないのに、環境に慣れている彼等にはよく見えているのだろう。

的確に、俺をその暗い瞳で見遣る。

「消えろ、天使め！」

そう言つて、俺を最初に見止めた青年は自身の左手甲の刺青をなぞつた。

鈍く、暗い灰色の光を放つたそれは、

「来い！！」

青年の髪と同色の、黒い長剣を現した。

それに乗じて、周りの悪魔達が俺を羽交い締めにした。

同時、短剣が地に落とされる。

俺は死んでいるのに、死を覚悟した。

「デйм…、お止めなさい」

声が響いたのはその時だった。

儂げだが、芯の通つた落ち着いた声。

見るとそこには、妙齡の麗人がいた。

「イリス様…」

「イリス様、ここは危険です、お離れを…」

デймと呼ばれた青年や、俺の周りにいる人々が口々にその人の名を呼ぶ。

青年は持っていた黒剣を刺青に突き刺すようにしまう。

「その方は既に天使ではありません…、『淪落』したのでしょう。

妾わらわの蠅達がそう教えてくれました。…そうですね？」

「『淪落』…?」

俺は問われたが、逆に質問で返してしまう。だが、その人は微笑んで質問に答えてくれた。

「『淪落』は…、こちらで言う『墮落』と考えていただければわかると思います。

まるで悪魔が悪いかのような言い方は、心苦しいですから」

「そうなんですか…、ありがとうございます」

真っ黒いワンピース。白い肌や足元など全く見えない。

見るとすれば顔と手ぐらいで、それもまるでカーテンのように長い紫がかった黒髪で上三分の一は見えない。

黒以外の色と言えば瞳の紫と肌の白だけだった。

その瞳の色を笑みで隠して、イリスと呼ばれたその人は俺に告げた。

「ようこそお越し下さいました…、この地獄へ。妾は踊飛・イリスです。」

『淪落』された貴方と、少しお話をしに来ました」

* * *

「暗いですね…」

俺はイリスさんと一緒に、彼女の居住空間にいた。洞窟のようなそこは、俺がさっきまでいた悪魔の居住空間より暗かった。

イリスさんの白い肌がよけいに際立つそこで、俺は真っ黒い椅子に座って喋る。

「そうですね、まあ、昔はここにも月があり、中々明るい所でしたが、妾はこのぐらいの方が落ち着きます」

「地獄の人は、皆そんなものなんですか？」

「いえ…、昔の方が良かった等、言う人もいますよ」

イリスさんは髪を揺らして笑う。

そこで、はっとしたような顔をし、俺に問うてきた。

「申し訳ありません…、お名前を聞かせて下さい。これからはこの住人なのです、名前ぐらいは聞かないと」

「あ、そうですね。」

俺の名前は堤 衛多です。天使の時は衛多・バンクスと呼ばれていました」

「漢字は…、何でしょうか？」

なぜ漢字を聞くのだろう。

気になったが、俺は正直に教える。

「堤防の『堤』に、『多』いに、防衛の『衛』です」

「良い名前ですね…、ではここでの名前は、套生・ナイトをお願いします」

「ナ…!？」

「何ですか!？」

俺はイリスさんの発言にうろたえる。

なぜ俺がナイトなどという、恥ずかしい名前になるのだ。

「『多』くの人々を『衛』る…、そんな名前だからですよ。もしくは誰かを多くの災難から衛る、だとか。だからナイトが適当な名前なんです」

「…俺、そんなんじゃないですから」

「え…、どうしてですか？」

地獄の最奥である彼女の部屋で、俺は理由を話す。

彼女が話を聞く様子は、地獄の長だとは思えなかった。

だがそう思えない所が、イリスさんらしくもあると、俺は思った。

「なので、俺はとても大切なものがあるのに、今回も、その前もそれを衛れず…」

「自殺をして…、ここに来たんですね」

「はい。」

…泣かせて、しまっんです」

イリスさんはそこで、笑った。

とても優しい笑顔だった。

「…好きなんですね…、その方が」

「…はい」

「今…、ナイトさんは、それを女として、と受け止めましたね？」

俺は、イリスさんと目を合わせる。

違うのか、そう、頭の中で疑問を浮かべる。

「妾は今は…、その方を一人の人として好きなんですね、と言いました。」

その方がどういう立場の人で、どういった方とか、そういったものは一切考えず、ナイトさんはその方が好きなのですね、と」

「……………」

俺は何も言えなくなる。

言われてそれに気付く。

確かに、天使だから彼女が好きとか、そういったものは全くなかった。

ただ単純に、彼女が大切だと分かった。

「会えると良いですね…、その方に。」

妾は会えませんから、羨ましいです」

寂しそうに、イリスさんは笑った。

俺は、この問題に立ち入ってはいけない気がした。

だから、話題を変える。

「…あの、聞きたい事があるんですけど、その手の模様は何ですか？」

「ああ、これですか…、これは『烙印』^{ブランド}と言って、妾達悪魔の力を発現するためのものです。

妾達の力は、天使のようにには使えないのですよ」

言って、白い手の甲を見せてくれた。

そこには黒く、何かの模様が描かれていた。

塗りつぶされた丸。その上部には翼。蛇の舌に似たものが丸を囲み、その下は台座のように平らだった。

「これが…、あの、この模様とあの人が使っていた剣はどんな関係があるんですか？」

「それは彼の名前が作り出したのです…、彼の名は弦技^{グィット}・ディム。仮名^{かな}は糸を操り、真名^{まな}は剣を生み出すのですよ」

「面白いですね。天使とは全く違う…」

イリスさんは頷きでそれを肯定する。

「そうですね…、天使は神や自分達が作り出す武器と、多様な魔法を使いますね。対する妾達は姓と名の力を『烙印』で具現しています」

「不便じゃないんですか？」

「いいえ…、それしか使えないという事は、その道を高められる事

なのですよ」

「なるほど……」

その後も話は弾み、俺はこの地獄に関して色々な事を学んだ。

「お話中失礼致します」

そこに、ノックの音と共に少女が入ってくる。

黒縁の眼鏡に一本の三つ編み。胸を大きく露出させ、袖や足元は和の様相。蠱惑的な容姿だが、彼女自身から放たれる雰囲気ではそれは殺されている。

秘書然とした彼女は、事務的に要件を述べる。

「イリス様、天使がイリス様に面会をしたいと」

「ありがとうございます……、少し、よろしいですか？」

「あ、はい」

イリスさんは笑みを返した後、チャコールという少女と部屋を出て行った。

チャコールは部屋を出る時、俺を見た。

小さく目を細め、すぐに彼女は去って行った。

(…なんだろ)

疑問に思ったが、彼女も恐らく俺の姿を見て、嫌悪を示したのだろう。

なにせ、まだ俺の格好は天使のそれなのだから。

彼女の事はそれで終わりにして、しばらく俺は闇の中で考えた。

俺は自分を殺してしまった事。

やはり短剣『エトワール』は俺の願いを叶えてくれたらしい。

俺の手の中にあるそれに、少しの感謝をした。

それから、今の俺は悪魔だという事。

やはり自殺をしてしまったのだ、地獄に堕ちたという事だ。

完全に天使とは真逆の存在となってしまうたという事を胸に刻む。

試しに指に、魔法の光を灯してみる。

特に意識もせず光っていた指に、やはり光は宿らなかった。

(…けど)

『エトワール』を鞘から抜いた。

滑らかな刀身は研いだ直後のようで、先程俺がこれで自分を傷付けたとは到底思えない程だった。

不思議に思いながらも俺は柄を握り締める。

(鞘の錆を取りたい…)

宝石が光る。

瑠璃色の石はぼんやりとした光を刃に宿す。

誰かに操られているかのように俺の腕は動き、刃は鞘に当てられる。

光は鞘に伝染し、それ全体に光が移った時、錆だらけの鞘にヒビが入った。

だがそれは錆だけで、錆はポロポロと剥がれ落ち、本来の鞘の色を見せる。

柄と同色の、金色だった。

暗い中での判別は難しかったが、宝石の光で色はなんとなく分かった。

あの天使の武器と対の色。ふとそう思った。

(…『天賜器』は、使えるな…何故か)

その疑問が分かる事はなく、ノックの音に思考は消される。
先程見た悪魔、チャコールだった。

「…天使が、貴方に用があるそうです」

僅かに、指輪が熱くなった気がした。

七章 前編（後書き）

新キャラ、新たな力等、新たな設定が入りややこしくなりました、
すいません^^;;
けれどもできるだけ頑張って描いていきますのでこれからもよろしく
お願いします。

閲覧、ありがとうございました。

七章 後編

時は少し戻り。

私は神様の元へ向かっていた。

両脇には蒼良と萌。

立場が上になってしまった中、以前と変わらず私に接してくれる義妹と親友。

二人は顔を俯かせて歩く。

私はどうすれば良いのか考えながら歩を進めていた。

「…、お義姉ちゃん」

蒼良がようやく喋った。

「なに？蒼良」

安堵した私が馬鹿だった。

「衛兄ちゃん、なんで『墮落』しちゃったの？」

「……………」

答えられなかった。

理由が分からないのもあったが、『墮落』の仕方と静歌さまが言った事が頭を回っているからだ。

この世界にいたくなかったから、自分を無かった事にしたいから。

後者は無い、と私は思う。無かった事にしたいなら、体自体が消滅して、『遣い』は来ず、私達の目に触れる事もなかっただろうから。

けれど前者は否定が出来ない。

彼は私の知らない何かを知ってしまったんだろうと思う。

だから逃げたいと願い、あんな形になった、そう考えられる。

答えは彼しか知らない。

だから私達は知りたかった。

「…衛多に会ったら分かる事よ。その質問はアイツ自身にぶつけなさい」

「…もうつくよ…」

葬儀の参列のように押し黙って、私達は神様の元へと辿り着く。

「神様、お話が」

何でしょう？

いつも、神様はこうやって私達の話を聞く。

神様だから全て知っているのに。

きっと、私達の口から聞きたいのだろう。

真実はいつだって、自分自身しか知る事が出来ないのだから。

「地獄へ行きたいのですが、よろしいでしょうか？」

何の用があつての事ですか？

やはり理由を聞かれた。

事前に考えておいた理由を口にする。

「『墮落』した衛多・バンクスの様子を見に行きたいのです。」

彼が完全に悪の心に染まり、我々天使の情報を流さないように、彼を牽制しにも行きたいと思いました」

そうですか。萌・ネメシス、蒼良・サンデル、貴女達は？

「あたしも同じです、神様」

「ボクもです」

神様は黙り込む。

そして、判断が下される。

∴ 紗良・セイクル。貴女だけで行ってきなさい。

「∴二人は、何故いけないのですか？」

私は神様に反論する。

神様の判断は絶対なのに。

だが萌も蒼良もそれに異議を唱えない。

貴女は大天使、悪魔の力に対抗する術があります。

しかし萌・ネメシスと蒼良・サンデルの二人は自分の身を守るかは分からない。だからです。

「そんな…」

そう呟いた蒼良は今にも泣きそうだった。

萌も、何も言わないがその表情からは怒りが滲み出ている。

「なら神様、地獄を少し探索してもよろしいでしょうか？」

彼等の戦闘方法等、学べられたらですが、学んできます」

衛多くんの監視、並びに偵察。

これなら、神様も納得し、安全が保障されたら蒼良達も次に地獄に行く時同行できるだろう。

それならば、次回二人を連れて行っても良しとしましょう。くれぐれも、彼等の行動には気をつけるのですよ。

「有難う御座います、神様」

思った通りだった。

私達は神様の元を離れ、一旦私の部屋に向かった。

部屋は天使の頃と全く変わらない。

安らぎを感じられるその場所で、私は二人に詫びる。

「ごめんね、二人共…」

「気にしなくていいわ。その代わりに衛多をひっぱたいてきて頂戴」

「少し待てば会えるもんね。…待ってるよ…」

だが、そう語る二人の表情はやはり曇っていた。

「…それじゃ、行ってくるね」

自分を情けなく思いながら、私は魔法陣を描き、魔法を発動し、地獄へ飛んだ。

地獄は『天国』のように清らかなイメージはなく、陰鬱な感じがした。

光で包まれていたあの場所と違い、ここは闇が全てを覆っていた。

（衛多くん、大丈夫かな…）

魔法で火を灯し、私は衛多くんを探す。

数分もせず、黒いドアが乱立する場所へ来た。

（なんだか、反対だけど似てるなあ）

と、ぼんやり思いながら歩いていたら、人だかりに気付く。

話しかけたいが、相手がこちらに対しよう動くか分からない。

友好的に接してくれるのか、それとも攻撃してくるだろうか。

考えあぐねていた時、悪魔の中の一人が私に気付いた。

「…！また天使だ！」

人の群れが一齐にこちらを向いた。

敵意を宿した視線が私に刺さる。

その中の一人が言った。

「皆、待つて。さっきの天使と関係があるかもしれない。だとしたらイリス様に報告しなくちゃいけない」

黒縁眼鏡に一つだけの三つ編みをした悪魔は私に向かって言った。

「イリス様に用ですか？」

さっきの話を聞いたところ、その「イリス」さんに会わなければ衛多くんにも会えないらしかった。

私は迷わず頷くと、彼女は悪魔達を説得し、ドアの向こうに籠もら

せた。

真っ黒な家具が並ぶその中で数分待たされ、やがて扉が開かれる。眼鏡の少女が顔を覗かせて言う。

「付いてきて下さい」

彼女は私の前を歩いた。言われた通りに彼女に付いて行った。

なんだか、淡々とした物言いや振る舞いが、人間の姿になっている時の萌に似ていた。

深い闇の中の一室に案内され、私はまた数分待たされた。

そして、やはり真っ黒い女性が部屋を訪れる。

彼女が「イリス」さんだろう。静歌さまとどこか似ていて、けれど正反対な人だと思った。

「今日はお客様が多い日ですね…、先程来た元天使に、用があると見えますが」

「はい。その人に会わせて下さい」

「分かりました…、チャコール、彼を呼んできて下さい」

私を案内した悪魔、チャコールさんは私達に一礼をして去った。

しばらくして、彼女は連れて来た。

あの時と何も変わっていない、悪魔になった天使を。

*

*

*

彼女の姿を見て、まず俺は、

(良かった)

と思っていた。

俺のせいで彼女は『墮落』しそうになっていたから、俺が『墮落』した事で彼女はそれを免れたのだろう。応接間らしいその場所で、俺と紗良は何時間かぶりの再会を果たした。

「紗良……」

俺は嬉しさで思わず声をあげた。だが、

「衛多くん、…本当に『墮落』しちゃったんだね……」

彼女が俺を見る目は、哀れみと蔑みに満ちていた。

「……………」

「ねえ、衛多くん、教えて?どうして自殺なんかしちゃったの?」

そう問う彼女は完全に俺を昔の同志とかとは見ていなくて。悲しくなった。俺が悪魔になっても彼女は俺を対等の視線で見られると思っていたのに。

これじゃ、静歌さんとかシンさんとか、神様に近い人と全く一緒だ。そういえば彼女の服装は、少し変わっている。白く長い上着。それだけがある違い。

しかしそれは彼女の言い方がおかしいのと合致する所があった。

彼女は、大天使になったのだ。きつと。

俺が天使でいた二ヶ月ぐらいの間で、上の世界の事情は少しは学んでいたので分かる。

そこから思考は急速に最悪の方向へ展開されていく。

彼女はきつと嘘を付いたのだ。

いや、きつとじゃない。絶対だ。

自分が大天使になりたいから、俺に『墮落』してしまつと嘘を付いて自分を探させた。

戦つて、暴れさせて、共犯の静歌さんと俺を取り押さえて、監禁していたのだ。

彼女はきつと自分の部屋で、何も知らない蒼良と萌を一緒にいさせて俺を暴れないようにしたのだ。

そうなる俺は逃げるしかない。そこを脱走したという名目で静歌さんに捕まえてもらえば後はおしまい。

あんなに都合よく『エトワール』と出会うものか。全て彼女達が仕組んだものだったのだ。

全部、全部が嘘。

俺はそれを知って無性に悲しくなった。

それと同時に、猛烈な怒りが俺を支配した。

「…衛多くん、どうしたの？怖い顔して」……………かよ

「え？」

「教えるかよ！むしろ、全部分かってるんだろ、自分で仕組んだ事なんだからよ！！」

俺の足は外に続くドアに向かった。
俺を陥れた天使と同じ空気なんか吸いたくない。

「衛多くん！」

天使は立ち上がり、俺に駆け寄る。

だが、そこまで。

引き留めるものが何もなかった。

白い手袋に包まれている腕でさえ、俺をこの場に留めようとしな
い。悪魔に成り下がった奴なんて触れたくもない、そういう事だろう。

俺はそれで確信した。

彼女はやはり、自分の出世の為に俺を利用したのだ。

最低だ。紗良・セイクルというこの女は。

俺は騙されたのだ。

この性根の腐った偽善者に。

「まっ」だったら腕でも掴んで止めてみせろよ」

「え…えいた、くん…？」

何だ、その後に続く言葉は？

俺は予想が出来た。

そんな事私には出来ない、だろう？

「出来る訳ないよな、悪魔になんて触れたくもないんだからな。

…大体何しに来た、監視か？悪魔になった俺の…！」

「違うよ、…表向きはそうだけど、衛多くんが『墮落』した訳を聞
こつと…」

「表向き、かよ。嘘だ。それが本当なんだろう!？」

『墮落』した訳なんかお前は聞かなくても良いだろう!! お前が俺をそついう風に仕向けて、自分の出世を狙ったんだろつが!!」

怒りは怒声を発しただけではおさまらない。

大きいため息をつき、憶測ではない自分の考えを呟いた。

「…まあ、あんな所から抜け出したいなんて思ってたかもしれないな。…この方がずっと『天国』らしいよ」

「…衛多くん」

そして俺は、最悪な言葉を紗良に言った。

「もう、ここに二度と来るな。」

…いつまでも、昔のままじゃいられないんだからな」

扉を開け、閉め、扉のすぐ脇にいたチャコールに自室の場所を聞いた。

天使が来る前その話もしていて、ちょうどその話をしようとした時呼び出されたのだ。

そしてその場所に向かう時、チャコールから声がかけられる。

「…あの言い方はありません。あれでは反論の余地もありませんし、貴方の言った事は大半が自分の邪推かと」

「…けど、あいつは大天使になった。それは事実だ。だから俺を陥れたとしか思えないんだよ。」

…俺は邪魔者だったからな」

言い捨て、俺は自室に向かった。
必要最低限の家具が置いてある部屋、その中の一つ、ベッドにもたれて座り、
俺は声を殺して泣いた。

(なんでだよ…なんで俺は、あんな言い方しかできないんだよ…！)
自分を苛みながら黒い床に涙を零す。

(…確かに、最低だ。…この俺自身が…！)

チャコールの言う通り、酷い邪推だ。
あんなに疑心暗鬼になった己を恥じた。
彼女は、自分に正直なやつだ。

だから下界で中々俺を殺せなかった。
『天界』で、怖いと言って泣きじゃくった。

雪の降る中、殺したくないと泣き喚いたじゃないか。
なぜそれを忘れていたのだろうか。

俺は、彼女との再会を思い返した。
思い出し、馬鹿だと思えなかった。

彼女が俺を見て瞳に映したのは悲哀。
そして、全ての言葉に悲しみが混じっていたじゃないか。

腕さえ掴まなかったのは、掴めない雰囲気を作っていたからじゃないか、この俺が。

ただただ俺は、浅はかな自分を責めていた。
謝るにももう、俺は彼女に言ってしまった。二度と会うなど。
だから、

(ごめん…、ごめん、紗良…！)

胸の中で謝罪を述べ、大声で泣く事しか、今の俺には出来なかった。

七章 後編（後書き）

七章終了です。

衛多の素晴らしい被害妄想、いかがでしたでしょうか？（笑）

閲覧、ありがとうございました。

七章・e n d・(前書き)

愚者の憫笑

七章・e n d・

…怒られてしまった。

私はあの時、酷い事を言ってしまった、気がする。

「衛多くん、…本当に『墮落』しちゃったんだね…」

私が彼の立場になって同じ事を言われたら、やはり彼のような行動をとるだろう。

「もう、ここに二度と来るな。…いつまでも、昔のままじゃいられないんだからな」

私は彼に拒絶されてしまった。

そうぼんやりと、意味を理解しようと思っていたら、声をかけられた。

「ナイトさんが…、好きなのですね」

「!?!?」

真っ黒いその人は優しく笑って言う。

「昔の妾のような顔をしていましたよ…、今は亡き妾の夫と喧嘩した時のような、そんな表情を」

「私…別に衛多くんの事なんか」

「貴女が気付いていないだけですよ…、今の時代にしては珍しいく

らい、恋愛には疎いのですね」

鈴を転がすように、イリスさんは笑った。

私は言葉を失う。

イリスさんは続ける。

「天使さん…、貴女は生前、随分と自分の気持ちに嘘をついてきたのですね」

「違いますよ…。そうしなきゃ、私は生きていけなかったからです。全てを見透かすその紫の瞳が細められた。

「もう大丈夫ですよ…、ここは貴女が辛い思いをしてきた所ではありませんから。…素直になって、良いですよ」

私は頭を下げた。

私の考えは改まり始めていた。地獄が何だ、悪魔がどうした。

天使と『天界』と何ら変わりはないじゃないか、と。

「今日はすいませんでした。それと、ありがとうございました」

「いえ…、結構ですよ。…チャコール、天使さんを案内してあげて」

私は表にいる同胞に呼びかける彼女に、右手を差し出した。

「イリスさん、…紗良・セイクルです。」

「良い名前ですね…、妾は踊飛・イリスです。よろしく願いしま

すね」

握ったイリスさんの右手はほんのり温かく、ほっとする手だった。不思議な地獄の女の人、イリスさん。

その後地獄を出る前、聞こえた話で彼女が魔王だと初めて私は知った。

地獄の端から魔法で移動し、私は自室に戻った。

そこには、蒼良も萌もいなかった。

魔法を使って体を清め、ベッドに倒れこむ。

母親の中の胎児のように、手足を縮め私は過去を思う。

イリスさんの言葉が頭で閃いた。

（素直になっても良い、か…）

「もう、遅すぎますよ…」

醜く顔を歪めて私は笑った。

いつか、鏡に向かってそうした時のように…。

七章・e n d・(後書き)

七章終了です、お疲れ様でした。

閲覧、ありがとうございました。

八章

翌日からの俺は忙しかった。

真っ白かった服を真っ黒に新調したり、左手に刺青『烙印』を入れたりと、外見を悪魔のそれに変えていった。

名前の力を知り、刺青を媒体にした力の発現方法を知ったり、悪魔達の考え方を学んでいった。

『天界』と違って堅苦しい感じはなく、むしろこちらの方が俺には合っている気がした。

自室で指輪の手入れをしている時、扉のノック音を耳にする。小さく、控え目な音だった。

不思議に思いながら俺は入室を許可する。

「どうぞ」

ノックをしたのはイリスさんだった。

「この暮らしには…、慣れましたか？」

「はい、かなり慣れました。上と違って自由な感じがして、俺にすぎい合います」

それは良かった、とイリスさんは微笑む。

イリスさんの笑顔は、満月の夜に咲く花のように、とても優しく、しかし可憐だった。

そこで、イリスさんの目は俺の手元を凝視する。

「あら…、それは？」

指を差したその場所には、俺が今さっきまで手入れをしていたもの。生前、俺の前に現れた天使との契約。お互いを見失わない為に作られた魔法の手錠。今、立場の違う俺達を繋ぐ銀色の指輪。

「単なる指輪ですよ」

俺は笑ってイリスさんにそれを見せる。

「そうではないですね…、紗良さんも同じような物を嵌めていました」

だがイリスさんはすぐに分かったようだ。

それが唯の指輪ではない事を。

「…これは、『手錠』ですから。外せないだけです」

「それにしては…、手入れをしていたようですね。黒ずみの一つもない。大切にしているんですね」

優しいが意地悪な笑みを浮かべ、イリスさんは俺と目を合わせる。

「どうするのですか…、この指輪？加工等はしないのですか？」

「ああ…どうしようかな…」

考え込む俺の手を取り、イリスさんは俺を無理やり立たせた。そして細く開いていた扉を彼女は大きく開く。

「なら、加工しましょう…、良い場所を知っているんです」

いつか聖夜に言った事が、現実になった。

* * *

『エトワール』の力を使って、一瞬でイリスさんの言った場所に到着した。

「ここで働く人は皆…、道具の加工等に特化した力を持つ者達です。そしてここで採れる宝石達は、どれも特殊な力を持つものばかりです。…その短剣の石のように」

「へえ…」

そう、俺が連れてこられたのは採石場だった。岩がごろごろしている訳ではない。口を開く巨大な洞窟が一つあるだけだ。

その周りに黒い扉が点々としている。俺がそれを見渡している時、俺の服 黒いワイシャツ、黒いジーンズの裾が引っ張られた。

「？」

「そこのあなた、ここに何の用？」

小さな子供特有の声。その持ち主は八才程の少女だった。

紫色の瞳が真っ直ぐ俺の目を見ている。肩程までのプラチナブロンドの髪が美しかった。

「メシア…、妾達はこの石を取りに来たのですよ」

メシアと呼ばれた少女は、イリスさんの方に顔を向けると、

「イリスさま、メシアはこの嫌な臭いがする奴に話してるの」

なんと、生意気にもイリスさんに文句を言った。
だがイリスさんは笑う。

「あら…、ごめんなさい、メシア。…ナイトさん、話してあげて。彼女は巴女みこ・メシア。妾の子供みたいなものです」

しかもイリスさんはそのメシアに謝った。
メシアは偉そうに腰に手を当てている。

「…套生・ナイトだ。イリスさんに連れられてここに来たんだ」

「ナイト！あはは、似合わない名前！

…えと、ナイト…くくっ。あの洞窟の中には入らないでちょうだい」
笑われた上に、石を取るな。
思わず殴って黙らせた衝動に駆られたが、俺は我慢した。

「メシア…、何を言うのですか。この石達は全て貴女のものじゃありませんよ」

「そうだけど、メシアこの人嫌いだもん。『蛍光』であんまり分か

らないけど、…あの場所の臭いがする」

『蛍光』とはこの襦のようなものだ。

あの場所というのが気になったが、この少女は俺には分からない臭いが分かるようだった。

「確かに彼は…、けれど、もう彼は妾やメシアと同じなのですよ。毛嫌いはいけません」

「それでも嫌よ！」

むくれて駄々をこねるメシアの説得は無理だと思ったのか、イリスさんは考える。

俺は不機嫌そうなメシアを見た。

白金の髪は肩辺りで切り揃えられ、重く見られないように後ろ側で少し結ばれている。

指と肩だけを露出するアームウォーマーと腿までを覆うヒールの無いブーツ、そして胴を包むワンピースは全て黒く、どれも手以外の裾にはやはり黒のレースがあしらわれていた。

ワンピースはレースから伸びる太めの紐が、首で合流、蝶の形に結ばれ、それらで落ちないように重力に逆らっている。

腰には二本、黒い革のベルトらしきものが巻き付いていた。

そんな彼女の右手中指、蛇を模したリングが嵌められていた。

その蛇の目には黒い宝石が嵌め込まれている。

恐らくここで採れた石だろう。とても美しく、まるでその蛇が生きているかのようだった。

「…綺麗な、黒い目だな」

「何？」

「その蛇の指輪、綺麗な石が嵌まってるな」

その言葉に、メシアの口元に笑窪ができる。

「当然よ。メシアの可愛いステノだもん。当り前な事言わないでよ」
蛇の指輪の名はステノというらしい。

まだこれぐらいの年齢の少女だ。玩具に名前を付けるのはよくある事だ。

「ステノ、って名前なのか。良い名前だな」

「でしょ？メシアがこれを作ってもらって、長い事考えた名前だもん。…話、分かるのね」

「普通だけどな？」

ケンソンしないで、と難しい言葉を使う小さな女の子はふいに俺の手を取った。

「イリスさま、この人ステノを褒めてくれたから、石、採ってもいいと思う！」

「え？」

驚いたのは俺だ。

「…あら…、いつの間に話が進みましたね。では、行きましようか」

「道案内はメシアがするわ。ついて来て！」

子供らしい人懐こい笑顔を、メシアは俺に見せた。

* * *

ゴツゴツとした洞窟を想像していたが、そこはとても幻想的で美しく、言葉として表わすなら、その空気は「聖域」に近かった。人口ではない滑らかさを持った石の壁を見ながら、まず俺はメシアに問う。

「…嫌じゃないのか？俺の臭い」

「慣れた。というか、嫌な思い出はないから。ただその臭いの持ち主が嫌なだけよ」

訳の分からない答えに俺は内心首を傾げながらも、メシアを先頭に俺達は洞窟の中を進む。

「ところで、まだ着かないのか？」

「もうここでも採れますが…、そろそろでしょうか？」

「ええ。あと少しよ」

そして数分歩き、

「着いた！」

メシアが叫んだそこには、大きな宝石がそこかしこに散らばっていた。

「ここはメシアのお気に入り場所なの。どうかしら？」

「……声が出ない」

「何それ！意味分らない！おかしい！」

きやはは、と高い声で笑ったメシアは、再度俺の手を引っ張る。

「どうした？ここで採るんじゃないのか？」

「誰がここで採るなんて言ったかしら？あなたが加工するなら小さい方でしよう？」

道すがら今日ここへ来た訳を話していたので、メシアは考えていたのだろう。

人を上から見るような態度は頂けないが、メシアは聡明な奴だった。更に数分程走っていったところも、美しかった。

先程メシアが見せてくれた場所を宝石箱と表すなら、今俺達が来た場所は星空のように小さな宝石が輝いていた。

「…あれ、イリスさん、いないのか？」

「イリスさまは、きっと思い出の場所に行ってると思うの」

後ろを振り返った俺の問いに答えるメシア。
やはりまだ少し分からない。

「思い出の、場所？」

「うん。イリスさまの夫はね、戦争の時ここで天使と戦って、命を落としたの。多分イリスさまはそこに行ってるんだと思う。大丈夫よ、すぐに来るから」

そして、メシアは石の採り方を説明した。

ここの石達には皆意志があるらしく、自分がここで必要とする石を願えば石達は答えてくれる、らしい。

ただむやみに採るより良い石が採れるそうだ。

説明されただけでは分からないが、やり方は『エトワール』とそっくりだった。

「さあ、やってみなさいよ」

メシアの声を合図に、俺はゆっくり、左手の指輪を見た。

(この指輪に相応しい石を…)

途端、洞窟全体が脈打つ感覚。

四方、八方、俺の周り全てから、小さな宝石達が俺に集まってきた。どれも似たような色、形をしていた。

「…初にしてはやり方分かってるわね。それにしても…すごい数」

言って、メシアは石達を見た。

彼女がここにお気に入りのお場所を持っている事から、メシアは宝石

類には随分と詳しかった。

「…石榴いんげんに薔薇水晶、…月長げいぢょうも。まるで…」

「まるで？」

そこで出た言葉に、ただ驚くしかなかった。

「恋人にあげるみたいじゃない」

「…はっ!？」

思い浮かんだのは、決別した天使の笑顔。
顔が熱い。

「…まさか、凶星なわけ？」

「…そんな訳「絶対そうだ!」

言い終わらないうちに否定され、決めつけられ、言葉が出てこなくなる。

「恋してるのね、青春ね。…大事なのね？」

「…知るか」

「大事なのね。よく分かったわ、ふふ。多分この前来た天使ね? 応接間で誰かがすごく叫んでたって噂があったもの」

天使、と言う時、何故かメシアの顔が曇った。

「好きなら、愛してるなら、ちゃんと伝えなくちゃ。それが何者であつてもね。…これが良いわ」

メシアは俺の周りをぐるぐる回っていた石の中から、桜色と透明の石をつまんだ。

つまんだ直後、小さな宝石達は地へと落ちた。

「金剛。永遠の絆を約束する石。ナイトとその恋人に絶対似合うわ」

「恋人つて間柄じゃないけどな。…ありがとう」

小さなその石達は、少し力を入れれば砕けそうなのに、懸命に輝いていた。

なぜか、勇気をもらった気がした。

「それじゃあ、石を付けないとな。…そうなるともう片方も必要だな」

『エトワール』を取り出し、願った。

(紗良の指輪が欲しい…)

柄の石が光り、その光は黒い霧を生んだ。

「…イリスさまの『遣い』みたい…」

霧は上へ上へと昇り、洞窟をすり抜け、彼女のいる場所へと向かった。
見送った後、メシアは静かに言った。

「…ねえ、その石…」この石よ」

「…やっぱりか？」

うん、とメシアは大きく首を動かす。

「ええ。願いを叶える石、瑠璃。どうして天使の武器に…」

「…さあ。とりあえず、加工してくれる人の所に行こうか」

「そうね……？」

その時、メシアが怪訝な顔をした。

「どうした？」

「…なんだか少し、違和感があった気がして。指輪、見せてくれる？」

俺は言われた通りメシアに指輪を渡す。

「その短剣も、お願い」

『エトワール』の彼女に手渡す。

しばらくメシアは二つを見比べていた。

「…なあ、なんなんだよ？」

痺れを切らした俺は、彼女に尋ねた。

メシアは指輪と短剣を俺に渡し、正面から見つめて言った。

「これ…武器？」

「違う。…恋人、が魔法で作ったんだ」

「…だったら、おかしい。これ、剣の方と同じ感じがする…」

俺達は顔を見合わせ呟く。

「…武器化してる…？」

大きな疑問を抱えたまま、俺達は洞窟を後にした。

* * *

その頃、衛多の生み出した黒い霧は、闇の満ちる場所を抜け、光が充ちる空間にあった。

どこか虫の群れにも似たそれは、ある一つの白い扉に向かって進み、扉の隙間をすり抜けていった。

真っ白いベッドで眠る少女の上を通り、白い手袋に包まれた指に通された、銀の指輪を囲む。

磁石の斥力のように、霧は指輪をほんの少し浮かしながら、五分程かけて指輪を外す。

霧は指輪を包み、逃げるように指輪を運ぶ。

霧には当然ながら、意思はない。
だから、自分を見つめる翠の目に、霧は気付く事がなかった。

* * *

新月の空のような地獄の天井を仰ぎ見ていたら、銀の輝きが落ちてきた。

願いが叶った証拠だ。

俺はそれを受け止め、握り、隣に同じように立つ小さな女の子を見遣った。

「指輪、来たぞ。加工しようか」

「ええ。メシアの知り合いの職人さんにやってもらいましょう。まだ若いけれど腕は確かよ」

「お前が若いとか言うなよ…、…イリスさんは？」

「まだ洞窟の中ね。大丈夫よ。イリスさまは否定するけど、こここの魔王なんだから何でも分かってるわ」

彼女の言葉を受け、俺達はその職人の所へ向かった。

当然、俺がその職人を知る訳がないので、徒歩でメシアの案内を受ける。

広い採石場の奥、そこにその職人はいた。

時折闇色に変わる深い蒼の瞳に、同色の髪を一つに束ねた彼は、俺

達の来訪を知っていたかのように小さな家の前に立っていた。

「よく来たね、メシア」

「また出迎え？たまにはサプライズを受けてもらってもいいじゃない！」

「まあまあ。さて、メシア。その人は？」

青年は夜空のような瞳を俺に向けた。

「最近『淪落』してきた天使よ、名前は…」

「…套生・ナイト…です」

「…って名前なんだけど…似合わない！本当似合わない！アハ、おかしい！」

俺はあくまで冷静にその言葉を流した。

だが彼の受け方は違った。正に大人、だった。

「笑っちゃいけないよ、メシア。そんな事を言ったら僕の名前も女みたいじゃないか。」

…ナイト君、良い名前だよ。誰かを衛る騎士、そんな所かな？」

「…まあ、そんな所かと」

「そうか。僕は視千・ルリ。今はここで宝石の加工をしてるけど、昔は天使をしてたよ」

藍色の瞳を細め、ルリさんは笑った。

好青年を絵に描いたような彼は、同性の俺でも素敵な人だと感じた。

「ところでメシア、今日は遊びに来たんじゃないだろう？」

「もちろん。ナイトの指輪を加工してほしいの」

俺はルリさんに指輪と、それに付ける石を一緒に渡した。

「ルリ、それとこれと一緒に見てくれない？あなたならきつと分かると思うんだけど」

メシアは言うと同時に、俺の手から『エトワール』をひったくった。

「こら、人様のものを勝手に取ったら……それは……」

ルリさんの表情が変わる。

「ルリ、この剣の事、知ってるの？」

「知ってるも何も、この剣は僕が作ったものだよ。」

…昔、大切な人に素晴らしいプレゼントをあげたくて、この地獄に美しい石を見つけた。

僕はこの世界に来て、石を手に入れた。けれどももう天使に戻る事は出来なかった。

だからきつと、僕の大切な人の元には行かず、ナイト君の手にあるんだと思うよ。」

しみじみと、ルリさんはそう語った。

その時のルリさんの顔はとても悲しそうだったから、俺はメシアに

聞いた。

「メシア、悪魔は下界には行けるのか？」

「行けるけど、新月の日と大晦日の日とかだけよ」

天使は逆に満月の日とクリスマス等の特定の日だけだ。

使命は別だが、悪魔に会う日にわざわざ使命を遂げに行く天使など
まずいないだろう。

俺は悲しくなった。

聞かなければ良かった、とも思った。

「ありがとう、ナイト君。きっと君は僕の為に天使と会えるか聞いた
たんだろう？」

「…はい。…会いたいとは、思わないですか？」

「思うね。けど…」

続けるルリさんの表情は明るかった。

「会わなくても、彼女はきっと僕らの上で元気に暮らしているだろ
うし。それにいつかは転生の為に行く。彼女と一緒に転生する
為にね」

その顔には、「僕は僕の大切な人を信頼している」と書いてあった。

俺は何も言うことができなくなった。

彼の想いの大きさに、圧倒されたからだ。

さて、とルリさんは『エトワール』と指輪を持って、小さな家の扉

に手をかける。

「じゃあ、加工してくるよ。すぐ済むから待っててね」

「はい…」

ルリさんは少し笑って、家の中へ引っ込んだ。

「ルリの彼女は幸せ者ね。…浮気してたらメシアが許さないんだから！」

「そうは、決まってるないだろ…」

俺は指輪を待ちながら思った。

(俺は、幸せな奴なんだな…)

* * *

しばらくして、ルリさんが家から出てきた。とても嬉しそうな顔をしていた。

「会心の出来だよ。ところで、聞いていいかい？」

「何でしょじっ？」

「これ、天使の魔法で作られたのかな？『天賜器』とは違った感じがしたんだけど」

その問いに俺は頷きで返した。

「そうか、やはり…、メシアが『エトワール』を渡してくれたお陰で確信したよ」

「…武器化してる、ですか？」

「そう、そうだった。…石を付けた事で、不完全ながら武器化していたこれは…完全なものになったよ」

目線を落とし、メシアと顔を見合わせる。

彼女の顔は険しかった。

きっと俺も同じ顔をしているだろう。

「それにしても…これは有り得ない事だよ。前例が無い」

「…一つぐらいあったりしてないんですか？」

「ああ。」

…『天賜器』は普通、天使の望むものや可能性、その他色々あるけど、神様が作るものなんだ。だから『天賜器』…天から賜った武器なんだよ。

けど、まずこれは魔法で出来ている。そして、武器となった。だから有り得ないんだ」

驚きと共に嘆息する。

けれどそれには少しばかりの嬉しさもあった。

初めての魔法から出来た『天賜器』。それに、彼女の色に染まる石。

(早く渡したいな…)

手渡された指輪を見て、俺は自然と笑みが零れた。

だが俺は、知らなかった。

指輪を無断で持ち出した黒い霧が、大きな騒動を引き起こす事を…。

八章（後書き）

今回は少し長くなってしまいました（ー・ー・）
区切る所がなかったもので…

閲覧、ありがとうございます。

八章 - e n d - (前書き)

召喚の素顔

八章 - e n d -

ルリさんが「大切なひと」の事を語っている時、諦めと情愛が混じった感情が彼の言葉や動作に滲み出ていた。今でもその人が大切なのが、よく分かった。勝手な事だったが、俺は願った。

(ルリさんの「大切なひと」を、ここに…)

ルリさんと同じ名の石が輝き、光が生まれた。光は黒い霧と同様にその人の場所へと向かった。程なくして、光は俺の正面に落ちた。誰かのその中に含んで。納まった光の中には、

「あれ…？私、何故こんな所に…？」

「玻璃さん！？」

以前天使の礼服を作ってくれた玻璃・ニードさんがいた。つまり彼女が、ルリさんの「大切なひと」なのだ。

「その声…バンクスさん？」

「そうです。俺があなたを呼んだんです。早く行きましょう！」

俺は玻璃さんの手を取って願った。

(今すぐルリさんの元へ…！)

かつて蒼良が俺にかけた転移の魔法、「トランスフェアレンス」。
それを使ったように『エトワール』は俺達をルリさんの所へと導く。
彼の家に着いた時、ルリさんは家の表に出る所だった。
まるで、こうなる事を知っていたかのように、ゆっくりと。

「ルリさん!!」

「…るり？」

背後で玻璃さんが小さく呟く。

「ルリさん、ごめんなさい!…連れて来ました!」

「…やってしまったね、ナイト君」

ルリさんは少し寂しくそう言った。

まるで、それをする事が間違いのように。

「はい…知ってたんですか？」

「名前の力でね。仮名の『視千』は『千を視る』という意味だ。俗
に言う千里眼だよ」

ルリさんは自分の目を指差し、言った。

そこで、掴んでいた玻璃さんの手の感触が消える。

彼女は俺の一步前に踏み出した。

「瑠璃…あなた…」

「…ごめんね、玻璃。僕の友達が、君をこんな所に連れて来て」

俺が悪い、そんな言い方だったが、表情は自分を責めているようだった。

その顔を見て玻璃さんは言う。

「ううん、私がいけないの。向こうの方が私のしたい事が出来るからって、あの日から数百年もあなたの事を放って、天使でいるんだから」

「さっさと昇華しない僕が悪いんだ。…君と同じだよ、玻璃」

昇華とは、悪魔が天使になる事だ。

神様の耳に届くくらい、良い事をしなければ出来ないと言われている。

二人は、ぐずぐずと私が悪い、僕が悪いとしばらく言い合っていた。煮え切らない二人の態度に、俺はつい言ってしまった。

「…結局、会えて嬉しいのかよ、嫌なのかよ？」

お互いが悪いのもう分かっているんだ、天使とか悪魔とか今はそんなのどうだって良い。素直に再会を喜べよ」

そう、ただの生き物として。

元人間として。

「大切なひと」同士として。

「…そうだね」

ルリさんはそう呟き、玻璃さんを素早く抱き締めた。

「「!!!???」」

俺と玻璃さんは驚いた。

玻璃さんはルリさんの突然の行動に、俺はそれを目の前で見せつけられた事にだ。

「ありがとう、ナイト君。目が覚めたよ。…玻璃、僕は君に会えて嬉しい。君は？」

「私も…。バンクスさん、ありがとうございます。私をここに連れて来てくれて…」

玻璃さんが言い終わった後、ルリさんは玻璃さんに囁く。

「…二回目、だね」
耳から唇へ。

ルリさんは見せつけてくれた。

一瞬驚いた玻璃さんも、すぐに受け入れ、目を閉じた。
俺は逃げるように『エトワール』で自室へ帰った。

(普通人前ですかよ…)

直後、俺は思った。

(天使とか、悪魔とかを忘れて、素直に…)

自分に当てはまる、自分で言った事。

(伝えよう、この事を…)

ズボンのポケットに入っている、二つの指輪を握り締め、決めた。

(紗良に言おう、素直に…)

八章・e n d・(後書き)

なんだか衛多が暴走し始めましたね(笑)
まだまだ暴走する可能性があると思います…

閲覧、ありがとうございました。

間章

二月十四日。

私達天使の一番忙しい日。

この日、天使は魔法を駆使してたくさんの人間を幸せにするのだ。ただ、人間に姿を見せてはならない。

皆、人に見えないように自らに魔法をかけてから人々を幸せにしに行く。

その準備をしている時、蒼良はなぜか暗い顔をしていた。

「どうしたの、蒼良？そんな顔してたら人を幸せになんか出来ないわよ？」

「あ、お義姉ちゃん…あのね「紗良！聞いたわよ？」

萌が私に声をかけて来た。なぜかニヤニヤしている。

「去年、アンタが一番人を幸せにしたんだって？」

「…まあ」

それを聞いた瞬間、萌の顔からやつきが消え、眉間に皺が出来る。

「『キューピッド』はアンタだったのね！覚悟しなさい！」

「…うん」

『キューピッド』とは、その年で一番人々を幸せにした天使に贈られる称号だ。

それはつまり、天使の中で魔法が一番得意な事を意味する。

「あの謎の能力を持った静歌さまより得意だなんて…」

「静歌さまはいつも参加していないんだって。留守番してるらしいよ」

「へえ…とりあえず早く行きましょうよ。グズグズしてたら『キユーピッド』になれないわよ！」

萌は素早く魔法陣を描き、下界に降りてしまった。

「私は別にどうでも良いんだけど…、あ、蒼良、話があったんじゃなかった？」

萌との会話の間、ずっと口を閉ざしていた蒼良に話を振る。

「あ…なんでもないよ お義姉ちゃんに負けないように頑張るね！」

だが蒼良はそれだけを言って魔法陣を描いて行ってしまった。

(…なんだろう?)

その事に気付くのは、数時間先の事だった。

* * *

久しぶりの下界は、とても寒かった。
空は重く、暗く、今にも雨や雪が降りそうだった。

（二月かあ…）

吐いた息が凍りつく。

二月は一番辛い季節だった。

遙か昔を思い出しそうになり、忘れる為に人を見る。

（今の私には、関係ない…）

けれど、早く暖かくなって欲しかった。

寒空を駆ける中、ある住宅街にさしかかった。

かつて、『墮落』した天使が生きていた場所だった。

その家はどこにでもある普通の民家で、特に何がどうという事もない。

だが私はその中が気になった。

天使の自室だった二階のとある部屋に、魔法を使って入り込む。

「…うわっ」

中は既に物置となっていた。

埃が厚みを帯び、年月を感じさせた。

彼の部屋だったという面影は、どこにもない。

否、私が彼の存在を消したのだから、もう彼が存在したという証は無い。

私は階下の彼の母親が気になって、階段を滑るように飛んで降りた。
彼の母親だった筈の人は、居間でテレビを見ていた。

(……)

思いながら、私は魔法陣を描く。
願った事は彼女達の幸せ。
しかし、発動した直後に気付いた。

(…あれ？これ違う、…セアルチだ！)

セアルチ、それは探査の魔法。
自分が知りたい事全てを知れる魔法。
そして脳内に閃く情報は、

『現在、妊娠二ヶ月。当人は未だ発覚せず』

「……」

何故、そんな事が気になったのだろうか、私は全く分からなかった。
魔法陣を描いた時に考えた事を思い出してみた。

(……衛多くんの、存在？)

彼の存在が消えた事による変化。
そんな感じの、とてもぼんやりとしたものだった。

(…私が知って何になるの。…さっさと仕事しないと)

もう一度、彼女に魔法をかけて私は衛多くんの家を去った。

(…生まれてくる赤ちゃんに、悲しい運命が訪れませんように…)

願った事は酷くささやかで。

けれど彼の元に訪れなかったとても小さな幸せ。

表へと出て、私の耳に入ってくるものがあつた。

ここから三百メートルくらい離れた地点。

囁くように、だがはつきりとした声が聞こえた。

その声は少女の声。

私はすぐにそこへ飛び、彼女のいる場所 昔人助けをしたマンションに降り立つ。

四階。小さな手を組んで一心に祈る少女が空を見ていた。

大きく丸い目は、鉛色の空をさらに暗く映していた。

姿を見せられない私は、準備の際にかけていた魔法 心の声を聞く魔法だ に耳を澄ませた。

お兄ちゃんたちに会いたいな…お姉ちゃんたちに会いたいな…

お兄ちゃんは衛多くん、お姉ちゃんは恐らく私だろう。

だが私はそこで疑問を覚えた。

(どうして、覚えてるの?)

普通、天使に連れて行かれた人間や、連れて行く側の天使は存在が忘れられる。

突然の失踪への対抗策だ。

だが、目の前の幼い女の子は覚えている。

(聞かなきゃ、直接)

私は一階へと飛び降り、少女からは陰になる場所で魔法を使う。

「チエンジ」

私は人間の姿をとった。

この魔法は便利だ。季節の事を考えてくれる。

桜色のフリルのミニワンピースに黒のニーハイソックス、そして焦げ茶のブーツ。

上にはさらに黒い七分袖のカーディガンを羽織っていて、袖は絞つてある。

センスも良いこの魔法を使った私は、少女に見えるように歩いた。するとすぐに声がかかった。

「おねーちゃんー!!」

振り向くと、先程彼女がいた地点には既に彼女はいなかった。

移動する彼女の頭部が見えて、私は彼女が移動しているという事を伺えた。

やがて少女は私の目の前に立った。

相変わらずの長い三つ編みが慣性によって揺れた。

「お姉ちゃん、どこにいったの!?!」

「…ごめん、ちょっと忙しくて…」

「お兄ちゃんも見ないし…、みーちゃ、じゃなかった。わたしさみしかったよ…」

しばらく見ないうちに大人になったみーちゃんは、泣きそうな顔をした。

「泣かないで。ごめんね、みーちゃん…」

私は半べそをかく小さな女の子の頭を撫でる。
撫でながら、私は先程の疑問を口にした。

「ねえ、みーちゃん。なんで私達の事、覚えてるの？」

「え？なんで？お姉ちゃんたちのこと、わすれたりなんかしないよ？」

さも当然と言うような顔をしながら、みーちゃんは続ける。

「クリスマスのまえぐらい、みー…わたしは、だんだんお姉ちゃんたちのこと、わすれちゃいそうになったよ。

がんばって思いたそうとしても、すぐわすれちゃいそうになったよ。けどね、毎日毎日、がんばって思いたしたら、わすれなかったの！」

（そんな…ありえない）

彼の存在は、そんなにも特別なのか。

親でさえ、彼の事は忘れたというのに。

「ね、お姉ちゃんだけのヒミツだよ。わたしはね、いつもこうなっ
てほしいなって思うことがほんとになるんだよ。
だから今日も、お姉ちゃんにあえたんだよ」

私はそこで思い付く。

みーちゃんも、衛多くんと同じような人間なのではないか、と。

（…まさか。だったらもう既に神様の元よ、みーちゃんは）

考えを消し、私はみーちゃんから離れる。

「そろそろ行くね、みーちゃん」

「…うん、分かった。またね、お姉ちゃん！」

「またね」

私はみーちゃんの目に映らなくなるまで、歩いた。
途中の曲がり角で天使に戻り、再度曇天の下界を翔ぶ。
みーちゃんはずっと、私の去った方向を見ていた。

* * *

二月十四日。

下界では、人が司祭の命日に贈り物をする日。
それも、特定の人物に。

とりあえず、俺には関係のない日。
地獄でも同じだと思っていたが…

「瑠璃…これ」

「玻璃…良いのかい？」

「ええ。頑張って作りました」

ルリさんの家に遊びに行った時の事。
二人の世界なるものを俺は目撃した。

「昨日は新月だから、君は外に出られないんじゃない？」

「踊飛さんが物を生み出す力の人を紹介して下さいましたんです」

ルリさんは玻璃さんに礼を言った。

何だろう、この空気は。

「…これ、もう食べた？」

「はい、味見で。…どうかしました？」

「…その、……………」

聞こえなかった。

声が小さいのもあったが、俺自身が聞きたくなかったのも少しある。
その言葉に腹を立て、絶交を宣言する玻璃さん。

許してくれと慌てるルリさん。

とりあえず、ここでは関係ない、なんて事はなさそうだ。

どうやらこの地獄にも、『バレンタインデー』はあるらしい。

(…なんであんな歯の浮くような会話が出るんだ、あの人達は)

聞いてた俺が照れくさく、話していた当のルリさん達は平然として
いる。

こんなにも、変わるものなのか。

性格も、言動も、立場さえも。

俺は知らず、思っていた。

(…羨ましい)

ぼうつと、二人の様子を見ていた時だった。

「あの…、ナイトさん」

「なにやってんのナイト？こんな所で」

大きな紙袋を揺らして、二人の悪魔がやって来た。

「あ、イリスさん、メシア…、いやあの二人を見てたんだ」

「二人？」

言って、メシアとイリスさんは俺の見ていた方角に目を向けた。
途端、メシアの表情が厳しくなる。

「……………ちよつとナイト、あの女の人誰よ」

「天使の、玻璃・ニーダさん。ルリさんの恋人」

「ええっ！？聞いてないわよそんな事！！」

メシアは二人の元へ走って行く。
そして大声で宣言した。

「ルリはメシアのものよ！！」

広い採石場にメシアの声が響く。
しばらく沈黙が横たわった。

「…ほらルリ。だからこれあげる」

長いと思われたそれを自ら破り、彼女は真っ赤な顔をして焦げ茶色の包みを紙袋から取り出した。

…何故だろう。ルリさんへの殺意が湧いた。
包みを渡すとすぐにメシアはこちらに戻り、

「はい、ナイトにもあげる」

同色の包みを俺にくれた。

…おかしい。ルリさんなんてどうでもよくなった。

「あらあら…、その色はメシアのお気に入りの人にしかあげないの
に」

「イリスさま!?!」

「あら…、ごめんなさいね、メシア」

そしてイリスさんも紙袋に手を入れた。

俺には手伝つたい、少し遠くのルリさん達には蠅を通して。

夜空の色をした、星の代わりにラメが光る紙包みを渡された。

「どうぞ…、妾は完全に義理ですが」

「イリスさま、当然ですよ。イリスさまの本命はあのお方だけです
もんね」

「そうよねメシア…、さて、ナイトさん」

イリスさんは、俺に声をかけ近付いた。

「少し…、宜しいでしょうか？」

それには、有無を言わせない強い語気があった。

* * *

「ナイトさん…、あの天使の方は、玻璃さんはどうやって此処に来たのでしょうか？」

やはりと言つべきか、イリスさんは俺に玻璃さんの事を問うてきた。さすが魔王である彼女だ、そういった事はとても鋭い。

「すみません。…俺が、『エトワール』で喚びました」

「無断…、ですよ。勝手な行動は慎んで下さいね、ナイトさん。貴方は既にこの地獄の者の一員なのですから」

「…すみませんでした」

厳しい表情をしていたイリスさんは、その言葉を聞いた途端、いつもの柔らかな表情に戻った。

「けれど彼女が此処へ来る事は時間の問題でしたから…、此処で採れる石の力で、何時かは」

「……………」

「しかし此の事に気付いたら…、きっと上にいる天使達は妾達を懲らしめに来るでしょう。仲間を拉致した、という事で。その時は」

「…その時は？」

イリスさんの表情は本当によく変わる。

今は何があっても恐くない、そんな不敵な顔をしている。

「妾達は…、全力で抗いますよ。」

此処最近のルリさんの顔は、此の数十年間見ていません。それに琉璃さんもとても幸せそうです。

二人の幸せは、妾達や、神であっても、邪魔をしてはいけません」

そう言うと、今度は遠くを見るような表情に変わった。

「妾は遠い昔…、最愛の人を亡くしました。愛する人を亡くす悲しみを、妾は誰にも知って欲しくないのです」

イリスさんはその長く煌びやかな髪を掻き揚げた。

一瞬表に晒された彼女の額には、閉じた目のような傷があった。

「話はそれだけです…、手数をかけました」

俺は一礼して、イリスさんの元を去った。

数歩歩いた時、か細い声が聞こえた。

「ツキ…、そうですね？」

* * *

今年の『キューピッド』は萌になった。
私に対抗意識を燃やしていた彼女は、人を見つけては願いを叶えて
いったのだろう。

去年の私も一昨年の『キューピッド』に負けないように、今の萌み
たいに頑張っていた。
今年は、ただ早く終わってほしかった。

「紗良！あたしの勝ちね！」

「…うん」

「…どうしたのよ？テンション低いわよ？」

なんだかとても煩わしかった。
理由は、きっと…

「…なんでもないよ」

「カップルでも見たから、だからそんなに暗いわけ？」

「……」

違う。

そうじゃない。

私は、蓋を開けてしまったんだ。

「…私と衛多くんを覚えてた子がいたの」

「ウソ!? そんな事有り得ないわ!

…そういえば紗良の口からあいつの名前なんて、久し振りに聞いたわね」

「…そうだね」

彼がこの世界から消えた日から、私は衛多くんに会いたい一心で使命を果たした。

けれど、あの日から、完全に衛多くんに嫌われた日から私は、こんな風に暗かったかもしれない。

人にはれて醜態を晒すより、仮面を被って過ごした方が楽だと思ったからだ。

昔だってそうしてきた。

けれど、私よりずっと小さな女の子に、私は教えられた。

素直に思いを伝える事が、どんなに素敵かを。

「…寒い中ずっと外で、私達が近くを通りかかるのを待ってたの。私達はもう、存在していないのに…」

「…そうね。…けどアンタも一緒よ、紗良」

「…え?」

まともに見た萌は、とても温かな眼差しを私に向けていた。

「衛多の事、ずっと考えてたくせに。衛多に、傍にいてほしいくせに」

「…え？…私が？」

そうだった、だろうか。

私の中で、私がこんなになるまで、私は彼の事を思っていたのだろうか。

思い返して、導き出された答えは。

「…私」

「ん？」

「…好きだったんだね、衛多くんのこと。…衛多くんが悪魔でもなんでも、私は衛多くんが、好きみたい」

「…やっとね。鈍感過ぎるわよ、アンタは」

その時、こみ上げるものがあった。

「…萌、私、衛多くんに、会いたい…。話しかけてほしい…。一緒に、いたいよ…」

それは涙。

どうしてだろう、止まらない。

それを聞いた萌は、私の頭を撫でて言った。

「大天使紗良・セイクル様…、今日は何月何日ですか？」

「…二月、十四日…？」

「そうです。私達は何をする日でしたか？」

「…幸せを、送る日…」

そこで、私は気付き始めて来た。

「大天使様の御力は、何でした？」

「…禁呪の使用、他の天使の統率、…下界等の、行き来の自由…」

「地獄もですよ？紗良・セイクル様？」

萌はいつもの意地悪い笑顔を浮かべた。

私も、涙でぐちゃぐちゃの笑みを返した。

「そつだよ。私は、行けるんだよね」

「…そうよ。幸せ、送りましたよ、アイツにも」

「うん…！」

* * *

私を得たい幸せを、ある一つの形にする。
その為に必要な、感情の抽出。

「エクストラクト」

自分の胸の中央から、淡い色の光が零れる。
私の服と同じ色をしていた。

片手にそれを乗せ、もう片方の手で描いていく。
具現の魔法を。

「カンヴァージ」

思い描く形は、一つの菓子。
甘く、ほろ苦い味を持つ、茶色。
人の思う、心の形に。
飾りでそれを包み、隠す。

「…出来た」

割れ物を扱うように、そっと持ち上げる。
今すぐにでも、届けたかった。

「紗良！」

萌と、蒼良が走って私の元に来た。私と同じように手に包みを持っている。

「…よろしくね」

「……………」

黙りこくつたままの蒼良を、萌が小突く。

「言いたい事があるなら、早く言いなさい」

「…衛兄ちゃんに、よろしく」

萌は溜め息をついた。

「…とりあえず、お願いね。出来ればここに連れて来てよね」

「分かった」

二人から渡された包みを持って、地獄に向かった。

だが、会えない気がした。

私が初めてここに来た時、私は嫌われてしまったから。もう来るな、と言われたから。

「…どうしよう」

途方に暮れた私を見つけたのは、

「…どうしました？」

チャコールさんだった。

* * *

チャコールさんに案内され、イリスさんに会った。

「ありがとうございます、チャコールさん」

「いいえ。…では」

私とイリスさんが、部屋に残された。

「どうされました…、紗良さん？」

「…今日は、衛多くんにまた用があつて来たんですけど…その…」

「その包みを渡せない…、ですか？」

頷く。

「…この前、二度と来るなど言われましたし…」

「そつでしたね…、なら妾が渡しましようか？」

「…すみません、お願いします」

出来るなら、私が渡したかった。

渡して、一言でも謝りたかった。

私は三つの包みをイリスさんに渡し、礼を言い、部屋を出た。

帰り際、近くを歩く一組のカップルが目にと留まった。

男は綺麗な瑠璃色の髪を持ち、女は真っ直ぐで透き通った白い髪を
持っていた。

その女に、違和を感じた。

地獄にいる者は、黒や紫など、暗い色をよく着用する。

彼女の衣服は白かった。しかもどこかで見たようなデザインだった。

(そんな、まさかね)

そう、まさか天使がここにいるなど。

私はそれきり何も思わず、『天界』へ戻った。

もしもこの時、私が彼女に話しかけていたなら。

彼女が天使、玻璃・ニードと気付いていたなら。

私は何もかもを失わずに済んだかもしれない。

馬鹿な私は、その機会を殺した。

最初で最後の、大きな機会を殺したのだ。

間章（後書き）

閲覧、ありがとうございました。

間章・e n d・(前書き)

口唇の綻び

間章 - e n d -

自室でメシアの作った菓子を食べていた俺は、扉のノックに気付いて、無理やり菓子を飲み込んで扉を開けた。

「はい…」

「ナイトさん…、届け物です。紗良さ「処分して下さい」

「いけません…、それにもう二人分あるのですよ」

蒼良と萌だろう。今日はバレンタインデー、こんな俺に作ってくれたのは嬉しかった。

しかし、あいつのは食べたくない。

「じゃあ、その二人の分を下さい」

「それが…、妾はどれがその二人の物が分かりません」

「…分かりました。…ありがとうございます」

渋々、俺は三人の天使からの贈り物を受け取った。

全部食べて下さい、イリスさんはそう言って扉を閉めた。

水色と、クリーム色と、白い包装紙に包まれた箱。

俺はまず水色の箱を手を取った。

中にはビー玉より二回り小さい水色の飴がたくさん入っていた。

それはまるで、涙が菓子になったような。

一粒摘み、口に含んだ。

二分足らずで消えてしまったソーダ味の飴は、どこか懐かしさを俺

に与える。

小さい頃、時間を忘れて遊んで、ふと空を見たら夕日がもうすぐ沈む、そんな時の気持ち。切ない感情が胸に沁みた。

「淋しい、のか」

色などですぐに蒼良が作った物だと分かった。

幼い天使が、俺を恋しがっている事に気が付いた。

そう、何も悲しいのは俺一人ではない。

胸中で謝りながら、次はクリーム色の包みを開いた。

中身は何の変哲もないビスケットだった。

一口食べ、歯を突き立てる。

…堅い。

噛めなかった。

(…あいつだな)

だがこのままビスケットに負けたくはなかった。

格闘する事数十秒。ようやく欠片が舌に乗る。

瞬間、痛いような刺激が走った。だがそれは本当に一瞬で、すぐにビスケットは綿飴のように溶けた。

後には爽やかな甘味が残る。

「…萌だ」

素直じゃない奴だから、甘味は後回しなのだろう。彼女らしい。

(…それじゃあ)

残るは、紗良の贈り物。

彼女の物、というよりは不思議な菓자에興味湧いて、白い包装紙を剥がした。

オーソドックスなハート型のチョコレートだった。

量は先程の二人よりは少ない。五個程度だ。

(どんな味だろう)

萌のように、刺激が来るのだろうか。蒼良のように、物悲しいものなのだろうか。

(怒ってるからな、すごく痛いのかもな…)

一欠け、口に含んだ。

普通に甘い。

チョコレート独特の苦さと甘さが口に広がる。

気分としてはとても良いのに。

涙が、止まらない。

「……………」

音もせず、ただポロポロと零れる雫に、俺は戸惑う。

天使達が届けた不思議な菓子が感情で出来ているのだとしたら、紗良の作った物はとてもそれが強かった。

痛いのは口中ではなく、胸中だった。

強過ぎる想いは、俺の中で響く。

悲しい、苦しい、辛い。

そして、愛しい。

嚙下し、俺は言葉を発した。

「…なんだよ、一緒かよ…」

強く、強く拳を握り締め、叫びたい気持ちを必死で抑えた。
今すぐにも会って、伝えたかった。

俺も、同じ気持ちだと。

我知らず、俺は笑っていた。

間章・e n d・(後書き)

クライマックスに入ってきました！
これから先は話がとても長いですが、色々な事が明らかになっていきます。

閲覧、ありがとうございました。

九章 その1

渡してしまった。

彼は、どうするのだろうか。

捨ててしまおう、だろうか。

きっとそうなるのだろう。

それで良い。私と彼は相容れない存在だから。

胸の奥にわだかまるこの春のような気持ちも、今となってはもう、
正体不明で終わりたい。

コンコン。

「!?!」

取り留めのない考えを巡らせていた私は、突然のノック音に驚いて
しまった。

「ど…どござ」

カチャツと扉が開く音。

訪問者は、私の義妹。

「蒼良…」

「お義姉ちゃん…お話があるの」

「何？」

その応答に、蒼良は少し顔を歪ませた。

「…気付いてないんだね、お義姉ちゃん」

「え？」

蒼良は指差した。

私の、左手を。

「……」

私は声を失った。

繋がりの証の、喪失に。

「え！？嘘！？どこで、どうして！！」

「…ボク、見たんだよ」

「どこで！？」

混乱した私を落ち着いた目で見ながら、彼女は告げる。

「…いつだったかな。…覚えてないけど、黒いモヤモヤしたのが、お義姉ちゃんの指輪を持って行ったの。」

…言おうと思ってたけど、ずっとタイミングがなくて…」

「黒いモヤモヤ…『遣い』？」

「みたいだった…」

『遣い』を操るのは魔王だ。

つまり、今の魔王である踊飛・イリスだ。

「話をしに行ってくる。ありがとう、蒼良」

「うん…」

ちよっぴり、蒼良はいつもの明るさを取り戻した。
そんな彼女を見て、私も笑った。
その時だ。

コンコン。

蒼良より早いノックの音。焦っているようだった。

「どろぞ」

ガチャッとドアノブが動き、扉の向こうの誰かが顔を見せる。

「紗良さん、少し、良いですか？」

「静歌さま!」

銀髪赤目の大天使は、少し怖い顔をしていた。

* * *

私の他に、蒼良も萌も呼ばれた。
なんだか嫌な予感がした。

「…玻璃・ニーダがいません」

(…まさか)

やはりあの時の女性は玻璃さんだった。

「もっと早くに気付くべきでした。…彼女は使命をせず、未だ『ヴィーガ』のリーダーである立場の天使なので、下界にはいないでしょう。」

…いるとすれば唯一つ、地獄です」

「…!!」

蒼良が声を上げる。静歌さまはすぐにそれを問う。

「どうしました?」

「…あの、この前おね…、紗良さまの指輪を、『遣い』みたいなものが持つて行ったんです」

「それを何故早く言わないのですか!？」

静歌さまが、珍しく声を荒らげた。

優しい彼女しか知らない私達は驚き、怯えた。

萌、唯一人を除いて。

「私が地獄わたくしに行つて参ります。紗良さんの指輪も、玻璃さんも、取

り返して来ますから」

「私の指輪です。私も行きます！」

「紗良さん…分かりました」

もしかしたら、今度こそ衛多くんに謝れるかもしれない。

そして、ちゃんと自分の気持ちを伝えたかった。

たとえ、その想いが届かなかったとしても。

いつまでも、隠していたくなかった。

自分の考えをそうまとめていると、蒼良が小さな手を挙げた。

「ボクも行きたい…ボク力なら、皆の手助けが出来るよ」

「ですが…」

「静歌さま、あたしも行きます。世間知らずのお嬢様のお守りは、あたしに任せて下さい」

初めは渋った静歌さまも、萌の意見が入った途端、仕方ないといった感じに言う。

「…分かりました」

「どうしても不安なら、私も行きましようか？」

「「「！！！！?????」「」「」

突然響いた声に、皆が驚く。

その声はいつも聞いている声によく似ていた。

振り向くと、誰もいなかったその場所に、その人はいた。
蜂蜜のように濃厚な金髪。

空より、海より、青く澄んだ瞳。

光よりも眩しい、白の長衣。

どの天使よりも天使らしいその人は、清らかに微笑む。

「…大天使、審・クリストです。私も地獄行きに同行します。」

「シン：大丈夫よ。貴方はここでこの世界を守っていて頂戴」

「大天使はまだいます。悪魔達も私達の所には攻めて来ないでしょう。琉衣・スカルダもいます。」

琉衣・スカルダとは、大天使の一人で、二人目の大天使だ。

白金の髪に悪魔にはあまりいない黒い瞳を持つ、紳士的な人で、滅多にこの『天界』にはやって来ない。

どこか別の世界に恋人がいて、その人を守っているとの噂らの噂だ。彼はとても優秀な天使らしく、静歌さまはその話が出た時、迷う顔をした。

「…そうですね。では…行きましょう」

言い、すぐに静歌さまは『福音』【金糸雀】の力で、何もせずに魔法を発動する。

気が付くと、私達五人は地獄の闇の中にいた。

「暗いですね」

言うと同時に、額の前に光が灯る。

静歌さまを先頭、審さんを最後尾にして、一列になって歩いて行く。

「昔、私はここに来た事があります。その時、私の武器の一部をこのどこかで失くしてしまいました」

「見当は付いているんですか？」

萌がそう尋ねる。

静歌さまは頷いて答えた。

「ええ。綺麗な洞窟の中なのです。…彼女がいなければ、良かったものを…」

憎悪を言葉に滲ませて、尊敬する大天使は呟く。

彼女はそんな人だったろうか、私は小さな疑問を持った。

その時、蒼良の足が止まった。

「あっ」

「どうしました？」

「あの…衛兄ちゃんなら、指輪とか、玻璃さんの事知ってるかもです。地獄で生活してるんですから、きっと知ってます！」

感心したような顔をし、静歌さまは応答する。

「成程…、行きましょう、皆さん」

そして、皆足早に歩いて行く。

しかし、私一人だけがとても遅く歩いていた。

(会っの…怖い…)

握りしめた左手に、指輪はない。

* * *

最近、無意識に紗良の事を思い出す。

おはよう!…じゃ、死んでね。おやすみ

今、下界は春。

世界の平和のために、一回死んで下さい

彼女と出逢った季節。

コントラクト…殺さないよ。

そろそろ、贈り物をする季節だ。

これからよろしくね、衛多くん

渡すのはもちろん、命が吹き込まれた銀の指輪だ。

あ、八時二十五分だよ?…頑張れ衛多くん

夏も冬も、ずっと一緒にいた。

…、恨んで、ないの？

人間が俺の存在を忘れても、彼女は俺を認めてくれた。

もついやあつころしたくない…殺したくないい！！！！！！

だから、俺は彼女を支えたかった。

衛多くん！

彼女が心から大切だから。

だから、感謝と誓いを込めて、贈る。

「…受け取らなくても、無理矢理持たせる」

一人、決意していた時だった。

コンコン。

「はい？」

俺は扉を開けて、訪問者を迎えた。

俺は慄いた。

禍々しく光る紅が、そこにあつたから。

「…衛多さん、お久しぶりです。地獄での暮らしは、どうですか？」

「………何しに、来たんですか」

「皆さんと一緒に、少し用があつて…ほら」

扉を完全に開けた静歌は、闇の中で不安げにしている天使達を俺に見せた。

「…みんな」

「衛兄ちゃん!!」

すかさず、蒼良が俺に抱きついて来た。勢い余って俺は倒れ込む。

「衛兄ちゃん、衛兄ちゃんだよね？地獄で悪魔にいじめられたりしなかった？」

「そんな事あるわけないだろ、皆良い人達だよ」

来たばかりに悪魔達に敵視された事は伏せておく。
蒼良と再会を喜んでいたその時、

「フイスト!!」

頭上から拳の形をした衝撃波が来た。

「ぐわっ!!…痛えよ!!」

「知らないわよバカ!!皆は、こんなもんじゃないんだから!!」

そう言った萌は俯きながら、俺にもたれかかる。
五秒もしないうちに彼女は離れた。

「…まあいいわ。そろそろ話を始めましょう」

それに頷いた俺の目に、一瞬分のシミがあるのに気が付いた。皆が自分の心配をしてくれていた事に胸中で感謝しながら、話を進める事にした。

「それで、要件はなんですか？」

「玻璃・ニーダを知りませんか？」

「……」

沈黙が俺を圧迫する。

「…知ってるの？衛兄ちゃん……」

「……」

「早く言って下さい。私はこんな所に一秒でも長くいたくはないのですから」

イライラと静歌は言う。

このまま黙っていたら、まずい事になりそうなので、俺は言った。

「知っています…俺がここに連れて来ましたから」

「紗良さんの指輪は？」

「…同じです」

静歌は頷き、ただ一言。

「それは嘘ですね」

「!？」

俺ですよ!」

彼女がそう言う意味が分からなかった。

「指輪を盗んだのは『遣い』だと、蒼良さんは言っていました」
「違います、ボクは」

「お黙りなさい!！」

同時、静歌の背後から無数の光縄が蒼良に飛んだ。

『エトワール』に願う時間は無かった。

皆、突然の事態に動けず、ただ光の紐を呆然と見るしか出来なかった。

縄は蒼良を縛り上げ、中空に浮く。

「いつもいつも騒がしく振舞って、空気を読まない世間知らずの餓鬼めが!！さぞ幸せな人生を送って来たんだろうな!！親に愛されない、衣食住も満足に確保出来ない、蔑まれ、穢れ、惨めに生きた事が無いお姫様は良いなあ!！何不自由ない、幸せだけがあつた奴は!！」

逆上した静歌は、魔法で矢や剣を作り、それで蒼良をいたぶった。

『ゾディアック』の【回復】バイシースで傷を癒しているようだが、本人はか
なりぐったりしていた。

「静歌…さま、やめて下さいよ」

我を失っている彼女を止めようと右手を伸ばし、

「触るな悪魔が！！汚らわしい！！」

光の剣でその手を貫かれた。

その言葉に行動に、黙って見ていた萌も、目を伏せてずっと立ち尽くしていた紗良も、静歌を見た。

「…何、どうしたの皆さん？…私は貴女方が思っていた事を言った
だけじゃない！！」

「思っていないわよ。思ってたら、蒼良は彼に抱きつかない。…あた
しも、あんな事しないわ」

毅然とした態度で、萌は反論する。

萌は目で紗良に訴えた。

紗良は合った目を逸らす。

溜め息をついて、萌は一人踵を返して歩く。

「おい、どこ行くんだよ？」

「あたしは一人で行動する。追いたかったら追いなさい」

その時。

「…ううう、ううう、ううあ、あ、っ！！」

叫んだのは蒼良だった。

光縄を引き千切り、血走った目で萌を追いかけた。

そして、追いつくといつもの調子で歩く。

「今のは…」

「『ゾディアック』、【狂化】^{トウラス}。目的を遂行するまで我を失くして行動する、使う時によっては危険な力です」

ずっと皆を観ていた「神様」、シン・クリストが言った。

「…静歌・キャロル、落ち着いて下さい。私達は魔王を滅ぼせば良いのです。」

「…ここで同胞と仲間割れを起こせば、どうなるか分かりません。…裏切る可能性も出て来ます。」

「シン…分かった、ありがとう。…紗良さん、私達は魔王を探します。それでは」

二人は足早にその場を去った。

取り残された俺達は、

「…行くか」

「……」

玻璃さん達を探すことにした。

九章 その1（後書き）

まだまだ続きます！この章は異常に長いです…

その分、皆様を楽しませたいと思っておりますので、よろしくおねがいします！

閲覧、ありがとうございました。

九章 その2

闇の中、私達は歩く。
聞こえる声は靴だけ。
前を歩く黒い背中、ただ黙々と歩を進める。

(…気まずいなあ)

重苦しい空気に、目が足元を向く。

「…ねえ」

呼びかけてみる。
返事はない。

(…きつとまだ怒ってるんだなあ)

溜め息が口から零れる。

「…、嫌か」

「え？」

「俺といるの、やっぱり嫌か？」

予想外の言葉。
慌てて返答する。

「え、違うよ。気まずいなって、思ってた…」

「…、あの時は、悪かった」

振り返らず、彼は謝罪した。

「…謝らないですよ。…あれは私がいけない」

「俺が」違う」

彼の言葉を止め、私は言う。

「…衛多くんのこと何も考えないで、あんな事言っちゃったから、私がいけないの。」

「…悪魔だからって、衛多くんの手を掴んで引き留められなかった私が…。全部、私のせいだから…」

「…なあ」

衛多くんはそこでようやく振り返った。

「何？」

「なんで、そんなに自分を追い詰めるんだ？」

彼は辛そうな顔で問うた。

「…分からない。性格かな」

「違うな。それしか。自分を卑下する事しか、自分を守れないみたいだ」

「…!？」

衛多くんは続ける。

「いつも一人で重荷を背負って、助けようとする手を払って、笑って、無理してる。…そんな感じがするんだよ。そんなに二人が信用できないか？」

「そんな訳ないよ！みんな、みんな信じられるよ」

「じゃあなんで、今泣いているんだよ？」

…言ってる意味が分からなかった。

衛多くんは左手を伸ばす。

その指に銀の線は無かった。

それが私の目元をこする。

こすった指は確かに濡れていた。

(…私、泣いてたんだ)

気が付くと、自分の状態がようやく分かってきた。

視界はぼやけ、息は上手く出来ない。

思い返してみれば声も上ずっていた。

頭の中がごちゃごちゃしていて、冷静な思考が出来ない。

何をすれば良いか分からないそんな時だった。

* * *

ポロポロと、彼女は泣いていた。
決めたのに。

「彼女を泣かせない」と。

けれど彼女は、紗良は今俺の目の前で涙を流している。
そんなのは見たくなかった。
泣き声を聞きたくなかった。

雪の中、あの日のように、俺は手を伸ばす。
それで怒られても良かった。

泣く彼女だけは、見たくなかった。
紗良を、自らの腕で、包み込んだ。

「……………！」

息を呑む声。

笑い声も、声にならない声も、俺の中で響いて溶ける。
愛おしく。

「…泣くなよ…」

「……………」

無言の解答。

柔らかい彼女の栗色の髪を撫でながら、俺は問う。

「…悪魔なんかに命令されたくないか？」

「違う！…違うよ…」

「じゃあ、俺なんかに命令されたくないか？」

大きく首を振り、うなだれた天使は言う。

「違う。」

「……」

「待って、ごめんね。…ごめんね衛多くん」

俺はその言葉に引っかった。

「何で謝るんだよ」

「泣き止むの、時間かかりそうだから」

可愛らしい彼女の返事に嘆息し、俺は出来るだけ優しく返した。

「…待つよ。」

「ありがとう…」

しばらく、俺は紗良の頭を撫でながら彼女が泣き止むのを待った。

「…よしっ！元気になったよ」

パッと、紗良は俺から離れて笑った。

「じゃあ行くか」

「うん」

それは建前。本音は、「もう離れるのか？」
けど、それは言っではいけない。
我慢をしなきゃ
…

「…やっぱり駄目だ」

「え？」

衝撃。

飛び込んだのは、紗良。

「衛多くん…」

「ん？」

「…離れたくないよ…」

「…ごめん、俺もだ」

もう、抑え付ける事は出来ない。
短い時間に溜まりに溜まった想いは、
これ以上隠す事は出来そうに
なかった。

「紗良…好きだ」

「うん…」

「紗良は？」

逡巡。

後に、少し息を吸い込む音。

「私……バンクスさん？」

「……！！」

俺達は一瞬で距離を取った。

ポカンとした顔で、俺達を見ているのは。探していた天使、
ガラス・ニーダだった。

俺達は一体どんな顔をしていたのだろうか。

ガラスさんはクスクスと、笑ったのだった。

* * *

その頃。

萌と蒼良は、当てもなくガラスを探していた。

「……あたし達が地獄の事知ってる訳無いじゃないのよー！！」

「キレないでよ萌。……あ、その人に聞いてみよう！」

蒼良は元気よくその悪魔に近付く。

「…アイツ自分の立場分かってないわよね」

「すみません！あの、玻璃さんを知りませんか？」

「玻璃…玻璃・ニーダさんですね？彼女なら…」

そこで、萌は目をしばたかせた。

「…？」

悪魔も蒼良の後ろに来た萌を見た。

驚いた表情で、萌は彼女を見た。

黒縁眼鏡、一つに結ばれた三つ編みの悪魔、
チャコールを。

「スミカ…なんでアンタがここに？」

「…萌花、それはこっちの台詞よ」

蒼良は訳が分からずあたふたと両者を見比べる。

「え？え？…知り合い？」

「小さな天使さん、…萌花は私の双子の妹なの」

「余計な事言わないでよスミカ。お人好しが」

眉間に皺を多数作って、萌は「スミカ」と呼ぶチャコールを睨んだ。

「天の邪鬼なあなたに言われたくはないわ」

「も、萌…ここは感動の再会じゃないの？」

「それは出来ないのよ蒼良。生前からあたし達は仲が悪かったの。それにスミカは悪魔。天使として、見過ごせない相手でもあるの」

口だけが笑う顔は、蒼良からチャコールに向かう。

「そういえば、なんでアンタは悪魔になってるのよ？」

「…そつか。あなたは知らないのよね。良いわ、話してあげる」

眼鏡の奥の鋭い目は、現在から過去を見た。

* * *

かつて、石路^{つわぶき} 萌花という少女が通り魔として人々に殺された。傷付いた亡骸は、数時間後に家に帰って来た。

両親は泣いた。三才になったばかりの萌花の妹も泣いた。

ただ一人、萌花の双子の姉、澄花^{すみか}だけが泣かなかった。

顔を合わせればすぐに喧嘩、けれどお互いをとても大事にしていた姉妹だった。

その片割れが、殺された。

失意の中で、澄花はある考えに辿り着いた。

仮に、澄花が殺されていても、萌花は同じ事をしていただろう。

犯人を殺そうと考えたのだ。

だが、犯人は捕まってしまった。呆気なく。澄花の怒りの矛先が消えた。行き場の無い怒りは自分に向かった。片割れの恨みを晴らせなかった、自分が憎かった。何も出来なかつた自分を嘲った。駄目な姉だと自分を嘆いて、左の脇腹を裂いた。涙と血を流して、石路　澄花は息絶えた。

* * *

「…はっ、バカじゃない！なんであたしが死んで、アイツが捕まつて、アンタまでが死ななきゃいけないかったのよ！」

バカじゃない、と言いながら萌は腹を押さえて笑う。

「…そうよ馬鹿よ。学校から服から何もかも同じが嫌だった癖に、片割れがいないと何も出来なくなる馬鹿な姉よ！
…良いわ」

「何がよ？」

問われたチャコールは、左手の刺青『烙印』^{ブランド}を撫でる。

「生意気な妹を躰けてあげようじゃない」

『烙印』から現れた三日月形のブーメランごと、萌を指す。

「だったらあたしはアンタの意味不明な言動を、修正しなくちゃね」
空間に手を突っ込み、金の円月輪を萌は掴む。

「あの…玻璃さんはどうなるんだよう…」

おろおろと、蒼良は小さく呟いた。

* * *

萌とチャコール、二人の力は互角だった。

初めてなのに、最初からお互いの力量を知っているかのように、彼女等は戦っていた。

萌は『タレイア』を飛ばし、『エウプロシユネ』で惑わし、守り、『アグライア』で捕縛しようとする。

対するチャコールは、ブーメランに時折炎を宿らせ飛ばすだけで、全ての攻撃と防御にそれを使った。たったそれだけなのに、手際は鮮やかであった。

戦いは長く続き、見守る蒼良はこれがずっと終わらないのか、と思っていた。

その時だった。

「…ははっ！どう、あたしの『エウプロシユネ』は！？」

あたしの『アスファルトに染み込んだ血』と、『人のどす黒い感情』から生み出したのよ！」

「…すごいイメージね。ワタシのは、ただ名字と名前の意味からだ
けよ。天使のあなたみたいに色々な事は出来ないわ」

「それは可哀相にね!!!」

そう言い萌は『エウプロシユネ』を走らせた。

【スバイ隠密】の力が黒い砂粒を隠し、敵を確実に仕留めにかかる。

勝った、萌がそう思った瞬間、

チャコールがブーメランを空に放った。そして『烙印』を撫でる。
途端、

ズン!!!

と音と共に、見えない圧力が来た。

「!?!」

萌はその圧力に足が耐えられず、膝を着く。

一人立ち尽くすチャコールの背後で、鉄球に姿を変えていた『エウ
ロプシユネ』が落ちた。

暗い床が重さにひび割れる。

「…ワタシの名字は侘月^{わびつき}。仮名はブーメランを、真名はブーメラン
から発する光の重力。

月の前に侘びるのよ」

「洒落た名前じゃない、澄花。けどそれじゃああたしを倒せない」

「…名前もあるのよ、萌花。ワタシは侘月・チャコール。…『チャ
コール』の意味、知ってる?」

数瞬の間の後、萌はその目を驚愕で見開く。

「…！」

「そう、『炭』。相手を消し炭にする炎の力は、名前からなのよ」
言って、足取り軽くチャコールは萌の元へ歩く。刺青をなぞり、赤い炎をその手に灯した。

「さあ、消えて。姉の思いを分かってくれない妹は、ワタシの前から」

真つ赤な左手を、チャコールは振り下ろす。
だが、

「待ちなさいよ、澄花」

「！」

チャコールの動きが止まった。本人が意図した訳ではない。

「動けない…なんで？」

「忘れた？あたしの武器の力。【隠密】よ？
…完全に相手の知覚の外にいる事が出来るの。視覚、聴覚、嗅覚、
触覚、味覚…は関係ないか」

フツと鼻で笑った萌は言う。

「知覚できるあたしには見える。あたしの可愛い『エウプロシユネ』は、今アンタを縛ってる！」

姿を現したそれは、細く長い漆黒の鎖となって、チャコールを拘束していた。

「いつの間に…」

「アンタがグダグダ喋ってるから悪いのよ。アンタの名字の力でこの子が落ちたのは知ってるでしょ？」

その後すぐにアンタに絡まるようにしたのよ」

萌はチャコールを『エウプロシユネ』で振り飛ばし、自分から遠ざけると指を鳴らした。スライムのように音を立てずに速やかに、黒い砂粒は萌の元へ這い戻った。

「…アンタが本気を出すなら、あたしも本気で行くわ。フェアに行こうじゃない」

そして、静かに彼女は言った。

「…『グレイス』」

それを合図に、『エウプロシユネ』が動き出した。『アグライア』、『タレイア』に絡まり、形を成していく。やがて、『アグライア』は真っ黒く染まり、『タレイア』は自身を頂きに置いた杖になった。

「これがあたしの本来の武器、『グレイス』。能力は分解してる時と一緒に」

「…けど、そんな状態で戦える訳？」

確かに、今も萌は名字の真名の力で地に伏している。
しかし、それがどうしたと言っかのように、その顔は笑っていて、
後ろを振り返らず、萌は蒼良に叫んだ。

「戦えるに決まってるわ。…蒼良!!」

「はいっ!？」

まさか呼ばれるとは思っていなかった蒼良は、頓狂な声を上げて返事をした。

「【狂化】を渡さない！」

「え!?!ダメだよ!」

否定の声に、猫撫で声で萌は言った。

「…言う事聞かないと、どうなるか分かってるわよね、蒼良ちゃん
…?」

「…はい」

「鬼ね、萌花…」

「それでもしないと、お人好しは考えを変えないからね!」

地面を削って、黒い珠が萌の手に渡る。

それを彼女が握り締めた瞬間、黄色い瞳から正気が消えた。据わった目で、真つ直ぐにチャコールを見つめたまま、体が動いた。

「!?!」

ぎこちなく、足を笑わせながら彼女は立ち上がり、歩く。

「止まりなさい!?!」

その言葉と共に、偽りの月光が輝きを増した。

だが、萌は止まらず更に、加速した。

「何やってんの萌花!?!自殺行為よ!?!」

「…チャコールさん、ボクのその【狂化】はね…、本人が目的を達成するまで、止まらないんだよ…」

「そんな…!」

チャコールに迫りきっていた萌は、杖を振りかぶり、高速で降ろす。チャコールはなんとかそれを避ける。

当たらなかつた『タレイア』が、地の底の床に当たる。

その時、

バキバキイッ

「…!?!?」

杖は折れていない。

「…今の…」

「…骨が折れた音だね。あの状態は、加減が出来ないから…」

「…っ!!」

チャコールは恐れを覚えた。

あれに掠りでもしたら、という純粋な怖れと、やられなければ止まらず、妹が傷付くという恐れを。

だからと言って、退けなかった。

真名を使つては彼女の足が持たない。だが今止めては確実に自分がやられる。

偽名では手加減を知らない彼女にブーメランを壊され、彼女自身も腕が壊れるだろう。

「なら…!!」

左手を撫で、炎を出す。自身の最大級の規模で。それを投げつける。

萌は当然防衛行動に出た。『エウプロシユネ』の強さが混じった『アグライア』が、炎を防ぐ。

だがそこでチャコールの計算が狂った。

『アグライア』が炎を掴んだのだ。

「!!!??」

萌は掴んだ炎をチャコールに飛ばした。

火球が黒衣の少女に迫る。

自身の炎で勢いを削ぐが、消す事は出来なかった。圧倒的な質量の火が、チャコールにのしかかった。

「…うっ、あぁ…」

痛みにもがくが、戦いは終わらない。

ゆっくり、萌は歩み寄り、チャコールの上に乗る。

「萌…！」

「萌、花…、い、いやぁ…っ…！」

降り上げた『タレイア』の刃が、チャコールの首に向かい、落ち、
触れ、

そこまでだった。

九章 その2（後書き）

先の気になる展開で終了です！
待て、次回！（笑）

閲覧、ありがとうございました。

九章 その3

「……………つ、…?」

堅く閉ざした目を、うつすら開ける。

割れた眼鏡のせいで最悪の視界の向こう側に、萌がいた。

首の『タレイア』は押しつけられたままだが、赤い雫は一滴も付いていない。

代わりに、降っていた。

透明の雫が。

「バカじゃない…、バカじゃない!?!」

「……………なんでよ…」

「どうしてあたしなんかの後を追って!自殺なんて、自殺なんてしたのよ!?!」

チャコールは萌から目を逸らす。

「…言ったでしょ。あなたがいなきゃ、ワタシは何も出来なかったって」

「あたしは殺された!ある意味しよがなかったの!?!けどアンタは!澄花は生きられた!?!」

「……………」

『グレイス』が戦意の喪失で結束を失う。

カラン、と軽い音を立て、『タレイア』が黒い地を転がる。
『アグライア』からは色が抜け、その色の元である『エウプロシユ
ネ』は所在なく漂っていた。

「だからアンタはバカなのよ…姉のアンタばかり、妹みたいに甘え
て頼って…一人で生きられも出来ないで…」

「…萌花…」

「…うっっ」

そこで【狂化】の効果が途絶えた。

萌の目的が達成された事で、黒い珠は萌の手をすり抜け、持ち主の
元へ戻る。

それはつまり、本来の体の状態に戻ったという事。

骨の折れた腕が、悲鳴を上げ始めたのである。

加えて、チャコールの真名の能力は未だ重力を作り出していた。

「萌花!?!」

「…痛い…痛い…いたいよお…っ、うわあああぁん…」

(あ、萌花の骨、確か折れてた…)

火傷だらけの手を動かし、『烙印』を撫で、真名の力を解除する。
かけられていた負荷が消えた。

「…ごめんね萌花。…ワタシが、本当に馬鹿だったよ…」

「うえっ、うっ、うっ、お姉ちゃん…」

赤く爛れた腕で、子供のように泣く妹・萌。
彼女を、姉　チャコールはあやす。
温かなその情景を、蒼良が優しい目で見つめていた。

* * *

「…はいっ、終わり。思ったより酷くなかったみたいだね」

「…ありがとう」

「素直じゃないわね、萌花は」

「^{アンタ}澄花は黙ってなさい」

傷を癒し。一息ついた蒼良、萌、チャコールは、ようやく本題に入る。

「あの、玻璃さんはどこへ行ったか知りませんか？」

「玻璃さんは…先程言おうとして、萌花に邪魔されました」

「もう良いじゃない。あの時一応言いたい事は言ったんだから」

溜め息をつき、チャコールは続きを喋る。

「そうね。彼女はルリさんと一緒に、向こうにある洞窟の方へ行ったわ。二人で石を探りに行くって」

「ルリ…あの伝説の『アルタイア』のリーダー!？」

「うそっ!？ボクサイン貰わなくちゃ!」

突然天使の二人は頓狂な声をあげる。

一人ついていけないチャコールは、蒼良に尋ねた。

「…『アルタイア』って?」

「えっとねチャコさん、『アルタイア』っていうのは、下界や地獄の監視をする組織の名前なの。」

そこで昔瑠璃・アイズって人がいて、すごく色々な事や物を見付けてたから、伝説って呼ばれてたの」

顎に手を持っていき、チャコールは思案に耽る。

「なるほど…けれど、ルリさんとその「瑠璃」さんが同一人物の可能性は低いんじゃない?」

「上の世界じゃ、玻璃さんと瑠璃さんはとても仲が良くて有名だったの。一緒にいるなら、瑠璃さんは「ルリ」さんしかないのよ!」

黒い床に座り込んでいた蒼良は立ち上がる。

「行こうよ!善は急げだよ」

そして小さな天使はあらぬ方向へ走って行く。

「あ、蒼良さん反対ですよ！」

「あのバカ…追っつわよ澄花！」

「言われなくても」

悪魔と天使の双子の口元は、かすかに綻んでいた。

* * *

「覚えてる、シン？私達がここで魔王を倒した時の事…」

「ええ、とても。彼を出し抜き、彼奴が死んだ瞬間の貴女の恍惚とした表情は、とても美しかったですから。」

「だって嬉しかったんですもの。神でもない私が、魔王を倒したんですから。…おかしくなったあの女の行動に興が冷めましたけど」

ぼんやりと石が光る、地獄の洞窟。

そこに二人の男女がいる。

金髪は銀髪のコロコロと変わる表情に顔を綻ばせていた。

「…目を、抉り出しましたからね。彼が死んでもずっと一緒だとでも言いたいんでしょうか…。」

「私は無理です、あんな事。死んだら人の本質は変わらないけれど、何もかもを忘れ、外見も性格も変わり、他人を愛してしまう…耐えられませんわ」

「だから貴女は転生しないのですね？」

深く頷く女は、紅い眼を悲しみで満たす。

「…はい。下界は辛いですから。それに比べて、貴方がいる世界はとても優しい。それに、私には下界へ行く理由がありませんから」

「…それは、どういう事ですか？」

「…『神の恋人』である私が、恋を決してしない筈の私が…、貴方を愛してしまっているからです」

沈黙。

その時、ふいに女が屈んだ。

「あ、ありました。探し物」

「…片割れですね。見つかりましたか。」

「はい」

嬉しそうに微笑む女。静歌は、胸元の十字架『ユダ』に、探し求めていた小さな石を嵌め込んだ。
くすんだ色をしていたその石は、嵌った瞬間七色の光輝を放つ。

「『ユダ』に、核である『パウロ』が戻り、『イースター』が始ま

る…、行きましょう、シン。楽しい祭りを始めに…」

「あまりはしゃいではいけませんよ。貴女の事です、また見境無く人々を殺してしまうでしょうから」

「まあ、殺人ではありませんわ。…神の代理人である天使による、制裁です」

そう言って笑う彼女は、穢れを知らない乙女にしか見えなかった。

* * *

「…という訳なんです。 玻璃さん、帰りましょう」

「……………」

俺と紗良は探していた天使、 玻璃さんと偶然会い、 紗良はその場で説得を開始した。

心に訴えかけてくる彼女の話は、 使命とやらに長く赴いてきた事を 感じさせ、俺は彼女が只幸せに日々を過ごした訳ではない事を悟る。 恐らく、生きている時を含めて、彼女の人生は嬉しい事より辛い事の方が多かったのだろう。

交渉の方は上手くいっていなかった。

俺が玻璃さんでも同じ事を言うだろう。

ようやく会えた想い人を残して、元居た世界に帰れと言われたら。

「嫌だ」と、拒否の意を。

「玻璃さん、帰りましょう?。」

「……………」

そこに。

「おや、どうしたんだいナイト君?。」

「…あ」

説得の最中、ルリさんがやって来た。方向からして、洞窟から出て来たらしい。

「二人で石を採りに行って、中々帰って来ないから今探してたんだけど…何かあったのかい?。」

「あの、玻璃さんを説得しているんです。∴上の世界に帰ってくれるように…」

説明をしたのは紗良だ。

それを聞いたルリさんは、その精悍な顔を厳しくする。

「なんだって!? 何故彼女はあの世界に帰らなければならない!? 彼女がここに来て何をしたんだ!?。」

「瑠璃…っ!。」

俯いていた玻璃さんは、ルリさんが来たのを見て彼に駆け寄り、抱き付く。

怯えた表情の玻璃さんは、ルリさんに懇願した。

「瑠璃、私、もうどこにも行きたくない。あなたと離れ離れなんてもう嫌なの…っ…!」

「玻璃…」

互いを抱き締める二人を見て、紗良が眉根を寄せる。

「困ったなあ…、一度『墮落』した悪魔が、天使に『昇華』するのは大変だし…」

「ルリさんの事、知ってたのか？」

「まあね。元天使で、玻璃さんの為に贈り物をしようと考えて、『墮落』したのは有名な話だもん」

そこで俺は、「贈り物」で思い出す。

俺が持っている武器『エトワール』は、玻璃さんの物だという事に。

「あの、玻璃さ「玻璃さん避けなさい!!」」

飛んできた声は、洞窟の方から。

紅い眼は、遠く離れていても禍々しく光っているのが分かる。

鬼気迫る顔でやって来た大天使は、紗良にも命令を下す。

「何をやっているの貴女は!!早く玻璃さんから悪魔を遠ざけなさい!!」

紗良は一瞬戸惑いを見せ、俺の服の袖を引っ張った。

助けを求めているのが、自分の事のように理解出来る。
だが。

「まあ、なんて汚らわしい！！洗い流しなさい、今すぐ！！」

紗良本人ではなく、静歌の【金糸雀】で、浄化の魔法が紗良の指先にかかる。

更に静歌はルリさんを睨んだ。背中から白い光が迸り、それはルリさんを弾いた。

「瑠璃！！」

「…るり…瑠璃・アイズ？彼が？」

…随分とここの生活に慣れてしまったのね。誰だか分からなかったわ」

「「「！！！！！！！！」」」

俺、紗良、玻璃さんは息を飲む。

俺だけでなく、思っただろう。

静歌・キャロルは、こんな人だったろうか、と。

誰もその場を動けなかった。

どうする事も出来ず、ただ立ち竦むしかなかった。

その時だった。

「妾の治めるこの地で…、何をしていますか？」

鈴の鳴るような、か細い声。

強い意志を乗せたその言葉が、俺達の呪縛を解いた。

「イリスさん…」

紗良のほっとしたような響きが、静歌の怒りを煽った。

「紗良さん…貴女は、あの女の味方ですか？」

「え？そんな…」

「では、貴女の先程からの態度は何ですか？」

ふうっ、と小さな溜め息が静寂をかき消す。

優しく微笑みながら言ったイリスさんを、女神と思っただのは俺だけだろうか。

「マリア・ブレス…、あなたのその威圧的な態度なら、誰でも今の紗良さんのような態度になると思いますよが」

「五月蠅い気違い！！その名を口にするなあっ！！！！」

叫ぶ静歌の顔をはっとした顔で紗良は見る。

「…マリア・ブレス…？あのマリア・ブレスなの、静歌さまが…？」

「どうした紗良？」

俺は喜んでいるような、恐怖しているような微妙な表情の紗良に問うた。

「…マリア・ブレス。『黎明の聖母』と謳われた天使。まだ天使が数少なかった頃、多くの救いと…破壊をもたらした、最高にして最

凶の天使。

…伝説とかつて思ってたけど、本当の事だったんだ…」

呟くように俺に説明をしながら、彼女はじつとイリスさんと銀髪
の天使 マリアを見ていた。

睨み合う二人は尚も言い合いを続ける。

「貴女は…、今も昔も変わりませんね。変わった事と言えば名前く
らいですか。生まれ変わったつもりなのでしょうが、何も変わって
いませんよ」

「黙れ、汚らわしい雌豚が。そういえば、貴様がくり抜いた魔王の
眼はどうしたのかしら？ホルマリンにでも漬けて毎日見ているの？」

「妾の…、体に埋め込みました。今も貴女を見詰めていますよ」

言って、イリスさんはそつと前髪を触る。

そこに、例の魔王の眼とやらがあるのだろうか。

「気色悪い！死んでも一緒だとも言いたいの？理解出来ないわ！
！」

「言ってなさい…、此の事は其処に居る彼等以外は全員知っていま
す」

「じゃあ私が教えてあげようかしら。聞いてましたか紗良さん、衛
多・バンクス！この魔王は旦那の目を抉って、自分の体の一部にし
た頭のおかしい女なのよ！！」

地獄に響く彼女の声が、俺達を震え上がらせる。

それは告げられた事実がおぞましいからなのか、彼女の声が恐怖するものだからなのか。

俺達には分からず、言葉さえも見つからなかった。

「フフフフツ、声も出ないみた「イリスさまをいじめるな！」

幼い声と共に、銀色の蛇が高速でマリアに巻き付いた。

一メートル半程の蛇は、瞬時にマリアを拘束し、彼女の眼前で首をもたげて威嚇する。

銀の舌の中は、闇だけが広がっていた。

「ひっ！」

そして、その瞳すらも。

「この蛇……」

「そうよナイト。ステノよ」

ステノ、それはある少女の指輪の名前。

蛇がやってきた方向から姿を現したのはその持ち主。

「メシアー!!」

「どう、メシアのステノは？可愛いでしょ？」

綺麗なプラチナブロンドを揺らして、小さな悪魔の女の子は笑った。

九章 その3（後書き）

長いですね、九章。

いつか十章になりそうな気配…

次回、お楽しみに。

閲覧、ありがとうございました。

九章 その4

紫の目はマリアを見つめたまま動かず、メシアは口だけを笑わせて喋る。

「イリスさまを探して来てみたら、ケンカする声が聞こえるじゃない。それもイリスさまが責められてるみたいな、ね。…思った通りで良かったわ」

言って、冷たくマリアを見る。

「あのさ、メシア。何でステノが動いてるんだ？」

「ナイトは分かっているはずよ？ステノの秘密。あの時ステノを見たナイトなら」

考え、俺は一つの推測を導く。

ルリさんの作った『エトワール』のように、ステノは瞳である石の力で動いているのではないかと。

「…そうか」

「分かったみたいね」

にっこりと彼女は笑い、値踏みするように、ゆっくりマリアの周囲を歩き始めた。

「…オバサン、なんでイリスさまをいじめてるの？」

「…おばさんではないのですが」

「オバサンよ。イリスさまより長く、上の世界にいるらしいじゃない」

ステノとマリアから、ぎちぎちと嫌な音がした。

助けを訴えるようにステノがメシアを見る。

ピツと指を鳴らし、メシアはステノを傍らに置いた。

「…メシアのステノをいじめないで」

「私の邪魔をするものは、たとえ畜生でも子供でも、容赦は致しません」

「そう…けどメシアはただの子供じゃない!!」

言って、少女は女と距離を取る。

二歩目のバックステップで、メシアはそのまま後方に、ステノは前方へと駆けた。

「ステノ! 『エウリュアレ』!!」

走る銀の大蛇は大きく口を開く。

先程は全く見えなかった、無数の牙のような毒針が口全体に展開されていた。

針は飛び、マリアを刺そうとする。

「子供に倒されるような私ではありません」

【金糸雀】の力で即座に展開された薄青の盾がマリアを守る。

「なめないですよ！『メドゥーサ』だよ、ステノー！！」

口を閉じた蛇は、その背を丸めた。

「何をするつもりか分かりませんが、排除させてもらいます」

魔法の剣が、ステノを狙う。

「だから言ったじゃない、なめないでって」

剣が疾る。

しかし、ステノは鱗一枚切れていない。

蛇の身を守ったのは、一対の翼。

その鱗と同色の、美しい翼がその背にあった。

「……………」

「とどめよオバサン。ステノ、『ゴーゴン』！！」

素早く身を起こした銀蛇は、その翼を広げ口を大きく開く。

銀に輝く光弾が、マリアを捕えていた。

「オバサン、そろそろ諦めなさいよ。大体なんでイリスさまをいじめてるのよ」

それに、マリアは答えない。

「もう、答えなさいよ、早……く……」

突然、メシアの言葉が止まった。
紫の瞳が、マリアの顔を映している。

「銀に、赤…」

眩いた時、

「…静歌・キャロル！大丈夫ですか!？」

ようやくシンが姿を現した。

メシアは彼を見て、やはり言葉を失う。

「金に、青……嘘よね…?」

「…メシア?」

「嘘よ…ウソ、ウソ…うそだあつ!!!」

俺はメシアに駆け寄りその肩を抱く。紗良も歩いてついてきた。

「どうしたんだよ、あの二人「一緒なの!!!」あの二人、一緒なの…!!!」

「…落ち着いて、ゆっくり話してくれる?」

静かに、紗良は語りかける。

一瞬、メシアは身を震わせたが、小声で、早口で話した。

「昔、まだメシアは赤ちゃんの頃、誰かに捨てられたんだって。それを見た人が言ってたの。」

一人は白…つまり銀の髪に、らんらんと光る赤い目をしてて、もう一人は、きれいな金髪に…冷たい青い目をしてたって…」

「それって…」

「…そう。もしかしたら、メシアの…メシアの…」

「…親…」

メシアはそれを聞く前に、目を閉じ、耳を塞いだ。

「…ステノ…」

小さな声で、メシアは銀の蛇を呼ぶ。

メシアは蛇に抱き付き、蛇もメシアを優しく包んだ。今、メシアは世界を拒絶していた。

冷えた目で、それを見つめるマリアとシンに、俺は問う。

「…なあ、…そうなのか？…お前達はメシアを「そうです。」

問いに即答したマリアは続ける。

「…仮にも私は大天使。それが子を成した。おかしいでしょう？大天使に限らず天使は、種の保存など有り得ない。

なのに、この私が、過ちを犯してしまった。…この事実が消したかっただのです」

「…だから、ここにメシアを…」

「転生の可能性は考えましたが、転生は意志有る者しか出来ません。

ある程度の年齢に達しないと行えないので…」

「その後どうするつもりだったんですか」

マリアに代わって、シンが口を開く。

「…自我が芽生えたら、転生させようと思っていました。しかし、子供は私達の顔を知らないのです。だから、もうこのままで良いと思います、今日まで何もしなかったのです。」

「…、勝手ですね」

「何か言ったかしら」

「ええ…、言いました」

折角話が終わりそうだったのに、またイリスさんとマリアの目から火花が散った。

その時、マリアの目が唐突に動き、紗良に留まった。

「え…」

紗良の目から正気が消える。

「命令です、紗良さん。あの女を殺しなさい。」

「……分かりました…」

「マリア・ブレス…、貴女、なんて事を…」

嘆くイリスさんに嫌な笑いを向け、彼女は言う。

「戦いましょう。それなら話に決着がつくでしょう?」

「……………」

俺には、どうする事も出来なかった。

(非力だ…)

刺青が彫られた左手を、強く握り締めた。

* * *

光弾が飛ぶ。光縄が唸りをあげる。

それら全てを黒衣の女は避ける。

俺はそれがイリスさんの名字の能力「踊飛^{よっぴ}」だと分かった。
イリスさんは回避のプロなのだ。

(…名前と、真名は何だろうか?)

ぼつと、ただ黙って立って成り行きを見ていた。
何もせずに。

俺は今、する事があるはずだ。

怯えるメシアの側にいてやる事。

魔法にかかった紗良の目を覚ます事。

マリアとイリスさんの戦いを止める事。

たくさんあるのに、それら全てを俺はやるつもりはない。

(なんでだ…?)

疑問に思つが、行動には移さない。

「…昔の君は、何処に行つたのですか？堤 衛多…。」

「…あなたは」

「こうして君と話すのは、初めてですね。」

メシアの父、神と名乗っていた天使は、傷ついたような表情で話す。

「…私達は、彼女を殺す事も出来ました。」

「…!!!」

「けれど、やはり自分達の子なのです。情があります。それに人殺しは罪。出来る訳がありません。」

天使とはいえ、もとは人。

人としての感情が彼にある事に、俺は少し安心を得る。

「メシアは初めて俺に会つた時、俺のおいが嫌だと言いました。まだ少し残っていた、上の世界のおいが付いていたんだと思います。けど…。」

「けれど？」

「普通、赤ん坊の頃に嗅いだにおいなんて覚えていませんよね。…物心ついて、そのにおいを嗅いだ事があるなら嫌だと言えるでしょうけど…」

シンさんは俺の仮説に、目を閉じて答えた。

「…鋭いんですね。…確かに私達は姿を偽って会っていましたよ。声をかけて、少し遊んでやる程度のもでしたが。」

「…シンさん…」

「メシア、下界で「救世主」という意味でしたね。…此処での名字は？」

「…『巴女』、です」

反芻したシンさんは、美しい青の目をメシアに向けた。

「上での彼女の名前は、『濟世・クリスト』です。名字は「神の子」、名前は「世を救う」という意味です。

此処でも彼女は救世主の名を持っていたんですね…。」

「…シンさん、仲直りしましょう、メシアと。それから、これは俺個人の意見ですが…上の、『天界』の人達に自分が神でない事を言った方が良いです」

「…何故でしょうか？」

メシアでなく俺の方を向いたシンさんと目を合わせ、俺ははっきり

と言った。

「神がいなければ彼等が天使ではないと、誰が決めましたか？」

「……………」

シンさんは一度黙ったが、言った。

「…分かりました。それならば少しマリアとも話した方が良さそうですね。…堤 衛多、彼女達を止めましょう。」

彼の言葉には力があつた。

俺はそれに勇気づけられたような気がして。

「はい！」

ようやく、動き出せる事が出来た。

* * *

私の意識の上に、大きくて重いものがある。

自分が壺の中身だとするなら、壺の上に大きな石が載せられた感じだ。

表に出られない、のだ。

ただ傍観するだけ。

戦う自分を。

静歌さまが何も無い空間から、白い炎を喚び出した。

イリスさんがギリギリまで引きつけて、横に回避する。

そこに、私が鎌を振るいに行った。

イリスさんは横に倒れるように避けた。

そこに静歌さまの光縄が飛んで来る。

イリスさんはある程度転がり、立ち上がる。

後退りながら走る方向は、私。

当然操られている私は鎌を振った。

一瞬の隙を突いて、イリスさんは私の懐に入り込んだ。

鎌は光縄を断った。能力が、光縄を光に還す。

その間に、イリスさんは私の元を離れ、距離を置いていた。

「随分と、お疲れのようですねキチガイさん」

確かに、イリスさんは肩で息をしていた。

だが、イリスさんは柔らかく笑い、言い返す。

「…それは、これを着ているからです。重いのですよ、これ」

自分の服を指差すイリスさんに、静歌さまは冷たく笑う。

「なら脱ぎなさいな。大して変わりなどしないのでしょーけど!」

その言葉にイリスさんは応じ、漆黒色のワンピースを脱ぐ。

服の中央を走るファスナーを下まで降ろし、服を放る。

数瞬ワンピースは宙に浮き、重力に引かれ、

耳を聳する落下音を立てた。

「……」

静歌さまが呆気に取られる。
私も意識の底で驚いた。

(…何、あの音…)

その思いが聞こえたかのように、イリスさんは語る。

「夫が…、肌を見せるなど言うものですから。風が吹いても見えな
いように、結構な重さのワンピースを特注で作ってくれたんです」

ほんの少し頬を染め、肩を解す。

ワンピースが落ちた地点の床には、ヒビが入っていた。
軽装になったイリスさんは言う。

「さあ…、続きを始めましょうか」

* * *

どれ程の重さだったのだろう。

重いワンピースを脱いだイリスさんはとても軽々と回避をしての
けた。

時に空に浮く程の軽さは鳥のようで、重いワンピースは鳥籠のよう
に感じた。

静歌さまの自慢の光の触手が追いつかない。

操られている私の足も、追いついていなかった。

「じつ…のお！ちょこまかと蛆虫があっ…!!」

「蛆虫…、妾は好きです」

「知るかぁ！！！！」

叫びと同時に、静歌さまの触手から、光の棘が放たれた。

イリスさんは後退し、重いワンピースを自分の目の前に持った。

棘はイリスさんに向かって行く。大半はワンピースに当たり、頭上や足元に来た棘は全て避けた。

「…ふふふフフフ。私の魔法を嘗めていらっしやるのかしら？」

攻撃はそれで全て終わった訳ではなかったのだ。

漆黒の大地から、闇色のドレスから、

蒼白の蔓が伸びて来た。

「…！！」

蔓はイリスさんが避ける間もなく成長し、あっという間に彼女を絡め取った。

「…、くっ」

「うフフフフ。私の縄と絡めた『ブライア』はどうかしら？」

（…静歌さま…おかしいよ、ここに来てから…）

何も言えない今の自分が嫌でたまらない。

あの時の私とは違うのに。

止めたい。静歌さまを。

助けたい。イリスさんを。
破りたい。この呪縛を。

「紗良!!」

(…!!)

呼んでる。

喚んでる、衛多くんが。

(…行かなきゃ、行かなきゃ!)

何かが、ひび割れる音がした。

「…!魔法が…」

今、私のすべき事は、イリスさんを助けて、
静歌さまを止めて、
衛多くんに告げる、ただそれだけ。
気付けば、私は叫んでいた。

(…うわああああああああ… ああああああ!!!!
「!」

私は頭の片隅で、瓦解の音を聞きながら、走った。

暖かい視線が当たっているのが分かって、私は少し、微笑んだ。

九章 その4（後書き）

まだもう少し、話が続きそうです。

紗良や衛多と一緒に、最後まで追いかけてくれると嬉しいです。

閲覧、ありがとうございました。

九章 その5

人形のままの紗良が嫌で、思わず叫んでしまっていた。だが意味はあったようだ。

紗良は魔法の呪縛から解き放たれ、弾丸のように走り始めた。

笑みが顔に浮かぶ。紗良も小さく笑った。

紗良は真っ直ぐにイリスさんの元へ走り、その茨の蔓を無に還した。泡のように呆気なく消える蔓の中から満身創痍のイリスさんが姿を現す。

「紗良…やはりお前も地に堕ちていたか!!!」

マリアはそれを見て憤慨し、『福音』の力で無詠唱の魔法を放つ。

二人の元へ向かうは、白い津波。

さすがにその制御は大変なのか、向けた手を下ろさなかった。

その時、

「あつ！」

メシアが声を上げた。

ずっと、蛇に包まれていた、大天使の子が。

その目には光が戻っている。

「…あの人の後ろ…、放つても…」

見ると、マリアの後方から、人がこちらに向かって来ている。

それは、悪魔。

いつか、俺が初めて地獄に来た時、俺に刃を向けた奴。

名を、確か。

「弦技…ギョウジデイルム…」

彼がマリアを殺しに、走って来ていた。
メシアが頭を押さえ、また呟く。

「…あの人…おかあさん…助けなきゃ…けど…天使は…」

「メシアー!!」

「!!」

俺はメシアに呼びかけ、正気を取り戻させる。

「…なに、ナイト」

「今、お前はどうしたいんだ？」

「…っ」

メシアは揺れている。

「俺は、どっちでも良い。けど、お前は後悔しない方を選ぶよ」

「…うん」

しばし俯き、

メシアは走る。蛇の背に乗って。

「ステノ、おかあさんを助けるよ!!」

そして黒瞳の銀蛇はその巨大な口を開ける。

「『メデューサ』!!」

メシアの号令が発され、ステノは銀の翼を広げた。
向かう先はマリアと、イリスさんと、紗良。

その美しい翼で彼女達を守るつもりなのだろう。
だが、それを見て動く人がいた。
シンさんだ。

「メシア!!何をしようというのですか!!」

俺達の会話を当然ながら聞いていなかった彼は、メシアを止める為に走った。

俺も彼の行動を警戒して、走る。

シンさんが指を鳴らすと、どこからか三羽の鳥が光を纏って現れた。
鳥は喋った。

「なになに?しんさま?」

「ボクラナニヲスレバイイノ?」

「命令早急依頼」

三羽の鳥は口々に喋り、主の命令を、待つ。

「…私の娘を止めて下さい。如何なる手段を使ってもです。…プリ
ースト、貴女はあの翼を消しなさい。」

「りょうかい！」

舌っ足らずな喋り方をする小柄な鳥は、体長より長いトサカのような毛を靡かせ、途轍もない早さで向かって行った。

「ロウ、貴方はマリアの後ろの悪魔を止めなさい。」

「リョーカイデス」

どこか片言な話し方の鳥は、長い嘴を行き先に向け、小さなロケットのように向かう。

「…ブツダ。貴方は私と一緒に彼女を止めます。」

「了解」

堅苦しい口調の大きな鳥は、シンさんの髪程の長さの尾をたなびかせ、共にメシアの元へ行く。

ブリストと呼ばれた鳥は、ステノの体の真上に来ると、一粒、涙らしきものを零した。

それが翼に当たった瞬間、展開していた翼は消え、ステノは腹から黒い大地に落ちた。

低空飛行だったのが幸いし、怪我などはなかったようだが、速度は格段に落ちた。

「…！！何するのよ！！！」

メシアがそれに怒り、また銀蛇に号令を飛ばす。

「『エウリユアレ』！！！」

瞬間、何が起こったのか分からなかった。
津波を目の前にしながら、尚も防御の為の魔法を詠みあげ続ける紗良も。

敵対する者を嬉しそうに眺めるマリアも。

心配そうに紗良を見ていた傷だらけのイリスさんも。

彼女達の元に向かっていた、俺も。

体を動かせない、デймも。

遠くに吹き飛ばされ、今ようやく戻って来た玻璃さんとルリさんも。

そして、小さな少女とその供の蛇も。

誰も、何も、何もかも。

ただ、三羽の鳥と、金色の髪の大天使だけが、寂しい、悲しい顔をしていた。

シンさんは数歩、移動していた。

メシアの正面から、背後に。

少女には風穴が開いていた。

腹の真ん中、ちょうど一羽、鳥が通れる大きさに。

血が、今、

体外を流れた。

「メシア!!!!!!」

イリスさんと俺が、叫ぶ。

「『ブロードビルド・ローラー』が一羽、
【真理^{トゥルース}】、自分が最善
と思う事を最上の方法で行う力、です。」

静かにシンはそう呟き、彼の恋人の元に向かう。

だが彼より早く彼女が向かい、

俯いたまま彼の頬を叩いた。

小気味良い音が響く。

「…マリア？」

「何て事をしたの！…！」

シンを一喝、彼女は言う。

「貴方、何をしたか分かっているの…？子殺しよ！？殺人よ！？何が最善よ、最上の方法よ！…！最悪で、最低の事をしているじゃない…！」

「……」

マリアは涙を流しながら、真っ赤な顔をして叱る。

「あの子は…！濟世は…！私達を助けようとしたの…！飛んで向かったのはあの蛇の翼で私達を守ろうとしていたからなの…！全てから私達を救おうとしていたの…！」

「…マリア、私は…」

「言い訳なんか聞きたくないわ…！」

涙混じりの声は、嗚咽に変わる。

「助けなさいあの子を…っ、濟世を、メシアを！私達の娘を…！」

そしてマリアは膝から崩れ落ちた。

ただ、嘆き続ける。

シンは彼女を抱き締め、絶望の表情で呟く。

「私には、出来ない、救えない…、あれが、最上だから…」

それを見る三羽が彼等の元に集まり、声を発した。

しんさまどうしたの？、ナイトイルノ？、号泣停止、と。

最悪の、展開だった。

* * *

メシアは呆けた顔のまま、動かない。

虫より小さな呼吸と心音だ。

もうすぐ、彼女は死ぬ。

「…どうすれば…イリスさん…？」

「ごめんなさい…、ナイトさん。妾の真名は蠅を操る事。…意味がありません」

そう言つて額を見せる。黒いカーテンのような前髪の奥には金に光る目玉が付いていた。

大事なものを見せるようにそつとそれを見せた彼女の揺れる目には、これは大事な人のものだ教えてくれた。

おそらく、彼女の亡き夫のもの。

不思議と気持ち悪いとは思えなかった。

「…この眼も同じ力です…、お役に立てず「イリスさん」

彼女を呼ぶ、凜とした声。

その主は、紗良だった。

「大丈夫です、私がやります。…衛多くん、メシアちゃんまだ生きてるよね？」

「…ギリギリな」

「なら大丈夫。…私が生かす」

そして彼女は、胸の前に手を組んだ。

目を瞑り、祈るように。

瞬間、彼女の背中から光が迸った。

強い光だった。闇に慣れきった目に、それは痛かった。

光は形を成した。

それは翼。

白く、大きな、羽。

「紗良、それって…」

「…私の『福音』、【丹頂鶴^{クレイン}】。…綺麗でしょ？」

確かに、綺麗で、声が出なかった。

ただ首をがくがくと縦に振ると、天使はくすりと笑った。

それはとても、可愛らしかった。

「じゃ、メシアちゃん助けるね。…ねえ衛多くん、どうして私の『

福音』が鶴なのか、分かる？」

「…さあ？」

「残念。…見てて…」

紗良は翼で自分ごと、メシアを抱いた。
翼の光が少し強くなる。

温かさが空気を伝ってこちらまで来た。

数十秒、それだけで、メシアの治療は終わった。

体に開いた穴は消え、呆けていた顔は血の気が戻り、今は眠っている。

だが。

「…衛、多くん。…鶴の理由、これで分かったかな…？」

言い終わった瞬間、翼は消え、

腹に風穴の開いた紗良がそこにいた。

『鶴の恩返し』。

他者を救う代わりに、自らが傷付き、やがて愛する者の前から消える。

悲しい鶴の姿がそこにあった。

そして、紗良は倒れた。

* * *

「紗良、紗良あつー!!」

俺は無意識に叫んでいた。

その声を聞き、静歌とシンはゆっくり、琉璃さんとルリさんは少し早足で、そしてようやくこちらに来た蒼良、萌、チャコールさんが駆け寄って来た。

「…! 紗良さん…」

「…何故、このような事を…」

「お義姉ちゃん!…何で、どうして?」

「…酷いわね。早く回復しなきゃ」

琉璃さんが、魔法を唱える。

しかし、風穴はあまり塞がらない。

「…どうして…?」

「…私がやってみます。プリースト、お願いします。…ロウ、悪魔にした命令を解いてきなさい。」

ロウは真っ直ぐディムの元へ飛んで行き、プリーストはパタパタと可愛らしく飛び、紗良の腹の上に涙を零した。
だが、

「…治らない…」

ルリさんが呟く。

「まさか…誰か、探知の力がある者はいませんか？」

シンが問い、蒼良が手を挙げ【計測】ライブラを発動する。
そして出された結果は、

「…お義姉ちゃんから、生命力が計れない…」

最悪だった。

「…そんな…じゃあ紗良は…」

「套生さん。貴方の名の力は、何ですか？」

「へ？」

今までずっと黙っていたチャコールさんが、俺に問う。

「確か、仮名は…」「生を套^{かさ}ねる」、では？」

「ナイトさん…、やって下さい」

「早く！紗良が死んでも良いの!？」

イリスさんが、萌が、俺を急かす。

頷き、震える手で『烙印』を撫でる。

青く、刺青は淡く光り、力を俺に与える。

両の手は、紗良の手を握った。

力を込める。

俺の中から何かが、流れ出て行く感覚。

前に、無理矢理に取られた時より、とても穏やかに生命力は消えていく。

どこか、心地良くも感じられた。

「…みんな、お義姉ちゃんのが生命力が、増えていつてる…」

それを機に、再びリーストが涙を流す。

風穴はゆっくりと小さくなっていく。

これで良かった、かのように思えた。

「んっ…」

「紗良!？」

倒れ、意識を失っていた紗良が目を覚ました。

「紗良、大丈夫か？」

両手に力を込め、俺は彼女に聞く。

「…うん。ちょっとお腹痛い、けど…」

「もう少しだから。今治すからな!」

「無理だよ。」

耳を疑った。

彼女は語る。

「…審さんがやった攻撃は、物理的なものだけじゃなかった…」

「…どういう事ですか、シンさん」

彼は俯き、言う。

「…私の『福音』の力、【ウェアウルフ狼人間】です。その力は混乱、攻撃した者に、死んだと思わせる錯覚を見せるのです。」

「…？」

「…自分が死んだとおもっ…たら、皆、生きようと…しなくなる。そういう事なんだよ…」

途切れ途切れに、紗良はそう言う。

やがて、傷は完全に塞がった。

必死に俺は生命力を注ぐ。

俺の予測ではそろそろ助かると思っていた。

「…みんな…生命力が、お義姉ちゃんの、生命力が…」

紗良を見ていた全員が、【計測】の表面を見る。

皆、息を飲んだ。

「蒼良、どういう事よ。…生命力が全く増えてないじゃないのよ！
！」

「ボクだつて分かんないよ！！傷も塞がったし、お義姉ちゃんも意識がある！」

「じゃあなんで「私が、生きたくないから、かも…」」

弱弱しく、彼女はそう言った。

皆に見つめられる中、ゆっくり深く息を吸いながら、彼女は話す。

「もう、楽になりたい…、色んなものに、振りまわ、されたから…」

「何でだ？紗良は、そんな目に合っていないだろう？」

「合ってたよ。…私の過去、…生前に」

小さく首を動かし俺を見た紗良は、聞く。

「聞いてくれる？…長くなる、けど…」

「聞くよ。時間なんて、俺達には関係ないんだからな」

「そうだね…。ありがと、衛多くん…」

暗い地獄の天井を見ながら、紗良はゆっくりと過去を話し始めた。

九章 その5（後書き）

九章長いですね…

書いた作者もびっくりです（笑）

途中で後半が十章に変わるかもしれませんね。

閲覧、ありがとうございます。

九章 その6

初めから、彼女の人生は悲しいものだった。

親の、望まない妊娠。

父親は当然墮ろせと言い、金を置いて消えた。

なので紗良は父親をしらない。

希望を見失いかけた母親は、どうにか紗良を心の支えにして、十月十日彼女を待った。

生まれた彼女を見て、母親は、彼女を受け入れなかった。

後日、聞いた話によると、自分の中からゲテモノが出てそれを信じなくなかったからだそうだ。

退院してすぐ紗良は、祖父母に預けられたそうだ。

それからおよそ十四年間、紗良は祖父母と共に暮らした。

祖父はよく酒を呑み、祖母はよくそれをたしなめていたそうだ。

母は、自分がいない時に祖父母に会いに行っていたが、養育費などは全く出さなかったらしい。

「早くバケモノは殺してしまえ」、そう言っていたそうだ。

十二の時、祖父がアルコール中毒で他界した。

それから二年後、祖母が脳卒中で死んだ。

親戚はどこも引き取りを拒否した。母はそこで初めて親らしく、彼女を受け入れた。

だがそれはうわべだけだった。

「私がこの手でバケモノを殺す」、日々虐待が待っていた。

世間に高校へ行ってない事がバレたらおかしく見られる、それだけで紗良は高校の入学を許された。

母は何も期待などしていなかった。望んでいたのは娘の死だけだった。

一番学費が安い高校へ入った。毎月適当に金を渡され、母は遊びに行っていた。

家事らしい事はまるでしていなかったと言う。

そして紗良は、小学校の頃から度々いじめを受けていた。

皆、必ず母譲りの綺麗な髪が気に入らなかつたらしい。

小学生の時は日々罵詈雑言を浴びせられた。

中学生の時は面白半分髪を切られた。

高校に入ってもいじめは続いた。

学生であつた九年間で、彼女の意志はとても弱いものになつていた。

それに苛立ち、やはり容姿の事を言われ、始まつたのだと言う。

中学より、更に陰湿に痛めつけられ、支えになる筈の家庭は無に等しかつた。

紗良の心身はボロボロだつた。

ある日の事だつた。

その日も殴られ、蹴られていた紗良は、このままじゃいけないと思い、逃げだしたそつだ。

校舎の最上階、五階から下駄箱のある一階まで、階段を駆け降りていった。

すぐ後ろから、同級生が走つて来る。

スピードを速めた途端、

紗良は階段を踏み外した。

まだ、踊り場に近かつたら、どうにかなつたかもしれない。

しかし、十段ある階段の、上から二段目で踏み外したそつだ。

紗良は階段を転がり落ち、勢い良く壁に頭をぶつけた。

打ち所も最悪だつた。後頭部、だつた。

血が流れた。

それを見たいじめっ子は、その場から逃げた。

紗良が頭を打つた階段の踊り場は、人通りが少ない場所だつた。

人が来ないのを考えて、その場所に彼女を呼んでいたのだから、あの意味当然と言える。

誰も来ないまま、日だけが去り、血が乾き、やがて、
紗良は短い生涯を終えた。

事故で死んだので、彼女は天使になった。

天使になったばかりの頃は、まだ自己主張はまるで無かった。
だから紗良は、自分を作った。

天使らしく。明るく振る舞い、笑顔を絶やさず使命に生きた。
神様としてのシンにも認められた。

半年後に、孤児みなしことなった蒼良と義姉妹となった。

蒼良の扱いには困らなかった。むしろ自分が支えられたと紗良は言
う。

それを聞いた蒼良は、そんな事言わないでと、紗良にすがって泣い
た。

そうして、天使になって大体一年が過ぎ、昇進の道が開けた時、
紗良は、俺に出会った。

* * *

「…生きてれば、あの時死ななければ、…私は、会えてたのかも…」
「けど、今会ってるから良いだろそんな事。もしかしたら会えてな
かったかもしれないしな」

「…ね、みんな。ちょっと、良い…?」

掠れた声で、紗良は呼びかける。

そして、一人一人に問い、伝える。

一人目は、美しい金髪の大天使。

「審さん…神、様。…天使は、死んだらどうなるのですか…？」

「…強制的な転生となります。」

「…そう、ですか。嫌だなあ…。神様、あなたの、存、在が…私の、希望でした…」

「…貴女の頑張りは私の誇りです。…まだ貴女は終わりません。」

二人目は、豊かな銀髪の大天使。

「し、ずかさま。天使は、恋、いけませんか…？」

「…恋は、いけません。それが愛になれるなら、私は良いと思いません。恋は偽りの力を与え、愛は真の力を与えると、私は考えています」

「…そう、ですか。静歌、さまは、私達の、も、くひょうです…」

「有難う御座います。けれど私は貴女よりもっと高い所にいます。

…貴女は此処で立ち止まっている人では無い筈です」

紗良は、その手を伸ばし、未だ眠る小さな悪魔に微笑む。

「メシア、ちゃん…許して、あげてね…。家族は、笑ってるのが…一番だから…」

綺麗な白金の髪を撫でると、メシアは小さく身動きした。

三人目は、白髪の少女。

「…ガラスさん、なぜそん、なに、人を愛せるんです、か…？」

「天使とか悪魔とか、私達には関係がありませんから。好きだから、ずっといる。それだけですよ」

「…ずっと、仲良く、いてください、ね」

「だったら…ずっと、私達の事見てて下さい、紗良さん…」

四人目は、夜空色の青年。

「ルリさん…、ガラスさんを、嫌いになった、こと、ありますか…？」

「ないね。だってガラスは、今ここにいるガラス・ニーダー人だけだからね。彼女っていう存在が、僕は好きなんだ。嫌いになんて、絶対ならないよ」

「…うら、やましい…、私は…出来なかった…」

「まだ出来るよ、君にも。だから生きるんだ、紗良ちゃん。」

伸ばした先の手、メシアを抱く者に、紗良は問う。

五人目、漆黒の魔王に。

「…イリス、さん…そこまで、なぜ、一途に人を、…愛せるんですか…？」

「居場所のなかった妾を…、受け入れてくれたのがツキ、妾の夫でした。それだけじゃない、彼は何もかもを妾に与えてくれました。…妾はそんな彼の愛した、此の世界を守っていきたいのです。…いつか、転生した彼が此処に戻って来るまで、妾は他人に流されてはいけないのです」

「…まつ、てて…くれます、かね…？」

「ええ…、紗良さんの想い人はきつと。けれどその人と、此処で一緒に生きましょう？」

六人目は、黒衣の少女。

「チャコールさん…、残されたら、やっぱり、…悲しいの…ですか？」

「はい、当然です。それは此の場所でも同じです。」

「…私…分からないです…誰も、悲しま、なかった…」

「そう思うのは、貴女が残す側だからです。…残される側になれば、分かります。」

七人目は、黄色い髪の大親友。

「…萌、死んだ時の、事…覚えてる…？」

「覚えてないわ。もう知る必要なんて無いから。そうでしょう？」

「…ふふ。…ごめん、萌。…私、…また、知っちゃ、う…」

「バカ言ってるんじゃないわよ！元氣出さない、起きなさいよ！！」

八人目は、翠の目の義妹。

「…蒼良、これ、から…頑張れる…？」

「無理だようっ…出来ないよう！！…お義姉ちゃん、何で死のうとするの！？」

「…疲れ、たの。…お願い…頑張っ、て…」

「やだ！！やだよ！！お願いだから、側にいてよお義姉ちゃん！！」

「あの…」

そこで、喋る男が一人。

「…僕、無視ですか…？」

九人目、弦技・ディム。

「こんな時になんですけど…あの、本当に、本当に疲れたんですか？楽しい事とか嬉しい事、無かったですか？…恋とかも、しなかつたんですか？」

「…ありまし、た…けど、初、恋ですけど…。伝えたら…もし、ダメだっ、たら…」

「そんな事、生きてる時にたくさんあります！僕だって、好きな人

…いますから。
つられても、諦めなければチャンスはありますから。それは、辛い事ではないですよ。」

「…そうですね…あり、がとう……がんばり、ます……」

もう耳を澄まさなければ聞こえないぐらいの音量だった。
その声で、紗良は、俺を呼んだ。

「…衛多くん」

「なんだ？」

左手は紗良の手に握らせたまま、俺は彼女の口元に耳を近付ける。
彼女の声を、聞き逃さない為に。

「もっ…近付い…」

「あ、ああ」

言われた通りに、もっと耳を、頭を近付ける。

「…も…と…」

「これぐらいか？」

あまりに小さな吐息が耳にかかるぐらい、顔を近付ける。

「…………ち…いて…」

「ん？」

聞き辛く、思わず正面を向いた。

口の動きを見れば、分かると思っただからだ。

目の前には、真っ青な紗良の美貌。

色の無い口唇が笑みを作る。

美しいと思えば俺は動けなかった。

俺の左手から、手が抜けた。

上から何かに押さえつけられ、俺は、気が付けば、

紗良の唇に触れていた。

何かは紗良の手だ。そう気付いたのは、幸せそうに目を瞑る彼女を見たからだ。

一瞬、目を閉じた。

悲しいくらい、温もりが感じられなかった。

腕は落ちるように拘束を解き、俺は唇を離す。

今更、顔が熱くなった。

「…衛、多くん…、き…て…わたし…」

「…うん、何だ？」

紗良の頬も、少し、染まっていた。

本物より美しい、桜の色に。

「…だい、すき…だよ。… た、くん…」

「ありがとう、…もう、喋るな」

今、俺は…
どんな顔をしている？

「なか…で…いた、く…、」

「…紗良、…もう喋るな、…お願いだから…」

「あえ、…かった…。ず、と…え…たくん…、あ、い…て…」

彼女の唇が、動かない。

「…紗良？」

色が消えた。その頬から。
温度が、無くなった。その手から。
左手に力を込める。だが、力は注がれない。

「紗良、さら、…おい、紗良…！」

力を込めて、手を握る。

その手は、握り返してこない。

そこで、俺はようやく、現実を知った。

「…っ、紗良

…！！！！！！」

その目はもう二度と、俺を映さなかった。

九章 その6（後書き）

長い九章、読破ありがとうございます！

- e n d - の後、最後となります。

もう少し、二人の物語にお付き合ってください。

閲覧、ありがとうございました。

九章 - e n d - (前書き)

永訣の温顔

九章 - e n d -

紗良は、その後、小さなたくさん光になって、『天国』である上に行った。

人は死んだら星になる、という言葉、衛多はふと思い出した。

失意とたとえようもない悲しみの中、皆はようやく立ち上がった。

まず、静歌が目覚めたメシアの前に歩み寄り、彼女と視線を合わせ
て言った。

「…御免なさい」

「……………」

メシアは目を逸らした。

そして、小さく言う。

「夢で言われた、綺麗な髪の天使さまに。笑ってるのが一番だって

……………、メシアの、上での名前って、何？」

「…!」

静歌は、その言葉に驚く。

決して聞かれる事はないと思っていたからだ。

「…済世。済世・クリストです。」

静歌の代わりに、シンがメシアの真の名を告げる。

「世を治める、世を救う、神の子の名前ですよ、メシア。」

「…改名できないのかしら。だって…濟世は、天使の子だもの」

白金の髪を揺らし、メシアはそう言い、笑う。

涙を流し、静歌はメシアを抱き締めた。そして、メシアもつられて、泣きだす。

優しく、二人を包むシンがいた。

* * *

チャコールは、泣きじゃくる萌と蒼良を見ていた。

自らは泣かず、本を読むように、事実を淡々と受け止めていた。

だが、ふいに腰を上げ、地獄の闇に消えようとした。

部屋に帰ろう、彼女はぼんやりとそう思っていた。

その時。

「…チャコ!」

「…」

彼女を呼ぶのは、デームだ。

彼しか、彼女の事を渾名で呼ぶ者はいない。

「…何?」

どこか冷たく聞こえる声色で、チャコールは聞く。

「いや…その…なんていうか…」

やはり。

彼はその声をそのまま受けた。

どこかに落胆を感じながら、チャコールは口を開く。

「用が無いなら、…話しかけな」やっぱりな

「…何がよ」

「お前、なんか…無理してるよ」

「…何、言ってるのよ」

チャコールは、黒縁眼鏡の奥の壁を横にずらした。
それは、彼女の、嘘の癖。

「ほら、目逸らした。…お前、嘘つくと目逸らすの、知ってるか？」

「え」

「知らなかった、みたいだな」

してやったり、というような、悪戯が上手くいった子供のようにな、
ディムは笑う。

「…そんなの、偶然よ！」

顔を真っ赤にさせ、チャコールは声を荒げた。

「偶然じゃない。…俺は、ずっと見てたから」

急にディムは真顔になり、そう言った。

彼は一步、足を前に進めた。

彼女は一步、足を後ろに進めた。

彼は進み、彼女は退いた。

「どうして逃げるんだよ。…どうして、嘘つくんだよ」

「…逃げてない。…嘘なんか」

「そうか」

素早く、ディムは『烙印』を撫でる。

そこから伸びる、黒い糸。

見ようによっては髪のようなそれは、すぐにチャコールを捕える。

ディムの仮名、『弦技』の力だ。

「…ディム、離しなさい。ワタシはこれを燃やせるのよ」

「…離さない。」

糸がチャコールを捕えたままディムの手に戻る。

そして、二人は向かい合った。一人は糸に捕らわれたままで。

ディムは手を伸ばした。

チャコールの頬に。

「ちょっと…何するのよ」

チャコールは静かに怒る。首を振って手を避ける。だが、その手の力は強く、チャコールの頬を無理矢理ディムの方に向かせる。

「こっちを、向け」

「向いてるわよ」

「向いてない！目が逃げてる！」

言われて、また気付く。

「…どうしていつも、ちゃんと見てくれないんだよ…」

「…教えてあげましょうか？」

「…？」

ディムの手に、液体が当たった。チャコールの頬に、涙が落ちていた。

「ちよっ、チャコ」恐いからよ！」

「…え？」

ディムは言葉を失くした。

「深く関わりたくないからよ！皆消えてしまっから！」

「……」

「何もかも！人も世界も…、未来も愛も「なくならない！」

勢いをなくしたチャコールは、小声で反論する。

「…嘘よ。今も、そうだったじゃない…」

「…お前は本当に何も見てないな。…諦めると思うか？あいつ等が」

そこで初めてチャコールは、初めてデイムの顔を見た。

彼の顔は真っ直ぐ、チャコールを見ていた。

「どんな事をしてでも、あいつ等はまた会おうとすると、俺は思う。

…多分、俺も」

「？」

「…本当に、見てなかったんだな…。…好きなんだよ。チャコの事が。」

息を飲む彼女に、デイムは寂しそうに笑って言った。

「…ごめん。…忘れて」

そう言って、デイムは糸を解き、どこかへ行った。

「…デイム…」

答えは言えず、少女は一人残される。

* * *

背を支えていた、双子の姉が消えた。

萌は支えがなくなった事で倒れ、横になったまま、ただ涙を垂れ流していた。

さっきまで隣に倒れていた筈の、あの子がいない。

笑顔が素敵な、桜色の少女が。

それを改めて認識し、また萌は泣く。

(…だから、ずっと一人でいたのよ…)

人間でいる時は、その性格のお陰で、人があまり寄り付かなかった。

ネメシスの姓になったのは、偶然だがとても良い姓だった。

ずっと使命一筋に生き、人と群れず、関わらない。

そうして来たのは、この時が恐かったからだ。

(あの…バカ…)

口が悪く、性格も顔もきつく、天の邪鬼な自分。

争いを好まず、美人で人柄も良く、とても素直に感情を出していた少女。

(死ぬのは、あたしの方でしょう…?)

未だ、萌は親友の死を受け入れられずにいた。

だが、彼女は聞いた。

「ふえっ…ひっ、お、ね、え、ちゃん…」

少女の、義妹の泣く声を。

(…そうだ。あたしが、このあたしが、泣いている場合じゃない…)
ゆっくり、萌は手を付いて起き上がり、涙を拭く。

(あたしは誰かと一緒に泣くより、誰かの手を引っ張ってやるようなヤツよね)

そして、少女のいた場所を見る。

(そうよね？紗良…)

その瞳に、いつもの強気な光が戻った。

* * *

涙が止まらない。

拭いても拭いても、また零れ落ちる。

やっと止まったと思っても、義姉を思い出すと、また流れる。ずっと、蒼良はその繰り返しだった。

(また…一人だ…)

長く天使をやって来て彼女に、これ程の悲しみを感じた事はなかった。

少女がやって来て半年、「家族」だったサンデルの者が蒼良以外全員死んだ。

その際、今のように泣きじゃくる蒼良を、少女は引き取ってくれた。サンデルの者にも、兄弟はいた。下界にも、双子の、彼女を知らない兄妹がいる。

けれど、こんなにも絆を感じた事は、蒼良は初めてだった。

「…蒼良っ」

ぶっきらぼうに、呼ぶ声があった。

「もえ…」

「あーあーヒドイ顔。こすりまくるからよ、まったく」

「そう、いう、萌も、ひどい顔…」

「アンタよりマシよ」

そう言い、蒼良の顔を拭った。

「…さて。神様に頼みに行くわよ」

「…神様でも「出来る」コトはあるの」

蒼良の言葉を遮り、萌は言う。

「孤児みなしこのアンタを、あたし達ネメシスの一族が引き取ってあげるわよ。」
他のヤツに反対されても、あたしは一人になっても、アンタをずっと妹にしてやるわ。喜びなさい」

「萌…」

「…姉妹きょうだいになっても、あたしは呼び捨てなワケ？」

目を赤く、そして頬もほんの少し赤くして、萌は言った。
蒼良は笑って、萌の隣に蒼良は立つ。

「そんなわけないよ！萌お義姉ちゃん」

（ありがとう、紗良お義姉ちゃん…）

その顔に、曇りはない。

* * *

衛多は未だ立ち上がれずにいた。
初恋だった。

いつだって、初恋というものは、心に残る。
それはきつと、叶わないものだからだろう。

稀に叶うケースはあるが、その場合も、初めての恋人、という形で心に残る。

だが、彼のは明らかに叶わないものだし、心に残る要因も、ただの別れではない。死だ。

衝撃は、強過ぎる。

「……………さ、ら……………」

心をも、壊す程に。

胸に去来するのは、彼女との思い出。

春休み、自分を狙いにやって来た。

初夏、義姉妹ゲンカに巻き込まれた。

夏休み、日々を楽しみ、

秋、騒動を共にやり過ごした。

初冬、自分の為に戦った。

年の終わりを共に過ごし、

年の初めに離れた。

そして、一ヶ月程前、恋を知った。

たった一ヶ月で、ここまで気持ちが大きくなるものなのか、と衛多は思った。

だが、と彼は考え直す。

(…大体、一年だな…)

一年越しの想いと気付き、また彼は頂垂れた。

もっと早く、気付いていれば。

もっと速く、伝えていれば。

(…こんな事、には…)

嗚咽も漏らさず、彼は泣いた。

「…衛多・バンクス。」

「…はい」

呼ぶ声に、涙声で返した。

呼んだのは、天使の青年。

「こんな時に聞くのは、心苦しいのですが…。」

「…何ですか？」

俯きながら、彼は問う。

滲んだ焦点は、今も変わらない。

「貴方が悪魔の力を使った際、貴方は【計測】の中に入っていたのを覚えていますか？」

「…はい」

天使達の世界はとても自由だ。

自らの能力を超える事をしなければ、基本的に何でも出来る。

本来一人しか入れない【計測】の中に、人が二人程入れるのもそれのお陰だ。

「其の時、蒼良・サンデルは貴方の情報も見たそうです。…其の時に…。」

「…?」

「衛多・バンクス、いや、堤 衛多。貴方の生命力が減っていたそうです。」

衛多の涙が止まった。

シンはそれを見て笑いながら言う。

「貴方が力を注ぐのを止めた時には、普通の人間と同程度の量だったそうです。」

「…それ、って…」

「はい。貴方は転生出来ません。記憶等は当然魔法で消すので引き継げませんが…」

その情報は、嬉しくもあり、悲しくもあった。

転生すれば、もしかしたら、転生した紗良に会えるかもしれない。

だが、転生すれば、紗良や他の全ての人と過ごした衛多の記憶は失われる。

衛多は、揺れた。

「……………」

「私は此れから、永い時間をかけて天使と悪魔が共生出来るように努めます。悪魔の転生も、容易にしていきたいと思っています。」

私は、一人目の悪魔の転生者を、貴方にしたいのです。私達天使と、濟世達悪魔の架け橋となった、貴方に。」

返事のない衛多に、シンは続ける。

「…良い事を、教えましょうか？」

「…!?」

「私は『ブロードビルド・ローラー』…『天賜器』の力で、世界、いや、宇宙全ての事柄を知る事が出来ます。どんなに些細な事でもです。」

「…それが、何ですか？」

訊ねた衛多に、思いがけない情報が舞い込む。

「紗良・セイクルの魂の行き先が、十六年前と、判明しました。」

「…!?」

「魂は自由。何者にも、時でさえも縛る事は出来ません。そして、彼女の向かった先は、彼女の生まれた家でした。」

更に、神を名乗っていた男は続けた。

「補足ですが、…十六年前の彼女の家の住所は、貴方の街です。」

「え…!?」

思わず声をあげた衛多に、シンは微笑んだ。

「彼女の家庭の事情は先程聞いた通り複雑ですから、きっと紗良・セイクルはやり直しに行ったのでしょう。」

「…どうします、追いかけますか、堤 衛多？」

「…そうします。…また、紗良に会えるなら…」

(それに…)

覚悟を決めた理由は、シンの話だけではなかった。

衛多の腰のポケットに手を当てた。

渡せなかった指輪が、まだそこにあるのだ。

「分かりました。では、上へ行きましょうか。」

「はい」

シンは指を鳴らした。尾の長い光の鳥が傍らに現れる。

「ブツダ。…お願いします。」

了解、とでも言うように、シンの周りをぐるりと一周し、ブツダは飛んだ。

光を散らしながら、シンを起点として円を黒い地に描く。

ある地点で舞い、不可思議な紋様を書き込んだ。

そうして巨大な魔法陣をブツダは作り、主の元へ帰る。

「御苦労様です、ブツダ。皆様、行きましょう、堤 衛多の見送りに。…トランスフェアレンス！」

彼の髪と同じ黄金色の光を発して、魔法陣は衛多達を『天界』に運んだ。

* * *

辿り着いたそこは、シンが座していた場所だった。

「ここから、転生が行えます。…やはり少し前に、魂が此処を通っていますね。」

「……」

俺は固唾を飲んだ。

「…と、父様。転生する時に危険はないわよね？」

ステノで影を作り、それでも眩しいのか、目を細くしているメシアが言った。

「大丈夫です。今までそのような事は一度もありませんよ。…天使に限っては。」

「それじゃ、保証もなんて出来ないじゃない！」

萌が逆上する。

「きつと、大丈夫です。転生を行うのはシンの魔法ですから。魔法に失敗は、今までありません。其れは私達の誇りの一つですから」

マリアは皆を安堵するように穏やかに言った。
その言葉に、皆の顔から緊張の色が消えた。
俺も、その一人だ。

「では、そろそろ行きますか。…貴方は本当に、たくさん事をしてくれましたね。」

シンが、しみじみと語る。

いつもの金の髪に、輝きがないような気がした。

「有難う御座いました、衛多さん。…それから、御免なさい」

マリア、いや、静歌が申し訳なさそうに述べる。
紅い瞳にも覇気が無かった。

「ありがとうナイト。…濟世、ナイトに会えて良かった」

メシアが寂しそうに話す。

ステノを触りながら、彼女は必死で涙をこらえていた。

「別れは寂しいですが…、いつかまた会えるでしょう。その時は、
妾の夫を紹介しますね」

イリスさんが瞳に涙を溜めて言葉を紡ぐ。
言った後、すぐに口元を押さえ、俯いた。

「澄花：チャコールの分も言っておくわ。アンタの事、嫌いじゃなかった。むしろ…会いたくなかったくらいよ！」

萌は、後半泣きながら言った。

目頭を必死で押さえながら、萌は俺をじっと見ていた。

「衛兄ちゃん…、いなくなっちゃ、やだよ…」

蒼良は既に止められなくなった涙を拭きながら、弱々しく叫んだ。
俺は、その素直な思いに応えた。

「蒼良：大丈夫、すぐに帰ってくるよ。紗良を連れて、な」

「本当…？」

「ああ。それより早く、蒼良がどこかへ行っちゃうかもしれないのが俺は心配だな」

蒼良は首を大きく横に振ってそれを否定した。

「行かない。どこにも行かないよ。」

「本当か？」

「うん。だってボクは、紗良お義姉ちゃんと、萌お義姉ちゃんと、衛兄ちゃんがいる所が家なんだもん！」

涙でぐしゃぐしゃの顔で、蒼良は笑った。

細い金髪の頭を撫で、俺も笑った。

「そうか。…じゃあ、萌と二人で留守番、よろしくな！」

「うん」

俺は蒼良と合わせていた目線を高くし、言った。

「…お願いします、シンさん」

「…はい。」

そして、黄金の光を指に灯し、彼は魔法陣を描く。

「向かう場所は？」

「俺の街、俺の生まれ育った家に。」

円が描かれた。

「何をする為に？」

「大好きな人に会い、共にいる為に。」

曲線が空に浮かぶ。

「向かう時は？」

「十六年前、最初からやり直しに。」

直線が、陣を作った。

「宜しい。それでは、頑張ってください。」

金の魔法陣が、シンの胸の前に浮かんだ。

俺は皆を見て、告げる。

「また、会おう。」

皆が頷き、俺はそれを見て目を瞑る。

「待っています、皆で。此の輪廻の途中で、貴方達を…。」
そして、来た。

「トランスミグレーション」

金色の光が、体を包んだ。
意識がどこかへと引っ張られる。

(…どこへ、行くんだろう…)

果てしないどこかを彷徨う感覚。
目を瞑っているのです、それが何かは分からない。
ただ、とても暗く、とても明るい場所にいるようだった。

(早く、会いたい…な…)

思考が曖昧になってきた。
出口が、近いのだろうか。

(それに、し、ても…長…いな…)

霞み始めた意識の中、自覚を持たずに俺は縮こまる。
その様は、無垢な赤子。
知覚もなくなってきた。

最後に感じられたのは、温かさ。

(…ね…よ……)

そして、おれはねむりについた。
かのじょに、あう、た、

* * *

「…あ。」

「どづしたの、シン？」

「…記憶を消すのを、忘れていました。」

「ふふ。…わざと、でしょう？」

「…さあ。まあ、大丈夫でしょう。…私は、信じていますから。」

それが、奇跡を生むのだ、と…。

九章 - e n d - (後書き)

お待たせ致しました、九章終了です。
長々とすいませんでした…。

次は終章、最終回となります。

二人はどうなるのか、ご期待下さい。

閲覧、ありがとうございました。

終章 - 地獄編 - (前書き)

請願の笑壺

終章・地獄編・

雀の声で目が覚めた。

日の光は白く、割と昼に近い時刻である事を教えてくれる。
目を擦りながら身を起こし、

俺の体に乗っている女の子を見つけた。

…こんな時に言うのもなんだが、可愛い。

「おはよう!」

「…おはよう」

「じゃ、起きてね。

ほら早く」

そして、勝手に取り出された寒色の布地　俺の服だ　をまとめて持
ち、

俺に向かって投げつけてきた。

「うわあブツ!」

寝返りをうつつように壁際に回避。
だが服は当たった。

鈴のように少女は笑った。

心臓が突然の事態に踊った。
バクバク言っている。

「あはは、当たった〜」

少女は他人事かのように言った。
なんてヤツだ…。

「な、何すんだお前!!」

人の部屋に、勝手に入って来て!!」

「え？」

私許可もらってるよ？」

「…じゃあ、何しに来た…？」

俺はそこで彼女の格好を見た。
制服だった。

「…部活かよ…」

「違うよ!

今日は登校日だよ!」

「…と、登校日!!?」

「そう。

まったく学校も人遣いが荒いよね!
…だから」

栗色の髪を揺らして幼馴染みは、にっこり笑って言った。

「衛多くん、一緒に学校行こう」

* * *

五分ぐらい無言で歩き、ようやく俺は喋り始めた。

「そういえばお前、何で家に来たんだ？」

「ん？」

衛多くん忘れてると思ったからだよ？」

「…そんなに信用無いか？」

「うん」

「あっそう…」

そこで、強く風が吹いた。

ゴオツと音をたてて、それは樹々を揺らす。

生えていた樹は桜。

花弁が風に舞った。

「綺麗だね！」

そう言って幼馴染みは桜吹雪の中を歩いていく。

だが彼女は唐突に歩みを止め、振り返り、笑った。

花が咲くように。

光が強さを増したように。

桜が踊る。

舞い、跳ね、廻る。

俺の中で、彼女の笑顔を引き金に。

(…ん?)

違和を、感じた。手を入れているポケットの中に。それに触れた、直後。

「…!?!?…う、うわぁぁぁぁっ!!」

「ちよっ…衛多くんっ!?!」

何だ、これは。

頭にたくさんの映像が閃く。

走馬灯のようだ。だが俺は今死ぬ目には合っていない。

それには、有り得ない映像がたくさんあった。

車に轢かれ、しかし無傷の自分。

マンションから落ち、やはり異常のない自分。

幼馴染みにそっくりな少女。

鎌。宙に浮く丸い宝石。布、白い触手。光る鳥。

真っ白と、真っ黒の空間。

そして、ここと、それらで起こる、非日常の数々。
なんだ。

どういう事だ、これは。

やがて、それは治まった。

「大丈夫？」

「ああ……」

そう言って少女 聖 紗良は、眉根を下げて、俺を見つめていた。

* * *

聖 紗良。
俺の幼馴染み。

母親に嫌われ、父親は彼女を認知していない。

中学まで育ててくれていた祖父母は他界した。

だが、何の為か、母親の家にまた彼女は住んでいる。

容姿は中の上、いや、上。

艶やかな栗色の髪と茶の目の少女。

昔はよくそれだからかわれていたが、俺が庇っていた。

今はそれもなく、元気に学校に通っている。

そして、俺の好きな人。

…の、筈だ。

変な映像を見てから、世界を見る目が変わった、気がする。

彼女に関するこの知識にも、おかしな項目が増えた。

元・天使。

俺を殺しに来た天使。

義妹がいる。

大天使になるのが夢。

神の娘を助け、死んだ。

…意味不明だ。

死んでいるなんて、もっと分からない。

だって、今彼女は生きている。

そこで、またも閃く映像。そして音声。

…貴方は、転生出来ます。…

つまり、彼女は一度死んで、生まれ変わったらしい。

…俺、自身も。

「…ん…衛多くん！」

「うおっ」

「うおって、何？あは、次移動だよ」

考え込み過ぎて、一時間目の授業が終わった事に気が付かなかった。
用意をし、教室を移動する。

「…なあ、お前はどこにいるんだっけ？」

「え？どういう事？」

「…何でもない」

「変な衛多くん」

どう言えば良いか、分からなかった。

彼女はどうかやら忘れてしまったらしい。

この、哀しくも幸せだった記憶を。

(どうして俺は、生まれ変わったんだ…?)

記憶はある。

だが、それだけではどうしようもなかった。

* * *

俺の生まれ育った家に、最初からやり直しに、大好きな人と共にいる為に。

そう決意して、転生していた。

なのに、何も出来ない、していない。

俺は思わず顔を覆った。

今は昼。

もう学校も終わり、自室に帰っていた。

「あーっ」

意味もなく叫び、ベッドに倒れる。

(バカだ。俺は)

皆に、何と言えば良いだろう。
自分に嫌気がさした。

(けど、決めたしな。…紗良と一緒に、帰るって…)

手を握り込んだ時、俺は気付いた。

「…あっ」

それは俺が天使の頃、静歌・キャロルという大天使に付けられたらしい傷。

手の平に付いた、小さな傷。

今はカサブタになっていた。

気が付くと、それは痒く思えるもので、つい俺はカサブタを剥がしてしまった。

「…それにしても、まだ治ってなかったのか…」

《…はい?》

「!?!」

頭に、声が響いた。

この声は。

「…シンさん!?!」

《…貴方は、何者ですか?何故私の名を知っているのですか?》

(あ…)

そう、これは無かった未来。

俺は、彼等に存在を知られていない。

「えっと…」

《…貴方はどうやら人間のようですが。何故今私と会話出来るのでしょうか?》

「…それは分からないんです。俺も。カサブタを剥がしたら…」

《瘡蓋、ですか。…少し動かないで下さい。》

言われて、しばらく待ち、また声が聞こえた。

《…どうやら其れに、魔法がかかっていたようですね。転生の際の不備です。今から解除「ちよ、待って下さい!」

《…?》

「今、俺とあなたは、まったくの他人です。だから、質問させて下さい。…死んだ天使と生きている天使の転生は、どう違うんですか?」

僅かな間の後、溜め息の後、声が返ってきた。

《…私達に害を成す者では無さそうですね。質問に答えましょう。大した違いはありません。ですが、死んだ天使の場合は極稀に記憶

を持ったまま転生する事は有ります。》

「そうですねか！…そういうのを思い出すきっかけってありますか？」

《…分かりません。最初から覚えている者もいれば、死ぬ間際に思い出す者、全く思い出さない者もいたり様々ですから。》

「そうですねか…ありがとうございます」

希望が見えたと思ったら、すぐ消えてしまった。
少し落胆する俺に、彼は言う。

《では、魔法を解除しようと思うのですが…、私からも質問して宜しいでしょうか？》

「はい…？」

《貴方と私は、どのようにして出会ったのでしょうか？》

俺は、紗良に出会ってから、転生するまでの話をした。
そこで初めて、俺は自分の名前を彼に教えた。

《…そうですねか。…では、私達の過ちも…。》

「過ちだなんて言わないで下さい。メシアが…濟世が可哀想です」

《そうですね、すみません。…何もかも、上手く行くでしょうか？》

俺は思わず頷いて返事をする。

「多分、いや、絶対上手くいきますよ」

「有難う御座います。…それでは、今度こそ解除致します。」

「はい」

《…堤 衛多…》

声がかかる。

シン・クリストは優しく、正に神のような優しさで言った。

《もう一つの未来、調査したいと思います。…皆で、貴方達の帰還を祝えるように…。》

「…ありがとうございます」

俺は口元を綻ばせて、そう返した。

恐らくシンも同じだろう。

そして、声が聞こえなくなった直後、手の平の傷が消えた。

それを見た後、俺は考えた。

記憶を取り戻す前も、その後も、俺は紗良が好きだ。

ずっと、この気持ちは変わらない。

(…言おう)

たとえ、冗談と取られても、悲しい結果になろうとしても、告げる事を、俺は決めた。

* * *

「はぁーあ…」

私は浴槽の中で、溜め息をついていた。
上方に留めていた髪を降ろし、心の中でカーテンを作る。
こうすると、何となく集中出来る気がするのだ。

（衛多くん、大丈夫かな…）

今朝の彼の様子は、どこかおかしかった。
突然叫び、その後は何事もなかった。
一体、何があったんだろう。

（私が超能力者か何かなら、すぐに突き止めるのに…）

自分の、湯で濡れた手を見つめる。
湯を掬う。その中に見える、自分の顔。
不安そうな、自分の顔を見る。

（本当…思っよ）

そして、

（私が天使なら…、衛多くんを救ってあげられるのに…）

来た。

唐突に違和感が脳内を駆ける。

「ん？」

同時、膨れる記憶達。

「い、や、あ、あ、ああっ！！！！」

痛い。

割れそうだ、頭が。

彼も、同じように叫んでた。

私と、同じだった。

暴れる思い出達が私を責める。

逃げ続けた自分を。

素直にならなかつた自分を。

知らないもう一人の私が、告げる。

私はずっと、一人でいると勘違いしていた事を。

やがてパズルが絵を形作るように、頭痛は治まっていった。

荒い息を整える。

暴れたせいで濡れた髪を撫でつけ、私は思考を再開した。

新たな情報も、視野に入れて。

そして、数十分後。

私は小さな自室で髪飾りを取り出した。

昔祖母が買ってくれた、不思議な形の髪飾り。

当時はそれが妖精の羽のようだと思い、毎日付けていた。

まだ少し湿った髪を、それで結う。

鏡を見る。後ろには、赤い紐で括り付けられた銀の鈴がぶら下がる

携帯電話。先程付けたものだ。

天使だった自分の姿に似せ、私は決める。

「…もう一回、言おう」

たとえば、からかわれても、ダメだったとしても。
この気持ちは変わらないから、告げるんだ。

* * *

四月二日、日曜日。

もう一つの昨年の今日、俺は紗良に会った。

この日が、俺の始まり。

だから今日も、俺は始めたい。

早めに起きて、あの日と同じ服を着て。

携帯を手に取り、メールを作る。

飾る必要はない。簡潔に書く。

送った直後、紗良からメールが届く。

題名はなし。本文も少し書いてある程度だった。

おはよう、衛多くん。

ちよつと、一時に桜並木まで来てくれるかな？

何があるかは秘密だよ。

じゃ、待ってるね

あ、返信しなくていいからね。

…何だろう、この、一致は。

時刻も場所も同じだった。

更に内容も似ている。

(…会う理由も同じだったりしてな)

有り得ないと思いつながら笑い、俺はその時を待つ。

* * *

四月二日、日曜日。

もう一つの去年のこの日、私は衛多くんに出会った。
今日が、私の始まり。

だからこの日も、私は始めたい。

早めに起きて、あの日と似た服を着て。

携帯を手に取り、メールを書く。

飾る必要なんかはない。簡単に作る。

送信した後、衛多くんからメールが来た。

無題で、本文も少ししか書いていなかった。

おはよう。

今日の一時に桜並木まで来て欲しい。

大した用じゃないけどな。

待ってるから。

変身はしなくていいからな。

…何だろう、この一致は。

時刻も場所も同じだった。

更に内容も似ている。

(…会う理由も同じだったりしてね)

そんな事ないと思いながら笑い、私はその時を待った。

* * *

午後一時十分前、俺は家を出た。

まだ少し肌寒いが、春の気配は日に日に強くなっている。

桜並木に足を一步踏み出すと、そこは完全に別世界のような感じだった。咽る程の桃色が、俺を包む。

時折見える空は淡い水色。

現実ではないようだった。

そんな幻想的な風景に魅入っている時、音がした。

チリリン、と涼しげな鈴の音。

誰かに呼ばれているようなそれに、俺は後ろを振り向いた。

桜が、人になったようだった。

白いカーディガン、白いブーツ、桃色のワンピース。

栗色の髪に、茶色い瞳。

そして金属の輪が跳ねる髪飾り。

天使の姿にその身を似せた少女は、変わらない笑顔を俺に向けた。

「…久しぶり、衛多くん」

昨日も会っているのに、久しぶり。

それは、つまり、

「…記憶が…、戻ったのか…？」

「うん。思い出した。…全部ね」

数歩歩き、紗良は俺と向かい合った。

「辛かったよ。今よりずっと。…たくさん、痛かった。受け入れた
くなんか、なかった。」

「……」

「けど、受け入れなきゃ、いけなかったの。…じゃないと、全部無
意味な事になっちゃうから。」

あの日私が衛多くんに出会った事も、生まれ変わった事も…」

腕を抱く彼女は確かに、全ての過去を受け止めていた。
儂く、しかし強く光る彼女に、俺は呼びかけた。

「紗良…」

「ごめん、先に言うね。…私、私も、…衛多くんが、好きだよ…」

春風が吹き抜けた。

踊る髪を耳に掛け、ほんのり染まった顔を真っ直ぐ俺に向け、紗良
は告白した。

俺は、黙る。

「えへへ。あの日の続きだよ」

紗良は小さくそう言った。

「…だったら」

「？」

言うと同時に、俺は動き出した。
腕を動かし、紗良を包む。

「あの日と同じなら、こうだろう？」

「…うん」

紗良は俺の方に顔を埋めた。

それが可愛く思えて、俺は少し強く抱き締めた。
花に似た髪の毛の匂いと温かさに、一瞬これは夢だと思った。
だが俺は、これを現実にしたかった。

「…紗良」

「…何？」

「あの時の事、覚えてるか？ 転生する前の事…」

「…うん…」

顔を真っ赤にさせて、紗良は俯く。

「…言いにくいんだけどさ…」

紗良は頷く。

「あれ、格好つかないんだよな。彼女から先にされるなんてさ」

「…かつ、かの…」

「そうだろ？」

「…衛多くんの意地悪…」

更に顔を俺の胸に埋めた彼女がおかしく、笑う。
唐突に笑いを切り、俺は紗良に聞いた。

「だからあれ、ノーカウントで良いか？」

「えっ!？」

「だってさ…」

俺は驚く彼女の顔を見ながら言った。

「あの時は付き合ってたのかなかったしな」

「……………」

「…良いか？」

「…うん」

小さく頷き、紗良は目を閉じた。

少し俯いた頭を持ち上げる。

朱に染まった美貌がそこにあつた。

綺麗だ、等と思いつながら顔を近付ける。

多少の恐怖はあつた。嫌われるかもしれない、と。

けれどそれは、あの時の彼女も一緒だろう。

それに、俺の中には今、「紗良が好きだ」という想いしかなかったから。

何も恐くなんて無かつた。

だから自分も目を閉じ、

唇を重ねた。

永い永い一瞬の後、俺は離れ、目を開ける。

口元を押さえ、困つたような表情を浮かべる紗良がいた。

「嫌だつたか？」

「…恥ずかしいだけ…」

大きく首を横に振るう彼女を見て、俺はふと思ひ出す。

「…そつだ、これ」

ズボンのポケットの中をまさぐり、同時に彼女に言う。

「紗良、目瞑つて」

「え？何？」

「良いから」

紗良は言われた通りに目を閉じた。
そして、先に自分が、その後紗良に、それを付けた。

「いいよ」

声と同時に、彼女は目を開けた。

その手には、銀色に輝くものがあつた。

彼女が魔法で作り、俺が石を嵌めた、二人で作った指輪。
俺には無色の、彼女には桃色の、透明な石が光っていた。

「これ…」

「ずっと渡せなくて…けどやっと渡せた。」

「転生を…免れたの？」

「これ、もう『天賜器』になつてるんだってさ」

「そうなんだ…ふふっ」

とても嬉しそうに、紗良は笑つた。

「能力は何だろうね？」

「それって、普段は誰が決めてるんだ？」

「能力から、皆が勝手に決めてるよ」

「…この指輪、完全に自分の為に作ったからなあ…」

しばし唸り、紗良が声をあげた。

「じゃあ、【^{エンゲージ}契約】って所かな？」

「だな。…なら名前は『ステディ』なんてどうだ？」

「何で？」

「『ステディ』の意味は、「変わらない」とか「安定した」とか…」

「とか？」

自分の顔を見られないように、俺はそっぽを向いた。
それでもしないと、言えなかったから。

「「決まった恋人」、なんだってさ」

「…そっか…よし！」

「…なんだよ」

俺の手を持って、紗良は言う。

「じゃあ今から行くつよ、教会」

「はあっ！？」

「良いじゃない、指輪だってあるし、年齢も丁度良いし」

ぐいぐいと俺を引っ張る紗良は、とても上機嫌で、輝いていて。

「俺はまだ十七だろ!！」

「早めに行つて損はないの!！」

「早過ぎるだろ!！」

誰よりも、素敵だった。

立ち止まった紗良は、俺とまた向かい合い、今度は手を両手で持った。

「私とずっと一緒にいるの、いや?」

「…さあな!！」

「あ、もう!はぐらかさないですよ!！」

「うるせーな!…もう決まってるんだよ!！」

キョトンとした顔で、紗良は俺を見つめる。

見返して、俺は宣言した。

「シンさんに、神様に宣言してんだよ!お前と一緒に、また戻るってな!！」

「…衛多くん…!！」

「…何だよ。嫌か?」

「うづん。…嬉しいよ…」

そう言いはにかむ彼女を抱き締め、キスをする。

「ね、衛多くん？」

「ん？」

「大好き」

* * *

舞い散る桜の中、一組の男女がいた。

笑う顔は天使、からかう表情は悪魔のような、互いを愛する人間達。

二人は冀^{こいねが}う。

互いと共に笑い、生きる未来を。

二人は歩き出す。

廻^{めぐ}る、この時の中を。

繋ぐ手に、二人を見守るものがあつた。

輪廻の果てに結ばれた、二人を繋ぐ、銀の指輪が。

永遠を互いに約束する、

一組の、銀^{シルバー}の指輪^{リング}が…。

S
i
l
v
e
r

R
i
n
g

f
i
n
.

終章・地獄編・（後書き）

これで、「Silver Ring」は終了です。

今まで読んでくださった皆様、ありがとうございました。

けれど、物語はまだ続きます。

「Pinky Ring」で、あなたの中で。

これからも、この物語を愛してあげてください。

「Pinky Ring」では語られなかった話や、その後の物語
があります。

なので要チェックですよ（笑）

その他の話でも、「Silver Ring」の何かが出てきたり
しますので、よろしく願います。

この話を読んで下さった皆様へ。
心の底から、ありがとう。

2008・9・25 紫花

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0616f/>

Silver Ring

2010年12月14日22時16分発行